

---

# 幻妖帝国～グリウスの章・青き黎明の灯火

暁さくや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻妖帝国～グリウスの章・青き黎明の灯火

### 【NZコード】

N5319D

### 【作者名】

暁をくや

### 【あらすじ】

宿命に挑む二人の青年の物語です。妖かしの力で支配された帝国・シェバ。運命に導かれて集う者達 戦いの末に、一人の得たものとは……

## 序章・禍き妖獣の国（前書き）

妖獣が登場しますので、ホラー系の描写が苦手な方はご注意ください。

## 序章・禍き妖獸の国

山裾に日が隠れ、余光も潰えた頃

「助けてくれつ！」

裏返つた声を張り上げながら、一人の男が馬に乗つて疾駆してきました。

必死の形相で剥かれた目は血走つてゐる。その目は辺りの何物をも映してはいな様子だ。手綱を握り締め、白い歯を剥き、ただ、ひたすらに疾走している。

両脇に畑の広がる一本道である。

辺りには民家もない。

畑に実つた果実の甘い臭いと草の香りだけが漂つてゐる。男は振り向いて、後ろを確認した。

いる

ざつと十匹だ。

飛んでいる。馬の脚にも負けぬ速さだ。

鳥である。一見して、雀くらいの大きさに見えた。

が、あのつぶらな瞳を持つ薄茶色をした小さな鳥とは、似ても似付かぬ化け物だ。

翼の先には、弧を描く乳白色の牙とも見える爪がついている。

足の先には三本の長い爪が、今にも皮膚を抉り取る鋭さでカツと開いていた。

体は艶やかに月光を反す黒。

目は、闇の中で唐紅に光る。それが人間の顔についている。人間のような筋の通つた鼻がついていて、ちゃんと鼻腔も二つある。そり立つた耳も二つある。頭皮に毛はない。

ただ口だけは人にあらず、肉食獸の牙を持っていた。

分かりやすく言つならば、体が鳥で、顔が人間なのだ。

「わああっ！」

男は振り絞るような悲鳴を上げた。鳥の化け物は時折羽ばたいて馬の尻を突く。そのたびに馬は嘶き、ますます疾走していった。

馬が大きく嘶いた瞬間、男は落馬し、地面に叩きつけられ転がった。

それを見計らつたかのように、一斉に鳥の化け物達が馬に襲いかかる。

思わず耳を塞ぎたくなるような馬の奇声が辺りに響き渡った。が、それも長い間ではない。やがて、全身の毛がそそけ立つような肉を食む音だけが、虫達の鳴く声に混じって静寂を破るだけとなつた。

男は馬が化け物に喰われていく様子を見ながら、尻餅を付いたままじりじりと後退つていった。

すぐ先にある集落から、幾人かの足音が聞こえてきた。悲鳴を聞きつけた村人達が松明を手に駆けつけたのだ。

しかし、男が安堵の溜息を吐く間もなく、鳥の化け物どもは電光石火の勢いで馬を喰らい、血で生々しく汚れた口と紅い目をぎょろりと男に向けた。

男は尻餅を付いたまま、硬直したように身じろぎ一つせず、目をきつく閉じた。

その時。

ひゅつ

と、空氣を切り裂く音がした。

じりり、と、男の足元に紅い目ついた顔が転がる。

男が恐る恐る目を開けると、黒いフレードのついた外套を羽織つた者が、闇に鈍く光る長剣を振り下ろしたところだつた。

「生きてるか、あんた」

言いながら、今度は下から剣を振り上げる。

次に襲い掛かってきた化け物が空を切る音とともに両断された。

男が何かを言う前に、化け物は次々と切り落とされ、道に落ちて、まるで火に水をかけたような「ジュツ」という音を立てて黒い塵に変わっていく。

男は急に両脇から手を差し込まれ、立たされた。

「あなたは早くお逃げなさい。あちらの火のぼうへ」

ゆつたりと落ち着いた声音が、また別の黒い外套を羽織る者から漏れ出でた。

言うが早いが、その者も剣を抜きざま振り向いて、化け物を切り上げた。

はやい。

あつという間に、十四の化け物は、黒い塵と化した。

男は全身から骨を抜き取られたように力を失って、また尻餅を付いていた。

「全く、金にならねえ事しちまつた。ま、いいか。おい、行くぜ、

ウェル」

「はいはい」

二人のうちの一人がそう言って振り向く。

口元に微かな笑を湛えていた。

闇の中に浮かぶ、白い肌に、浅紅色の唇。艶かしい女のようにも見えた。

二人は踵を返し、軽い足取りで、民家の方ではなく山の方に向かつていった。

「大丈夫か？」

ようやく駆け付けた村人が、男に声をかけた。

「あの人らは、山に入つたのか？ こんな夜に……」

「妖獸をあつという間に……？」

男は、村人達の疑問を無視し、一人が消えていく山の方をぼんやり見ながら答えた。

「助かった」

道には、いくつかの黒いしみと、血の海の中に浮かび上がる白い骨と肉の残骸とが残された。

むせ返るような血腥い臭気が辺りに漂う。

ふいに、その残骸の陰から、小さな青い光が一つのぞいた。

それは、音も立てずに、山へと向かつた一人の後を付け始めた。

「ないぞつ？」

仄暗い洞穴の中で、悲痛な叫び声が小さく木霊した。

洞穴の入り口で簾の様に垂れ下がる緑の草葉が、射し込む弱々しい曙光を遮っている。淡い光が、一つのじくごく薄い影を洞穴の岩壁に作り出していた。洞穴は平均的な成人男性が立ち上がりつてわずかに余裕がある高さで、奥行きと横幅は一人の人間が軽く手を伸ばせる程度の広さしかない。

周囲は岩石のような硬い性質のもので囲まれていた。  
冷気が小さな洞穴を包み込み、足元から深々と冷えていくようである。

「ない、ないない、ないつ！」

影の一つが冷えた地面に四つん這いになり、掌を滑りすやすりこして辺りを探っていた。

「何が、ないのです？」

もう一つの影が、焦る者の苛立ちを倍増させるようなゆっくりとした口調で問うた。

「何が、って金に決まっているだろ？」「

徐々に陽光が洞穴の中にも射しこみ、影を照らしはじめた。相手の表情すらはつきりしなかつた顔が照らし出されていく。

地面に四つん這いになっているのは、二十歳位の年若い青年・シヤオンだ。

黒く長い前髪で顔の左半分を隠している。小麦色の肌の右半分に覗く眉はひそめられ、形の良い唇は今にも悪口雑言を繰り出す用意がいつも整つているとばかりにあけられている。髪と同じ右の黒い瞳には炯々とした光が見え隠れしていた。

「それは……困りましたね」

一方、鋭い視線を投げかけられたウェルは、悪びれるふうでもな

く、小首を傾げている。

黒髪のシャオンとは対照的な金髪の癖のない長い髪に碧眼、色白な赤子のような肌、見る者の目を必ず奪い去る美貌の持ち主だ。浅紅色の唇、その両端をあげたかあげないか程のわずかさで持ち上げられた微かな笑み。達観したような顔は、ウヘルの印象を茫洋とさせ、本心を見抜く事を困難にさせているようにも見えた。

全く困った様子のない相棒を横目に、シャオンは再び地面を這いつくばりだした。くまなく狭い洞穴の中を見渡すと、今度は体を起こして自分の懐をまさぐる。

次に立ち上がって、両手で胸の辺りから衣服を叩いてみたが、わずかに埃がたつだけだ。

「畜生、あいつだ。青い目のヤツだ。くそつ、眠り込んでしまってる間にやられたんだ」

「あいつ、とは、昨日拾った、あれですか？」

「他に何がいるってんだ」

シャオンは棘のある口調で言いながら脇に置いていた剣を手にして腰に挿し、黒い外套と荷物を背に担いだ。

「後を追うぞ」

「あれの？」

「あたりめえじゃねえかっ」

声を荒げて、こつまでも座つたままのウヘルに向かつて早口で抱えた。

「あのなあ、ウヘル。あの金は、俺が、稼いだんだぜ。くつだらねえ姫様の護衛に長々と付き合つて、やつと金十枚だ。しばらく遊んで暮らせんだけ？ こんな仕事は滅多にねえ。黙つてられつかよ。何が何でも取り返す」

憤激したシャオンは最後の一言に一段と力をこめて言うと、入り口に垂れ下がる草を面倒くさそうに払い除けて、舌打ちしながら外に出た。

「まだ臭いがブンブンしてやがる

顎を引いて左右に顔を動かし、辺りを探る。鼻翼がわずかにひくひくと動いた。

「くそつ、小さい動物だと思って油断したか」

膝ほどまでに生え伸びた雑草の中を幾分か進むと森の中だ。その先は左右に獣道が延びている。

右へ行けば昨日来た道、サナオ自治区。姫君を送り届けた地だ。左はグリュック自治区。

「よし、グリュックの方だな。俺の鼻から逃げられると思うなよ」左に顔を向けて剣の柄に手を添えたまま、昨日踏みならした雑草の上を大股で進んで行く。

ウエルも洞穴から顔を覗かせた。

「お待ちなさい、シャオン」

「つむせえ。俺はウエルがなんと言つが、あの獣を探し出すんだよ」

「言つが早いが、後ろを振り返りもせずに、シャオンは森の中へと姿を消してしまった。

「全くしようのない人だ。お金と聞くと、田の色を変える……」

ウエルは深い溜息を吐きながら、同じく足元に置いていた剣を取り、荷を背に担ぐと洞穴から出た。

同時に小さく板を小突く様な音がする。

ウエルは確認するように洞穴を覗き込むと踵を返した。

ウェルとシャオンは臭いを辺りながら山を降り、山裾の森を抜け、夕刻になつてようやくグリュックの都グリウスに着いた。

ウェルは日映いばかりの黄金の長い髪を隠すようにフードを目深に被つている。背が高くなれば、ほつそりとすら見える身体は女性と見紛うばかりだ。シャオンは相変わらず黒髪で顔の左半分を隠していた。ともすれば風にあおられそうな髪を、神経質そうに左手で撫で付けて、わざと顔を隠そうとしているように見える。

「何だこの人込みはつ？　ここで臭いが途切れたら。これだけ人がいちゃあ判りやしねえ」

二人が見た光景は、人々の肩が触れ合つほどにじつた返した街道だつたのだ。

街の中央、つまりは王城に続く街道には水路が通つていて、人影が見えないのはその水路だけで、水路の左右を結ぶ小さな橋の上も行き交う人で溢れている。両脇には所狭しと露店が並び、街道を通つて他国から運び込まれた珍しい商品や食料等が並べられていた。王都の中心まではまだ随分距離があるというのに、こんな街道の外にも品物を買求める者や、商人達が集つている。

「これでは金泥棒を見つけるのは無理のようですよ。さすがのシャオンでも臭いを辿ることは出来ないでしょう？」

「畜生」

黒髪を無造作に搔いて腕組みし、シャオンはグリウスの中心へと続く街道に背を向けた。

グリュックは海に面し、背後には山脈が連なる、天然の要害に守られた国だ。北西と南東を結ぶ街道の合流地点でもあり、産業の重要な要所ともなっている。

ヨーロッパ大陸の南部で最も大きな港があるのもグリュックだ。海上からの物資も当然グリュックの都グリウスに集まる。

もともと人口も領土の割には多い。

他国の人間の出入りも多い。

その為に徹底して出入りする人間を管理する関所が街道の両端と港に配置された。

これを統治してきたのはグリュック王家である。

他国との交易を優位に進める政治手腕を持つグリュック王家は、長年に渡つてこの地を治めてきた。天然の要害の存在もあり、他国の侵略を許さぬ強力な海軍率いるグリュックは、ヨウーワの中でも一目おかれる経済や軍事力の中心的存在となつていた。

が、十五年前、不可侵伝説を持つ王家は突如として滅ぼされ、現在はシェバ帝国の統治のもと、グリュック自治区として名を残しているにすぎない。

しかし、統治者が変わろうとも、そこに生きる者達が変わったわけではない。今も変わらずグリウスはヨウーワ南方の重要地点であり続けている。

「さあ、戻りませんか。私はここにいるのは気が進みません」

「戻つてどうすんだ？ 金だつて殆どねえし、もう食いもんもねえぞ。飢え死にすんのかよ？」

「だからといって、あの珍しい動物を探すことも出来ないでしきうに」

シャオンは、歯軋りした。ウホルの戻りうといふ言葉にではない。脳裏に、可愛い泥棒の姿が過ぎた。

耳は兎ほどではないにしろ斜めに長く、顔は猫科の動物に似ている。目は薄い青のガラス玉の様で、体の大きさの割には手が長く、リストの様に柔らかで丸まつた尻尾をしていた。両手の上に乗せるとはみ出しさるが十分乗つていられる大きさだった。

妖獣のような妖しい氣もなかつた。

ただ、言葉は理解しているような素振りではあつた。

それでもまさか金を盗まれるとは考えてはいなかつた。シャオンにとって、いま何よりも信頼のおけるもの、何においても重要なも

の、それが金だ。金さえあれば食うに困ることはない。それを奪われたとあっては、何としても仕返ししなくては腹の虫が收まりそうがない。

「あれは聖靈に近い位置にいる動物で、名をヴァルといいます」  
ウェルの口調は落ち着き払っていた。フードから覗く表情は何時ものように微笑んで見える。本人は決して笑っているつもりはないらしい。

「知つてたのかよ、あれを」

「もちろんです。でもまさか、ヴァルを盗賊の手先にしているとは考えもしませんでした。あれは利口な動物です。躰によつては当然ぬすみも可能でしょう」

淡々とした声を聞いて、シャオンはまた舌打ちをして地面を踵で蹴つた。悔しさが、足元から血液を沸き立たせるようだつた。

「金十枚だぜ？ その為に来たくもねえ所まで付き合つたつていうのによ」

「サナオで私達が金を手にするのを見ていたのですよ。でも私達が山に入つてしまつたので、仕方なくヴァルを差し向けたのでしよう。山に入つて妖獸に襲われる危険を犯すほど盗賊も愚かでないでしょうから」

「へんつ  
「シャオン」

突然ウェルが声を落とし、街道に背を向けて立つていたシャオンの手を掴んで人混みの中へと足を進めだした。

「おいおい、戻るつて言つたじやねえかよ」

「黙つて。さり気無く辺りを見回して御覧なさい」

ウェルの声は冷えた氷のように冷酷だつた。

シャオンはウェルの手を振りほどき、彼のゆっくりとした歩調に合わせながら、目だけを動かして辺りを探つた。

商品を売り買いする声、他愛もない会話。肌の色の違う者、黒髪の者、金髪の者、鳶色の髪の者、老若男女、様々な人間がいる。

だがその中に、明らかに役人と思しき者が少くない数で混じっていた。

腰に剣を差し、肩から斜めに赤い布をかけている。赤はシェバ帝国の国旗の色だ。ヨウーワの南西から東部にかけての広範囲な領土を制圧した帝国の色。グリュックをも統治下においた国。

「役人？」

シャオンは眉を寄せ、あからさまに嫌悪をあらわにして言った。

「そうです。サナオにもいましたね。森を抜けた所にも小さな見張り小屋がありました。そこにも同じ格好をした役人がいましたから」「森の出口に？ 気が付かなかつたな」

「あなたは臭いだけを追つていましたからね。私が誤魔化しておきましたから大丈夫です」

「それはそれは……」

シャオンがたいした感情も込めずに面倒臭そうに返答した。

「この先に、知っている宿があるので。とにかくそこへ行きましょう」

「はあ？」

シャオンは構わず路地に入ろうとするウヘルの前に立ちはだかつた。

「ちょっと待てよ。金が足りねえよ。それにサナオに行く時に言わなかつたか？ グリュックの近くには行きたくねえから、気が進まねえつて。知り合いがいるのかよ、ここに」

「あなたがちょっとグリュックを見てみたいと言つから仕方なく山に入つたのではありませんか」

責め立てるような口調だ。

「俺の所為かい。あーあ、そうだよつ。でも俺はここが大嫌いだからな」

「私もあなたに習つて言つなら嫌いです。でも今は、役人の目が光っています。私達はグリュックに入る通行証を持つていませんからね。不審な行動は慎むべきです。それとも来た道を戻つて、また一

「通行証を手に入れればいいじゃねえかよ？」

「簡単に言いますね。領主館で身分を証明できますか？ 少なくとも私は無理ですよ」

いやなヤツ。俺だつて無理に決まつてんじゃねえか。

ウェルというヤツは、いつも涼しい顔をして返す言葉がないような言い方をする。シャオンは腹の底でこぶしを握っていた。

「とにかく役人の数が多いのが気になります。今日は夜も更けますし、明日でおしませんか」

「わかったよ。好きにしろってんだ」

そのままウェルは迷わず路地を進んで行き、中央街道より一筋奥に入つて行つた。

中央の大通りから一筋入つただけで、そこにはもう人通りが殆どない。すでに日は沈みかけ、薄暮が迫つてゐる。そろそろ誰もが妖獣に怯え、家の扉を閉ざす時間である。

妖獣は人あらざる異形の生き物だ。

聖靈に相反する闇の世界に属し、主に山などの闇の濃い場所を好みで生息している。だが時には夜ともなれば獲物を求めて街に姿を現し、家畜などを襲うことがある。まれには人間を襲いその血肉を食らうことすらある。

ウェルの言う宿は難なく見つかつた。

「トラオ、ね」

シャオンは掲げられた看板の名を読んだ。  
隣に建つ民家の倍はある大きさだ。

長い年月で日焼けしたような赤茶けた石が積まれて扉の周囲を飾つてゐる。木造の建物は風雨で多少は色が退色してゐるが、それがかえつて歴史を感じさせる威厳をかもし出していた。

「ほんとに何とかなるのかよ」

シャオンは訝しげにウェルに視線を投げかけた。

ウェルはそこで初めて彼つていたフードを取つた。夕闇にすらま

ぶしい黄金の長い髪があらわになる。さすがにシャオンも一瞬ではあるが目を奪われた。

「さあ、どうでしょうか。主人の顔を覚えていないもので」言いながら扉に手をかけ中に入つていくウェルを、シャオンは呆れ返つて見送るしかなかつた。

「どういう神経してんだ、こいつ」

小さく吐き捨てるように言うと、シャオンも宿の中に入つた。ウェルが「知つている」と言つたので、知り合いがいるのだとばかり思つていた。当然、タダで食事にありついて、暖かい寝具の上で手足を伸ばして眠れることを期待していたわけだ。

シャオンが中に入ると、そこでは既に大勢の客が食事をしていた。入り口を入れると食堂になつてゐるらしい。

中は小奇麗に片付いており、窓際には花も飾られていた。いかにも高名な画家が描いたような絵画がいくつも等間隔で壁に掛けられている。調度品は古く歴史を感じさせた。

すぐに奥から少女が出てきた。

まだ年の頃は十七、八の、ゆるい癖のある金髪で碧眼の愛らしい顔をした少女だ。

「お食事ですか？　お泊りですか？」

ウェルを見上げた少女は、しばらく彼に目を奪っていた様子だつた。頬がうつすらと紅を差す。

それもシャオンには見慣れた光景だ。誰しもウェルの美しさには目を奪われる。華やかな美しさではないのだが、温雅な風貌は聖人を思わせる。凜々しい目元とは裏腹に微かに湛えた笑が、理知的であるのに柔軟という印象を与えるらしい。

一転、ウェルからシャオンに視線を移した少女は、不審者を見たように警戒心を顕にした。シャオンは反射的に、左の前髪を整えた。「御主人のトレルオム殿はいらっしゃいますか？」

その言葉に少女は驚いたようにウェルを見た。

「父のお知り合いの方ですか？　私、娘のトレーネと申します」

「いえ、知り合いというか、昔大変お世話になつたものですから」  
挨拶がしたいと思いまして

「そうですか……でも」

トレー・ネはまた、気になつて仕方ないといつ風にシャオンをちらりと見やつた。

「父は、亡くなりました。もう二年になります」

「それは存じ上げませんでした。残念です」

シャオンはそう抜け抜けと言つウェルの顔とトレー・ネと名乗った少女の顔を交互に眺めてみた。

ウェルは表情を動かさず、何時もの様に微笑んでいる。一方トレー・ネは父親に世話になつたという客人をむげにも追い返せずに困つたという感じに見えた。

「では、こうさせて頂けませんか？」

ウェルは小首を傾げて少女を真摯な瞳で見つめた。

「私は旅の神官です。医術だけでなく薬草についても学びました。聖術も使う事が出来ます。お世話になつたお礼に、今日お泊りのお客様の中で、ご要望があれば無償で治療を施すことが出来ます」

「ああーやつぱりいいなあ

シャオンは寝具の上に横になり、大きく伸びをした。

寝台が一台と小さな机が配置されただけの狭い部屋だったが、シャオン達には十分だった。昨日は狭い洞穴の中で座つて眠つたのだ。それを思えばまさに天国だ。

ひとしきり伸びをした後、隣の寝台で黄金の髪を器用に編んでいる相棒を見た。

美貌の青年は悪びれた風もなく外套を壁に掛け、寝支度をしている。

「しかし、今に始まつたことじやあねえけど、ウェルつて怖えよなあ」

「なにがですか？」

「IJの宿の主人と知り合いだなんて嘘だろ？ 神官だとか、上手いこと言つて、結局タダ飯食つて部屋まで用意させたじやねえかよ」「嘘とは心外ですね。私は知り合いだと言つた覚えもありません。知つている宿があると言つたじやありませんか」

シャオンはウェルがあまりこぞりつと言つので一の句が告げなかつた。

「ちょうどあの老婆が足を見て欲しいと言つて出してくれて助かりました」

「あの婆さんの足は治つたのか？」

「さあ、どうでしようか」

ウェルは秀麗に微笑むと、暖かな寝具の中に入った。

シャオンは苦虫を噛み潰す思いだった。一度でいいから、この減らず口と説教癖を何とかしてやりたい。そうすればさぞかし気分がいいだろうと思つた。

シャオンはウェルに背を向けて寝具の中に潜り込んだ。

脳裏に食堂での様子が浮かんでくる。

無償で治療する。

その言葉は食堂にいた者達の視線を一斉にウェルへと向けさせた。そこへ杖をついた老婆が歩み出たのだ。ウェルのかざした手が、老婆の杖を不要の物に変えるや、あつという間に行列ができた。

シャオンもウェルの使う聖術のことは知っている。

聖術は、世界を構成するすべてのものに宿る聖靈達の力を借りた呪術のようなものだ。

火を操つたり、水を操つたりするだけでない。聖靈を動かせばどんな事もできるとウェルは教えてくれた。

ただ、聖靈を見る事の出来る人間はわずかしかいない。一国に数人という希少さですらある。その力を借りて術を使うとなると、さらに稀なことになるだろう。聖術を使う者は聖靈と交わるが故に自然と神道へ進む者が多い。しかし、神官になるための学府は難関である。が、ウェルがそこを出たのかどうかを、シャオンは知らなかつた。

今の世では、神官といえば國を治める王に次いで尊敬されるべき地位だ。彼らは神の声を聞き世界の祭事を一手に引き受け、医術にも通じる。難関である学府を出なくては、例えいくら金を積もうが地位をひけらかそうが、神官になる事は出来ない決まりなのだ。

シャオンはウェルのことを考えるうちに睡魔に襲われた。とにかくウェルのおかげで、今夜は金を払わずに宿を取れたわけだ。これ以上文句の出るはずもなかつた。

その夜、グリュックの老舗宿・トラオを訪なつた者達がいた。

妖獸の跋扈する世で、夜に外を歩く者はいないといつても過言ではない。夜半過ぎから降り始めた雨がしつと石畳を打ちつけ、月明かりもない夜なら尚更だ。

黒い三つの影が音もなくトラオの裏口に並んだ。

裏背戸を微かに叩く音に、扉がわずかに開けられる。

トレーネは音もなく訪問客を宿に招き入れた。

最後に入つた者が外を確認してから音を出来るだけたてないよう  
に扉を閉める。

「トレーネ。急用とは何だ」

フードを目深に被つた三人の者の中で、一番先に入つた人間が低い声で問うた。その後ろで、あの二人は影のように膝を突き控えている。

「類稀な聖術を使う神官だという一人組みが、今夜宿泊しております」

「ほお……」

「いかがなさいますか?」

トレーネは、来訪者達に椅子を勧めた。実際に座つたのは一番初めに歩み出た者だけで、後の二人は裏背戸の入り口に番犬のように立つたまでいる。

「二人とも剣を携えています。もしかすると、使えるのではないでしょうか」

座つた者は腕組みをしたまま低く唸りながら、目深に被つたフードから覗くあごひげを撫ぜた。

円卓の上に灯された炎がジリリと音をたてて揺らいだ。

「父に世話になつたと申すのですが、私には見覚えがありません。それに、どうも不釣合いな一人組みでして……」

「足止めできるか?」

少女は眉をひそめた。

「分かりました」

「では明日中に使いを出す」

男は後ろに控えていた者達を伴つて、またグリウスの闇の中へと消えていった。

シャオンが突然体を起こした。

闇の中で、獲物の姿を捉えた野生獣のように瞳を見開いている。

薄い氷でおおわれた湖上を歩くような危つさに似た空気が、シャオンの周りに張り詰めた。

シャオンはじっと耳をそばだてて部屋の入り口を睨み付けた。闇に慣れぬ目をこする。

そうして素早く寝具から出て、物音ひとつ立てずに立ち上がった。そのまま滑るように移動して戸口に耳を当てて立つ。

「どうしました？」

隣で休むウェルもシャオンの異変に気付いて声をかけた。シャオンは声を出す相棒に、指で口元を押さえて「しつ」と囁き、静かにするように合図した。

「この宿に誰かが来た」

「こんな夜更けにですか？」

「三人だ。足音が聞こえる」

裏背戸の開いた音、中に入った人間の数を正確に言い当てて、シャオンは寝台に戻つて腰を下ろした。

「駄目だな、熟睡できやしない。せっかくの宿だつてのによ」

「相変わらずよく聞こえる耳ですね。少しば蓋をしておかないと、身が持ちませんよ」

シャオンはまた部屋の入り口を見た。右に覗く瞳が眇められた。

「嫌な気配だ。剣の使い手か、気配が鋭い」

「シェバ皇帝が来る事と関係があるのかもしませんね」

ウェルも声を低くして言つた。

シャオンは弾かれた様に振り返つてウェルを見た。すぐさま乱れた髪を整え、左半分を隠す。凍てついた体を解すように生唾を飲み込んでから、ウェルに言葉を返した。

「シェバ皇帝。グリュックを侵略した皇帝の名前。

「シェバが、来るのか？」

「足を治療した老婆に聞きました。それで役人の数が増えていることにも得心がいきます。今は治世十五年の祭り期間だと言つていました」

「……何しに？」

「さあ、それは私の知る所ではありません」

シャオンの視線は再び扉に固定された。

再び階下の扉が開く音がして、三人の人間が外に出た微かな音が  
シャオンの耳に届いたのだ。

「ウェル、明日は早くにここを出よう

「そうですね」

ウェルは言いながら体を横たえた。

夜の旅亭トラオは、再び静寂に包まれた。

翌朝、夜明け前に、一人は誰よりも早く部屋を出て食堂へ降りた。もちろん食堂には誰もいない。厨房の方から朝食の準備をする者達の物音が微かに聞こえてくる。

ウェルとシャオンは互いに田で合図しあつて、宿の入口の方へ進んだ。だが、数歩進んだ所で、シャオンがウェルの服の裾を掴んで足を止めた。

振り返ると、食堂と厨房を結ぶ入口に宿の主人トレーネが人形のように無言で立っている。

「おはようございます。昨夜は思いもかけずこちらへ泊めて頂いて、お礼の申しようも御座いません」

ウェルが少女の目をまっすぐに見て、いつもの微笑を顔に湛えてぬけぬけと言った。

「もう、お帰りですか？」

「ええ、こちらへはご挨拶に寄つただけでしたので」

少女は心持ち緊張したような表情になつて一人に歩み寄ってきた。シャオンは思わず身構えていた。まさか、グリュックの都グリウスへの通行証がないことがバレたのではないかと思つたのだ。

「お願いがあるのです」

二人は顔を見合わせた。いまさら願いを聞かぬとは言えない。何しろウェルはトレーネの父親トレルオムにたいへん世話になつたことになつてゐる。その礼にと、昨日は無償で治療まで施したのだから。

「願いがあるのは私ではないのです。その方はもう暫くするところに来られますので、お待ち頂けませんか？」

ウェルの表情は全く変わらない。

シャオンは右目を細めた。

ウェルと違つてシャオンは思つた事がすぐに顔に出る。

トレーネは来る相手に對して敬語を使つた。そして自分達に對しては都合を聞かずに行つことを依頼してきた。脳裏にふと深夜の訪問者の事がよぎる。状況的には、決していい依頼とはいえないシヤオンは感じた。

「それは出来ねえな」

シヤオンは即座にウェルの前に出て、冷ややかに告げた。

「シヤオン」

ウェルがシヤオンの肩を掴む。ゆっくりと首を左右に振った。「すみません、連れが……出来ましたら御用のむきを教えて頂けませんか?」

トレーネは一瞬伏せ目<sup>田</sup>がちになつたが、決心したようにまっすぐ顔を上げた。胸の前で手を組む。まるで神殿で熱心に神へ祈りを捧げる信者 のようだ。

「神官様のお力が必要なのです。どうかお話だけでも聞いていただけませんか?」

トレーネの声には切迫した何かがあつた。思いつめたような瞳は縋る様にウェルに向けられている。

「分かりました」

「おいつ、ウェル!」

シヤオンは掴み掛けからんばかりの勢いでウェルに向かつた。だがウェルは穏やかさを崩すことはない。

トレーネも隠さずに安堵の息を漏らした。

「すぐに朝食を用意させます」

少女はくるりと身を翻し、厨房へと消えて行つた。

姿が厨房へ消えたことを確認してから、シヤオンは再びウェルに向き直つた。もちろん文句を言つためだ。ウェルとトラオの亡くなつた主人とは、どうやらそう深い関わりがあるようにはシヤオンには思えなかつた。その上、グリュックを制圧した破竹の勢いのシエバ皇帝がグリウスの都にやつて来るといつ。皇帝が来ればさらに役人の数が増え、監視の目は厳しくなるだろう。そこへ昨夜の訪問者

だ。

グリュックに入る通行証を持たない一人にはこれ以上の長居は無用である。

が、シャオンは言葉が出なかつた。

ウェルは少女の消えた入口をじつと見ていた。いつもの微かな笑みが消え去つた顔は酷薄ですらあつた。

老舗旅亭トラオの幼い主人・トレー・ネの言つていた訪問者はなかなか訪れなかつた。

朝食を済ませ、昼食を済ませ、申し訳なさそうにトレー・ネが運んできた極上の酒に手をつけても、まだ現れない。

「つたく、どうなつてんだよ。いつまで待たせる気だ」

シャオンは苛々した様に腕を組み、時折舌打ちしながら、狭い部屋をうろついていた。

「まさか役人に俺達のことを通報してんじゃあねえだろ?」  
「それはないと思いますよ」

ウェルは読んでいた古い本から視線を上げて答えた。

「もしそうなら、わざわざ私達に言わなくとも、役人に通報してこの部屋を固めさせればいいのですから」

シャオンはウェルの落ち着き払つた態度にも腹が立つっていた。何事もなかつたかのようにウェルは微笑んでいる。

「あのまま山へ引き返してりやよかつた」

「山でまた野宿ですか?」

「いつものことじやねえか」

「でも何か仕事を引き受けられそうじやありませんか。どのみちお金は盗まれてしまつたのだし、好都合じやありませんか?」

シャオンは相棒の前に立つた。

「危ねえ仕事はごめんだ」

「なぜ危ないとと思うのです? 話を聞いてみないことには、分かりません」

ウヘルは本を片付けると立ち上がり、小さな机に置かれた極上の果実酒を二つの器に注いだ。

一つをシャオンに無言で差し出す。

「いらねえよ。飲んだら、頭が馬鹿になる」

「せつかくの良いお酒を、もつたいたいですよ」

「酒好き」

「誤解が生じるような言い方はよしてください。何をそんなに苛々しているのです？」

ウェルは器を二つ手にしたまま、一つに口をつけた。

「夜中の客だ。あれが気になつて仕方ない。鋭い気配だった。普通の人間じゃない。剣か、武器を持つ者の気配だ」

「相変わらず鋭い勘だ」

「それに」

シャオンはウヘルの前に立ちはだかった。ほぼ同じ位の背丈なので、目線が合つ。

「お前だ、ウヘル。何か知つてんだろ？」

「私が一体なにを知つていると言つのです？」

「しらばくれやがつて。いつも秘密主義なんだな」

「どうしてそう思うのです？　トレーネという少女が、なにやら不吉なことに巻き込まれていてる気がして心配なだけです。トレルオムの娘さんですからね。気になつて当然でしょう？」

いつものゆつたりとした口調で言い、器に注いだ一杯の酒を一気に飲み干すウヘルを、シャオンは黙つて訝しげに見ていた。

果実酒とはいえ、ウヘルはすでに一本を空けている。それでも顔色一つ変えない相棒に、シャオンはあきれた。ウヘルがこれほど飲むのは珍しい。だが今のシャオンにとつてそれは大して問題ではなかつた。夜中の客と怪しい依頼、その二つで頭がいつぱいだつた。

「じゃあ、世話になつたつて言つるのは本当なのか？」

「そう言つてはりませんか」

ウヘルは器を目の高さで掲げて、得意の微笑でシャオンを魅了す

る。

そんな事では、シャオンの苛立ちはおさまりそうにはなかつた。  
「もう、昔の話です……少し休みますから、客人が来たら起こしてください」

寝台に体を横たえたウェルに、シャオンはもう何も聞けなかつた。  
いつもこうして話をばぐらかされるのだ。

ウェルは決して本心を明かすことがない。シャオンに限つてではなく、誰に対してもある。怒つたり、泣いたり、はては声を立て笑う所も見たことがなかつた。

ウェルとシャオンが出会つてから、一年がようやくすぎた所だ。  
ウェルは医師として、シャオンは傭兵として、ある屋敷に雇われていた。

もちろんシャオンはウェルが大嫌いだつた。取り澄ました顔、何を考えているか分からぬ微笑み、育ちの良さそうな立ち居振る舞い。はつきり言って、すべて気に食わなかつた。

シャオンが屋敷を出る時、ウェルはこう言った。

「世界を旅してみたいのです。案内してくれませんか？」

当然、断つた。するとウェルは得意の説教口調でこう切り返してきた。

「貴方一人では、たいした稼ぎにはなりませんね。私がいれば楽をしてお金を儲ける方法を伝授しますよ」

この一言はシャオンにとって非常に魅惑的だつた。結局ウェルの申し出を受け入れ、立ち寄つた村で医師として仕事をしたり、妖獣を退治したりして金を稼ぎ、気ままに旅を続けてきた。

シャオンにとって、ウェルは便利な存在だつた。

偉い神官が講話を説くような口調のウェルは、何を言つても説得力がある。妖獣を退治する時、闇の力に対抗する聖術は何より効果があつた。むろん剣も人並み以上に使う。

けれども、シャオンはウェルの出身も過去も、何一つ知らない。

知つているのはウェルという名前と、聖術や医術、薬草などに通

じ、計り知れないほどの知識を持つていてるということだ。

同じくウェルは、シャオンの過去にも決して触れようとしない。それがもつとも気に入っている所でもあった。

シャオンはそんな事を考えながら、寝台に横たわったウェルの横顔を見下ろした。

そこにあるのは、この一年飽きる事無く、毎日見てきた寝顔だった。

そして、問題の客が現れたのは、夕食が終わり、食堂にも客の姿がなくなつた夜更けのことだった。

雲のない夜空に細い月影が淡く光っていた。  
街道には誰もいない。みな妖獸を恐れて扉を閉ざし、すでに眠っている時間だ。

グリュックの王都、グリウスの王城へと続く街の中心街道には、  
水路の上に篝火が焚かれていた。

水路はグリウスを縦横に走っている。  
その合流地点に王城は位置していた。

小高い丘の上である。

高い城壁は下から見上げると幾重にも重なつて見えた。

城門から入つても、城まではかなりの距離がある。迷路のように  
曲がりくねつた道が城壁で囲われており、途中で水路が複雑に絡み  
合い、初めて城を攻める者には難攻不落の設計になつていて。効果  
的に兵を配置しておけば、城に到着する前に、この迷路と水路で敵  
を分断し撃破出来るという仕組みだ。

グリュックの不可侵伝説は、このグリウス城の存在も大きい。

この城には、隠し通路が存在した。極々限られた者達だけが使用  
するためなのか、巧妙に城壁に隠された出入口は、いつたん地下通  
路を通り、街道のはずれの民家に通じている。

三つの影が、その民家から滑り出した。

一様にフードを目深に被つている。腰の辺りの膨らみから、剣を  
差していることが分かる。三人は足を忍ばせて駆け出し、夜陰に紛  
れて消えた。

「ひづらへ」

トレーネはシャオンとウエルを宿の奥の部屋へと通した。

食堂の秀逸な絵画や照明などと比べると、そこは実に粗末な部屋

だつた。

二人が座れる長椅子が二台で、膝ほどの高さの小さな机しかない。窓もない。代わりに入口が向かい合わせに二つある。

シャオンとウェルに長いすの一つを勧めると、トレーネは彼らが入ってきたのとは違う方の入口へと姿を消した。

「なんだこりや。ただの宿に、なんでこんなもんがあるんだ?」

シャオンは部屋をぐるりと見回して、ウェルにそう耳打ちした。密談するには格好の部屋だ。

両方の扉に見張りを置いておけば、話を聽かれる心配のない部屋である。

シャオンは珍しそうに部屋を眺めていた。が、突然何かに気付いたように、ウェルの耳元に再び囁いた。

「これは俺達も、逃げ道がねえってことじや……」

「そうですね。ま、そういう場合に陥った時は、ひとつ聖靈達の力を借りるとしましょう」

ウェルはまるで子供が気に入りの玩具を貸すような気軽さでそう言った。

「お前が言つと聖靈の名も地に落ちそうだ」

シャオンは呆れたように長椅子に背を預け、剣を抱くような形で腕組みをして足を組んだ。

まもなくトレーネが田深にフードを被つた三人の人間を連れて戻つて來た。

「お待たせしました」

トレーネは入ってきた人物の一人に長椅子を勧めて、自分はその後ろに立つた。

一人は長椅子に深々と腰掛けた。従つてきた残りの二人に顎で両方の入口を指し示す。その時、顎に無精で生やしたようなひげが見えた。

指示された一人は、それぞれの入口から外に出た。見張りだ。

見張り役の一人が扉から姿を消して、フードを被つた者とトレーネ

ネが視線を合わせた。

男がゆっくりとフードを取る。

厳つい顔があらわになった。固そうな岩盤を思い起させれる。無精で生やしたような顎ひげが一層その厳しさを際立たせていた。壯年のいかにも気難しそうな顔つきで眉が太く、瞳は鋭くシャオンとウェルを睨み付けていた。外套を脱ぐと、筋肉がたっぷりと付いた太い腕が現れた。

男は腰に差した剣を右手に持ち替え、低い声で問うた。

「神官殿は、どちらかな」

「私でござります」

ウェルは軽く会釈しながら、いつもの口調でゆつたり答えた。

男は踏みするように、シャオンとウェルを交互に見る。シャオンのほうはいかにも不機嫌そうに、椅子へ背を預けゆつたりと座っている。時折神経質そうに左の顔を隠す髪をいじっていた。一方のウェルは凛と背筋を伸ばして姿勢を正し、穏やかに微笑んでいる。

剣を帯びているのは、今はシャオンだけだ。

男は小さく頷きながら、しばらく一人を見比べていた。

シャオンはそれが気に入らないとばかりに鼻を鳴らし、相手に顔が見えないように右を向いた。そうすると、左の顔をおおう髪がシャオンの表情を隠してしまう。

「さて、聖術使えるという。貴殿はどの程度の力行使できるのですかな。まさか、聖霊が見えるだけ、などと言つのではあるまいな」

「どの程度と、申されましても困ります。何か誤解がおありのようですが、もともと力を使う者は、聖霊と人の境界線に位置するだけです。大きな力を使える者など、そうはありませんよ。まして、聖霊の力に程度という人の創った枠組みをはめる事もできはしません」  
ウェルは大して高低を変えずに、淡々と話した。

前に座るあごひげの男は、眉根を寄せて難しい顔でそれを聞いて

いる。

「では、聞き方を変えよう」

男は大きな咳払いをしてから、身を乗り出した。

「妖獣退治はなさるのかな」

「そうですね。そのような事もあつたかもしません」

「剣の方も使えそうであるな」

「さあ、貴殿ほどではなさそうですよ」

男はうつむと唸つて腕組みをした。ウェルのつかみどころのない問答に、辟易したようだ。矛先は、次にシャオンへ向けられた。

「そちらはどうだ。剣の腕は」

不遜な物言いに、シャオンは顔を背けたままで返事をしなかつた。「私はウェル、こちらはシャオンと申します。出来ましたら貴殿も名乗つていただけませんか？ 何か願いがあると、トレー・ネから聞いています。私で適うことでしたら、お手伝いいたしますが、それにはやはり順序というのも御座いますので」

同時にウェルの顔から微笑みが消えた。まるで書物の項を一枚捲ると、全く違う物語が始まってしまうかのように、ウェルという双子のかたわらが存在するかのように、とたんに温和さがなくなり、冷涼とした雰囲気が取つて代わった。

その犯し難い気品と威光に男はたじろいだ様子だった。

「これは失礼申した。私はフェンダーという。身分は今の処ご容赦

願おう」

フェンダーと名乗つた壯年の男は、さらに身を乗り出してきた。

「願いを言つ前に、ひとつ質問したいのだが

「どうぞ」

「貴殿は今現在のグリュックをどう御覧になる？」

ウェルとシャオンは顔を見合させた。

シャオンが真つ直ぐにフェンダーの顔を見る。

反射的に相手も初めてシャオンの顔を覗きこむ。

すると一瞬フェンダーは疑念でも抱いたかのように、怪訝そうに

眉をひそめた。

「申し訳ないのですが、私達は昨日こちうに参ったばかりで、まだ街の様子も見てはおりません。とてもお望みの答えをお返しすることは適いません」

そつなく返答するウェルを、シャオンは改めて感心したように息をついた。

フェンダーは降参したようだ、手をわずかに上げて苦笑いした。

「なるほど。ではお話いたそう。今グリュックはたいそう治安が悪化している。通行証は偽造が増え、もはや悪徳商人達の出入りの取り締まりは不可能となつた。関税は増やされ、一見街道は賑わつてはいるが、それは見せかけ、偽の商品なども出回つて闇の取引も横行している。加えて役人どもの民への暴行も目に余る。貧富の差はますます大きくなり、裏路地では浮浪者まで出る始末だ」

「それで？」

ウェルは冷然とかえした。シャオンにはそれがかすかに怒りを含んだ聲音に聞こえた。

「それで？……全く話の巧い方だ。そう、グリュックを以前のグリュックに戻したいと、我々は願つていてるわけですね」

ウェルは急に立ち上がりフェンダーに背を向けた。

数歩、背を向けたまま歩き、立ち止まる。回りの人間には、わずかに肩が震えて見えた。まるで忍び笑いをしているかのようだ。けれどそうしていったのはほんのわずかな時間で、すぐにトレーネやフェンダーには顔が見えないまま、悠揚とした聲音で告げた。

「おっしゃりたい事は分かりました。では、私からもひとつお聞きします」

ウェルが一呼吸置く間、束の間部屋に静寂が訪れた。互いの息遣いだけが耳朶に触れ、背筋が寒くなるほど静けさだった。

ウェルが振り向いて言った。

顔には柔らかな微笑があつた。だが、続く言葉があまりに鮮烈で、その笑みは妖獣の者様に妖しく見えた。

「それはつまり、シェバ皇帝を暗殺するということですか？」

フェンダーも、そしてトレー・ネも息を呑んだのがシャオンには分かつた。シャオン自身も、すぐにはウェルの言っている事が呑み込めなかつた。

「もうすぐグリュックヘシェバ皇帝が来る。そのため私の方を利  
用しようとお考えですか？」

ウェルは優しくトレー・ネを見た。シャオンには少なくともそう見  
えた。だが、見られたトレー・ネはばつが悪そうに頬を朱に染めて顔  
を背けた。

シャオンにはそれで全ての辻褄があつたような気がした。

トレー・ネはウェルが聖術を使うと知った瞬間から、足止めを食ら  
わせるつもりだつたのだ。だから自分達をわざわざ宿に宿泊させ、  
このフェンダーという男に連絡を取つたのだろう。おそらく昨夜の  
訪問者はこの男だ。シャオンは二つある入口から外に出でいる二人  
の者達のことも考えた。ちょうど数も三人で合つ。

「おいしい話には裏があるつてのは本当らしいな、ウェル」

ウェルは、不遜にも足を組んでゆつたりともたれたままのシャオ  
ンに視線を落とす。

フェンダーが手にした剣を左手に持ち替えた。

「そこまで見抜いておられるとは。ならば、話は早いというものだ」  
フェンダーが立ち上ると、その筋肉質な体は雄雄しく、泰然自  
若とした態度は幾つもの修羅場を潜り抜けてきたであることを感  
じさせた。

咄嗟にシャオンも背もたれから体を起こし、剣の柄に手を添える。  
緊迫した状況にトレー・ネは慌てた様子でフェンダーの腕に縋つた。

「お待ち下さい、将軍」

「そこまで分かっているのなら、私の考えてることも、当然分か  
つているのだろう？ ウェルとやら。我々には悠長に構えている暇  
はないのでな」

言いながらフェンダーは剣の柄に手を添えた。

「こいつ

「シャオン」

今にも剣を抜きそうなシャオンの手に、ウェルの手が重ねられた。  
「何だよ、ウェル。どうせ俺達を殺すつもりだぜ。話を断ればこの場で。受けたつて、シェバに敵うはずない。命を落とすのは俺達だ。おっさんもシェバなぞ狙うのはやめとけ」

シャオンはウェルの手を払い除けて、剣を抜いた。豹のように無駄のまつたくない素早い動きで、剣先はフェンダーに突きつけられた。

フェンダーは微動だにしなかった。

「どうよ、何も言えねえだろうが

「何故敵わないと思うのだ」

「そんなことおっさんが一番よく知ってんじゃねえか。だからシェバを殺したいんだろ？ そうだろうよ。だからウェルの力が要るんだろうが」

シャオンは眉一つ動かさぬフェンダーを睨んだ。フェンダーは片方の口の端を持ち上げて笑った。

「面白い二人だな。消すには惜しい」

「何だと？ お前に俺が斬れるってのかよ」

シャオンに抑えきれない怒りが沸き立つた。右から覗く黒い瞳は怒りに燃えて鋭くフェンダーを見据える。きつかけさえあれば、即座に剣を振り下ろす勢いだ。

「お止めなさい、シャオン。フェンダー殿」

ウェルはシャオンの剣を押されて鞘に収めさせた。

シャオンは音を立てて長いすに腰を下ろし、再び手と足を組み、そっぽを向いた。

「私に選択権はなさそうなのでお聞きします」

「話のよく分かる方だ、神官殿は。どうぞ、なんなりと」

「もう貴方の『』身分を明かして下さつてもよいでしょう。それに、我々と、おっしゃった。首謀者はどなたですか？」

フェンダーはそう涼しい顔で尋ねるウェルを睥睨した。

物腰が柔らかそうなのに、物事の核心をすばりと切り込む。そのウェルに主導権を握られたまま、本来ならフェンダーの方が切り札を握っているはずがいつの間にかそれを失っているのだ。

「私はシェバ帝国將軍だ。それ以外は明かせん」

「俺はごめんだ」

「シャオン」

シャオンは立ち上がり、扉の一方へと足を向けた。

ウェルはフェンダーが行動を起こすより早くシャオンの腕を掴んでいた。それをシャオンは乱暴に振り解き、フェンダーを睨め付けた。

「シェバは化け物だ。俺はごめんだね」

同時に左半分を隠していた豊かな黒髪を一気に搔き揚げた。

トレーネが小さな悲鳴を上げる。

そこに現れたのは、二本の醜い傷だった。左目はその傷によつて潰れている。ちょうど傷は左の眉の付け根辺りから、斜めに頬骨の辺りまで延びている。傷の周りの皮膚は色を失つて暗紫色に変わり、髪を搔き揚げた顔は妖獸と見間違われそうな容貌に見えた。

フェンダーは黙つてその傷を見ていた。

「知ってるからウェルが必要なんだろうが。シェバが人間じやねえつて」

シャオンは髪を搔き揚げていた手を下ろして再び顔を隠し、乱暴に扉を開けて部屋を出た。だが、戸惑う見張りにフェンダーは何の指示も与えなかつた。

「いいのですか。シャオンを部屋から出して」

それを聞いて、フェンダーは鼻でせせら笑つた。

「どうせ役人に話など出来る身分ではあるまい？」

「確かに」

そう言つて微笑むウェルをフェンダーは不思議そうに見た。

「どうも貴方は勝手が違う。変わつておられるというか、豪胆とい

うか

「そもそもありませんよ。ちゃんと報酬は頂きます。シャオンもお

金しだいで、気も変わるものでしょう」

ウヘルは悪戯を楽しむ子供のような笑を湛えていた。

「叩けば埃が出そうだな」

対したフェンダーも不敵に微笑んだ。

夜が明けようとしていた。

ウェルは深夜の会合の後、眠れずにいた。

隣の寝台に横になるシャオンは寝息を立てていたようだが、ウェルが体を起こすたびに反応していたので熟睡はしていないのだろう。深夜の会合のせいで神経が高ぶって、聴覚も嗅覚も研ぎ澄まされているに違いない。

部屋の窓から薄く曙光が差し込んでくる頃、ウェルは部屋を出て下に降りた。

階下に降りると食堂だが、入り口を背に右側が厨房になっているらしい。昨日はそこにトレーネが立っていた。厨房からは早くも忙しそうに働く者達の声がある。

その反対側に扉がある。扉は開いていて、向こうから朝日が薄く差し込んでいる。

整然と並んだ机を避けながら、扉へと近づいた。奥は廊下になつていて、先に緑の草が見えた。何があるのか、誘われるよつにウェルは足を運んだ。

廊下を出ると視界が広がる。

庭だった。

食堂と同じ位の広さの庭は、周囲を高い木が囲み、さらに木枠で仕切られた中には色とりどりの花々が植えられている。他に飾られているものはなかったが、花だけでも庭がとても美しく華やいで見える。

中央は畠になつていて、手入れの行き届いた何種類もの野菜や果物が栽培されていた。

ウェルが嘆息して畠に歩み寄ると、早くから畠に水を撒く少女の姿があった。

「おはようございます、トレーネ。昨夜は遅かったのに、もう仕事

ですか？」

ウェルはトレーネを驚かせないようこわざと足音を立てて歩き、声をかけた。

「神官様、おはよつゝゞります」

「ああ、その神官様はやめてください。ウェルで結構です」

ウェルは何かを押しとどめるように手を上げて笑った。

トレーネは急に真顔になり、水を撒く手を止めた。

「あの……御免なさい。私、父に縁のあるお方を、こんな事に巻き込んでしまって、本当は……」

「いいえ、お気になさらずに。私とシャオンはいつもして色々な仕事を請け負いながら旅をしているのですよ」

トレーネは本当に申し訳なさそうに、今にも泣き出すのではないかと思う位に思いつめた表情だった。

「お手伝いいたしましょう」

ウェルはトレーネの手から水を撒く柄杓を押借すると、水を汲んで野菜に丁寧に撒き始めた。

「あの」

トレーネは困ったようにウェルを田で追つたが、楽しそうに（いつも微笑んで見えるのでそう見えただけかもしない）水を撒いている姿を見るうち、少しずつ笑顔が戻ってきた。

「あの、父とはいつ？」

ウェルは何を聞くのかという風に顔を上げたが、すぐにいつもの表情に戻った。

「随分と昔です。私はまだ子供でした。世話になつたのは、正確に言つなら私の父のほうでしょうね。父はいつも帰り際に、貴方のお父様に感謝の意を伝えました。子供心にその事は大変印象に残つているのです。だから、つい足が向いたかもしません」

珍しく寂寥とした物言いだった。

「貴方はそのお父様の遺志を継いでいるのですか？」

「えつ？」

トレーネは考えもしなかつた事を聽かれたとでもいう風に、怪訝そうな顔をした。

「いえ」

ウェルは辺りの様子をそつと伺つてから、続きを話した。

「フェンダー殿と通じておられたので。違うのですか？」

「確かにフェンダー様と最初に知り合つたのは父ですけど、これは私が決めたのです。父とは関係ありません」

「そうですか」

ウェルはまた水を撒き始めた。トレーネも柄杓をもうひとつ用意して、一緒に水を撒く。

「あの、ウェル様は父が何をしていたのか御存知なのですか？」

ウェルは水を撒く手を休めず、ただ小首を傾げただけではぐらかした。

「聖靈達が喜んでいますね。ほら、トレーネ。あなたが育てている野菜ですよ」

大きく実を付け重みでたわんだ枝をそつと支えるように手を差し伸べ、その手をトレーネのほうに見せた。

一見ウェルがトレーネに掌を差し出したように見える。

だがトレーネはあつと声を上げた。

「見えましたか？」

「はつ、はいつ！ この薄い薄い緑の光はもしかして！」

トレーネの大きな瞳は、驚愕と好奇心に満ち満ちている。

「よかつた。私もこんな事をしたのは初めてで。あなたがわざかにでも力を備えておられたから、聖靈を見せることが出来たのです」

「私が、力を？」

ウェルは再び柄杓で水を畑に撒きはじめた。

「人は大概力を秘めているものです。それと気付かないだけで。人はついつい神や聖靈達に自分達が生かされている事を忘れるのですね。だから聖靈達もそれに応えてくれないので。トレーネはとても大切に野菜を育てている。その事を聖靈達も知っているのですよ」

次に柄杓を少し傾けて、そこから零れ落ちる水を手ですくつた。  
「この水一滴ですら、聖靈達の息吹があることを忘れてはならない  
のです」

トレーネはあまりの感動か、ウヘルの顔を眩しそうに見つめたま  
ま声が出せずにはいるようだ。

「すみません、つまらない話をいたしました」

「いいえ、とんでもありません。聖靈を見たのなんて初めてで、嬉  
しいというか、何て言つていいか」

トレーネは初めてウヘルの前で少女らしい無邪気な笑みを見せた。  
風がそよぎ、畠の野菜達の伸ばす枝や葉がそれに応えた。ウヘル  
の黄金の長い髪もその風に流れる。まるでそこから光の粒が零れ落  
ちるよひに、朝日を浴びて輝く艶のある髪はトレーネの瞳を釘付け  
にした。

ウヘルが肩をすくめて、風の聖靈達までやつてきたと告げると、  
トレーネはたちまち辺りを見回したが、それを見ることはさすがに  
叶わなかつたようだ。

トレーネは眩しそうにウヘルを見上げた。

「父はよく、昔のグリュックは良かつたと言つていきました。私もそ  
んなグリュックを見てみたい」

「それは難しいことですね。グリュック王家はもうない。あの頃の  
ように戻るのは永遠に無理かもしませんよ。例えシェバ皇帝がい  
なくなつたとしても、その後の事をどうするかによつて、グリュッ  
クは戦乱に巻き込まれかねません」

そこまで言つて、ウエルは自嘲気味に笑つた。

「すみません、トレーネに言つことではありませんね。これはフェ  
ンダー閣下に進言する事にいたします」

「ウヘル様」

トレーネの瞳は真摯な光で満ちていた。頬を朱に染め上げながら、  
それでも顔をしっかりと上げ、祈るように胸の前で手を組んだ。

「あの方をお助け下さい。の方は、本当に平和を望んでおいで

なのです。民が平和に暮らせることをお考えなのです」「あの方、とは、今回のことと計画した人物ですか？」

しかし、トレーネは返事をしなかった。

ウェルは少し困ったように首を傾げたが、それでも微笑みは絶やさなかつた。

「少なくとも、トレーネのおっしゃるの方を、私は全力でお守りいたしました」

少女は恥らつたように、俯いてしまった。

「おい、説教神官」

畠を後にし、庭に通じる入口を数歩入った所で、シャオンは壁に体を預けて腕組みをしていた。

「聞いていたのですか？」

「へんつ」

悪びれた風もなく、シャオンは鼻を鳴らして踵を返し、食堂へと早足で歩いていく。

「シャオン」

「俺はまだやるとは言つてないからな」

「はいはい」

わざと大股で歩くシャオンを、ウェルは追い越しながら返事をする。

「やらないからな」

「はいはい」

「ショバに食われちまえ」

「どうです？ グリウスを下見に行きませんか？」

「行かない」

「そうですか。残念ですねえ。今は祭りの最中で、いろいろと珍しいものを見ることが出来るといつのに」

わざとらしげにウェルの物言いに、シャオンは口をへの字に曲げな

がら、睨み付けた。

「シェバは化け物だ、妖獸だからな。俺は絶対やらねえぞ」  
旅程トラオの入り口付近でシャオンはそう言い切った。

「なぜ、シェバが妖獸だと？」

「見たからだよ」

入口の取っ手に手をかけていたウェルがゆっくりと振り向いた。

「見た？」

そこには眉をひそめ、まるで蛇蝎のごとく嫌う天敵を見たかのような表情のシャオンがいた。

「行くんだろ」

「えつ？」

シャオンは戸口につつ立つたままのウェルを押し退けて外へ出た。  
「行くぞ。グリウス見物だ」

グリウスは朝から賑わっていた。

一口に治世一五年といつても、民にとつては安穏な日々ではなかつたろう。グリュック王家に守られて生きてきた者達が、突如として現れたシェバ皇帝に従うことになつたのだ。

税金も上がつた。

王家が滅ぼされた戦乱で、街の一部も破壊された。

混乱の最中では盜賊が横行し、治安は一気に乱れた。未だにその名残は消えることなくグリュックに深い傷跡を残している。

それでも、十五年続いた平和を、民人は謳歌しようとしていた。人が集まれば商売も繁盛する。関税が上がつたとしても、グリウスで商売する価値は十分にある。グリュックの港には世界各国からの荷が集まるのだ。物売り達にとつてはかつてない好機である。

中央街道筋は、そんな商売人達が集まつて、早朝だというのに既に露店が開かれていた。それに乗じて、採れたての野菜を売る者、朝から大道芸で身をたてる者、街道は人であふれ始める。

シャオンとウェルは、ずっと無言で歩いていた。

シャオンは顔をしかめたままで、街に出てから一言も言葉を発しない。時おり左の髪を撫で付けて顔が隠れていることを確認するほかは、腕も組んだままだ。一方、ウェルも辺りを見回してはいるが、何も言わなかつた。

ただ、珍しい風貌の二人を、道行く者が振り返る。

一人は黒髪で左半分の顔を隠している。右半分に覗く顔は、怒りを堪えた様にしかめつ面だ。もう一人は、そうお目見えできないような美貌の持ち主。若い娘などはウェルをあからさまに指差して囁きあうほどだ。

トラオから裏路地を抜け中央街道に出て暫く歩くと、グリウスの中心と思しき広場に出た。

朝だというのに、そこはさらに大道芸人や旅芸人達も集まり、人ばかりがいくつも出来ている。

同じだけ、役人の数も半端ではなかつた。一様に肩から赤い布をかけ、剣を腰に差して、一人一組で歩いている。それを目に留めて、初めてウェルがシャオンに話しかけた。

「あの、役人は……」

柳眉をひそめる相棒に、シャオンもウェルの見ているものを見ようとした。

「なんだ？」

ウェルはある一組の役人達をじつと見ていた。

彼らには表情というものがなく、義務のように、行進するように、ゆっくりと歩いているだけだ。木偶か土偶が、手と足だけを動かして歩いているようにも見えた。かといって彼らの動きが別段ぎこちない訳ではない。

「なんか、違和感ある役人だな」

「あれは、人間ではなく人形ですね。魂がないのですよ」

ウェルはシャオンとともに木偶人形に出来るだけ自然に背を向けて歩いた。

一組の役人達が後ろを通り過ぎて行く。

十分通り過ぎるのを待つて、ウェルが言った。

「シェバが妖獣だというあなたの主張も、あながち嘘ではないようですね」

「そうだつて言ってんじゃねえかよ、しつけんな で？ それとあの役人と、どう関係あるつての？」

「あれは、目の役割を果たしているのです。どこにいても街の様子が知れる。あの形代には闇の力を感じます。妖術ですよ。妖獣の使う力です」

「と、ということは？」

「グリュックの城には、あれを作ることの出来る妖獣か、もしくは妖術を使う者がいるということですね」

「シーバがもうすぐ来るんで街を監視してるので何か?」「正解」

「正解」

ウェルは出来の良い生徒を褒めるように、こじやかに言った。

「あのおっさんはもちろん知つてんだろ?」「だから私を必要としているのでしょうか? 妖獣に対抗できる、剣

ではない力を、です」

二人は小さく溜息をつき、再び歩みを進めた。そのまま真っ直ぐに進めばグリュックの城、グリウス城である。すでに見上げると城壁が視界に飛び込んでくる。小高い丘に聳え立つ、壮麗な石造りの建物だ。

シャオンが憎らしげに城を見上げた。

「何でこんなことになっちゃったんだ」「その時だった。

シャオンがすれ違つた人間を慌てて振り返つた。

「おい、待てよ」

通り過ぎる人間の肩を無遠慮に掴む。掴まれた方は驚いたようにシャオンを見た。

互いの目が合つ。

瞬間その人間は、しまつたと言つ様に舌打ちをし、踵を返そうとした。が、シャオンがしつかりと腕を掴んでいたので逃げることはかなわない。

男は頭に布を巻き、角ばつた顔の頬には小さな切り傷があり、ゆつたりとした衣服の胸元は大きく膨らんでいた。そこから一瞬小さな耳が覗く。

「あいつの匂いだ」

「どうしたのです、シャオン」

怯えたような仕草を見せた男は引きつった笑みを浮かべると、素早く腰の辺りに手を滑らせて短剣を突き出した。

シャオンは剣先を瞬時にかわして後退つた。

周囲から悲鳴が沸き起つた。

「シャオン、ここで騒ぎはまずいですよ」

ウェルは素早く辺りを見回し、役人が傍にいないか確認しながら囁いた。

だが、シャオンはウェルの忠告など聞いてはいなかつた。

「泥棒め。盗んだ金返せ」

「なんのことだ」

男はわざとらしく大きな声で叫ぶ。

膨らんだ胸元から怯えたように、それが顔をのぞかせた。斜めに生えた耳と、大きな瞳が覗く。瞳は薄い青色でガラス玉のように輝いている。一見して猫のようだ。

「ヴァル！」

シャオンの声で、男は駆け出した。男が短剣を持ったままだつたので、さらに周囲から悲鳴が沸き起つた。

「待ちやがれってんだ！」

シャオンもわき田を振らずに後を追つ。

「全く、まだ金を諦めてなかつたのですね」

ウェルは仕方ないといつ風に息を吐き、後を追つた。

同じ頃、トラオには一人の客があった。

朝食の時間が済み、その日に宿泊していた者達の食事は終わった。宿を発つ者は出立し、トラオはまた違った慌ただしさに包まれていた。

宿泊客の部屋や食堂など、これから掃除をしなくてはならない。これはまた重労働だ。

トレーネは雇っている者達に慣れた指示を与えて、食堂の後片付けをしていた。花を活け代え、掃除をするのはトレーネの仕事と決まっている。この食堂はトラオの顔だ。そこを迎える客にとって居心地のいいものにするのは主の勤めだ。そう父から教わった。ここを訪れる客のために働くのがトレーネは嫌いではなかつた。

いつものように庭に咲いた花を机に生けていた時だつた。入口がうすく開けられる。

「トレーネ」

囁くように名を呼ばれ、トレーネは振り返った。

危うく花を倒しそうになりながら、慌てて入口へと駆け寄る。周囲を見渡して誰もいないことを確認すると、入口から覗いていた者を招き入れて、もう一度外に誰もいないかを確認してから扉を閉めた。

「ヒリオン様、なぜこちらへ？ フェンダー様は？」

ヒリオンと呼ばれた青年は、フェンダーの名を聞くと眉根を寄せた。

黒い髪の目鼻立ちのはつきりした華やかな顔立ちをしている。黒い瞳は澄んでいて真っ直ぐにトレーネを見下ろしていた。

「フェンダーはずるい。自分で動いて、私を除け者にするのだからな」

まるで子供が拗ねる様な言い草に、トレーネは肩をすくめた。

「こんな危ないこと、もつなさいで下せこ  
「お前までそんな事を言つのか」

「エリオン様……」

そう言われると、トレーネには言葉がなかつた。

「それより、私は神官殿に会いに来たのだ。フェンダーの言つことだけでは分からぬ。信頼に値するものかどうか、ぜひこの田で確かめねば」

トレーネは階段を上ろうとするエリオンを押し止めた。

「駄目でござります。フェンダー様からきつく言われているのです」「フェンダーが？ なんて周到な奴だ。聞け、トレーネ。奴は罪を独りで被るつもりなのだ。それは許さぬ。私は私自身の意志で、今度のことを決めたのだ。誰にも邪魔はさせぬ。フェンダーにもだ。止めを刺すのは、この私だからな」

周りをはばからず捲くし立てるエリオンに、トレーネははらはらした。

案の定、トラオでは古株で父の代から勤めている者が奥から顔を出した。

「お嬢様？」

「何でもありません。それより、一階の神官様を呼んできてくれるかしら」

トレーネはエリオンを背に庇つて取り繕つた。庇つた所で、トレーネより頭ひとつ背の高いエリオンを隠し切れるものではなかつたが。

「神官様ならいらっしゃいませんよ」

「ええっ？ 外にお出にならないようつけて、言つていたでしょう？」

「ですが、いらっしゃらないんで。私もむずつと見張つてる訳にもいかねえし」

「ごめんなさい、ありがとう。仕事に戻つて下さい」

トレーネは使用人が厨房に消えるのを待つて、エリオンを振り返

つた。

「お聞きの通りです。送つてまいりますので、どうかお戻り下さい」  
エリオンはむつとした顔をしていたが、いないのなら仕方ないと  
いう風に入口の方に向かった。

「そうそう、もう一人はどんなだい？」 フェンダーはそつちの事は  
はつきり言わないのだ

「あの人は……」

エリオンの瞳は好奇心に満ち満ちていた。

「怖いです」

「怖い？」

「左のお顔に傷があつて、目が、潰れていらつしゃつて。少し怖い  
目付きで私を見るので。でも、彼が言つたんです。皇帝が妖獣だつ  
て」

「なんだと？」

二人は声を潜めた。

「フェンダーは叩けば埃が出そつな連中だから気にすることはない  
と言つていた。一体何者なのだ」

エリオンは腕を組み、手のひとつを額に当てて考え込む様子を見  
せた。

「いろんな仕事を引き受けながら、旅をしていくそうです。神官様  
は私の父に世話をになつたとも、おつしゃつていきました。子供の頃に

「

あの時どうして分からなかつたのだろうか、とトレーネは思った。  
朝、畠で話をした時だ。ウェルはグリュックの出身なのだ。ここに、  
グリウスに幼い頃は住んでいた。そうでなくしては、グリウスから出  
ることのなかつた父の世話になることなど不可能だ。

「なんだ？」

エリオンは焦れたようにトレーネの言葉を急がせた。

「それで、私が父の遺志を継いだのか、と

「どういうことだ？」

「分かりません。父が以前に何かをしていたのか、私は知らないのです」

エリオンはうーんと唸つて考え込んだ。

「父は、ずっとグリュックがショバ皇帝に統治されたことを嘆いていました。そのことと関係があるのでしょうか？」

「まあ、その者に会えば分かることだ。ここで待つ」

エリオンはそう言って、椅子のひとつを引き出して腰掛けた。

「エリオン様」

「無駄だぞ」

椅子に腰掛けて足を組み、居座る様子を見せたエリオンに、トレーネはもう何を言つても無駄であることは承知していた。承知はしていたが、このままここに居座られても困る。彼の顔が皆に知れ渡つてゐる訳でもないが、記憶の良い者なら直ぐに分かるはずなのだ。何度もなく、領民の前に姿を現しているからだ。

「急ぐのだ、トレーネ」

どう言つてこの頑固者を説得しようかと頭を巡らせていた少女は、その言葉に思考を中断された。

「あと五日だ。五日の後に到着すると、先触れが来たのだ」

隣に立つていなければ聞こえないほどの低い声だったが、緊迫した響きがあった。

「今夜もフェンダーが来ると思う。思ったよりも早く準備せねばならなくなつた」

床を睨むように言うエリオンに、トレーネは説得の言葉がないことを悟つた。

「本当に決行なさる御積りですか？」

エリオンは今更なにを言うのだとでも言わんばかりにトレーネを見上げた。

「父は既に人間ではない。いや、もう父ではない」

エリオンの声は、トレーネにはひどく沈んで聞こえたような気がした。

広場から逃げ出した男は、短剣で人を脅して道を空けながら、裏路地へと入つて行つた。

シャオンも負けずに後を追う。ここでは一生悔いが残るといふものだ。

あの金はサナオに嫁ぐという姫を護衛して、二ヶ月も平和な旅を続けてきた恩賞なのだ。退屈料だ。しばらく遊んで暮らせると思つていた矢先のことだつた。まさかヴァルという小さな愛らしい動物が金を盗んでいくとは考えもしなかつた。金を手に入れたという安全感もあつて、あの洞穴でシャオンは本当にぐっすり眠つていたのだ。

それに金泥棒に遭いさえしなければ、グリュックに長居するつもりもなかつたし、ウェルの知り合いの宿にも行きはしなかつた。無論こんな厄介事に巻き込まれることもなかつた。

すべての元凶が今、目の前を逃げている。

男はまた路地を曲がつた。

しかしそこは行き止まりであつた。

シャオンは追い詰めたとばかりに、唇を片方持ち上げて不敵に笑つた。息は全くあがつていない。

一方、男は肩で息をしていた。

もちろんわざかに遅れて追いついたウェルも、肩で息をし、片膝に手を付いていた。

「だらしねえな、ウェル。息があがつてるぜ」

シャオンは剣を抜き、それを男に向けた。

「金、返せよ」

「馬鹿か、お前」

男は言つが早いが、手を唇に当て小さく口笛を鳴らした。と、両脇にあつた家から、男達が出てきた。

十人はいる。

咄嗟にウェルも身構える。シャオンは舌打ちして、憎憎しげに男を見た。男は既に勝ち誇ったように目をきらつかせている。ウェルも剣を抜き、シャオンと背中合わせになつた。

「どうするのですか？」

「遊んでやるさ」

誰もがならず者と言われても仕方のない荒んだ表情に見えた。彼らは短めの剣を手に、ニヤニヤと笑つてゐる。

その男達の背中越しに、役人の姿がみえた。

「シャオン、木偶人形です。傀儡役人が付いて来ています」

ウェルはわざと男達にも聞こえるよつに大きな声で叫んだ。

「なに？」

シャオンもウェルの見てゐる方向を振り向いた。

さつき曲がつた路地の角に、二人の役人が立つてゐた。

何もせずに、騒ぎを起こしてゐる者達を捕らえようともせずに。

一番後ろで腕組みをしていた男が、顎で皆に合図をした。一斉にもとの民家に入つていく。

「あつ、おい待て！」

「やめましよう」

ウェルは剣を收めて、シャオンの腕を取つた。

「何だよ、冗談じやねえ」

「見て御覧なさい」

促されてシャオンは役人を見た。

彼らは生氣のない目で、じつとシャオンとウェルを見つめているのである。

死んだ魚のように生氣がなく、不気味な目だ。彫像のよつに微動だにせず、その場にじつと立つてゐる。

「見ているのですよ。私達を」

「氣味悪りいなあ」

「男達は知っているのですよ。役人に楯突けば自分達がどうなるかを。反対に騒ぎを起こさなければ、見逃してもらえる」

「でも、町にいる役人全部が木偶人形じゃあるまい？」

二人の役人はシャオンとウェルに動きがないのを見ると、踵を返して路地の向こうへと姿を消した。

「たぶん彼らは知っているのです。木偶人形であろうが、本物の役人であろうが、彼らに楯突くことが、どんな恐ろしい結果を招くかを」

「どういう意味だよ」

「そのままで。本物の役人なら見ているだけでなく剣をふるうのかもしませんね。そして傀儡役人なら、これは妖術を使って動かしている闇の使いです。使っているほうが本気になれば、あの体を通して妖術を仕掛けることくらい容易いでしようから」

「食われるつて言つのかよ」

ウェルは首を横に振った。

「それは分かりません。でも、今騒ぐのはまずいでしょう？」

シャオンもさすがにウェルの言つている事に従う他はなかつた。シェバ皇帝を狙つているのに、ここで騒ぎを起こしてしまつては元も子もない。

「畜生、目の前に金泥棒がいるつてのによ」

シャオンは深い溜息とともに剣を收めた。

ウェルは渋面のシャオンの肩に手を乗せると、辺りを見回しながら言つた。

「さて、ここはどこでしようか」

とにかく男達が消えたこの袋小路に何時までもいてはまた騒ぎの元になるので、二人はグリュックの王城を背に、歩き出した。

ウェルとシャオンが旅亭トラオに到着したのは昼も過ぎた頃だつ

た。

二人は嫌というほど路地を歩き回ってきた。グリウスは水路が縦横に走り、道が網の目のように張り巡らされている。ひとつ曲がる角を違えれば、慣れない道はみな同じに見え、同じ所を回っているということすらある。

これもグリウスが難攻不落である要因のひとつだ。

整然と計画的に整備された街は、同じような家屋が並ぶ。二階建て以上の背の高い家もない。町の中心にグリウス城がそびえ立っているかのようだ。

これについてはウェルがシャオンにこう話した。

敵が万が一グリウスに迫つた時、その動向は城から見下ろせば一目瞭然である、と。

これほどに外的から守るために都すべてが整備されている国もまづないと、シャオンは感想を漏らしたほどだ。

そんなグリウスを、十五年前、シェバは侵略した。

「あなたが言うように、そしてあの役人が証明するように、シェバが妖獣だとすればこの侵略がなぜ成功したのかの説明も付くというものですね」

ウェルはシャオンにそう話した。

もちろん、シャオンは「だから本当に妖獣だつて俺が言つてるじやねえか」と付け加えることは忘れなかつた。

裏路地を迷つてゐるうちに、戻る道すがら目にする荒んだグリウスの様子には一人とも胸が塞がつた。路地には今日の食べ物にも困窮しているように座り込んでいる者、物乞いする者、殴り合いの喧嘩、窃盗に恐喝、こ一時間の間に、犯罪と食えはすべて目にしたようなものだ。

そんな訳で、道に迷いつつトラオに到着した二人は空腹と疲労で目眩すら覚えていた。

トラオでは昼食を摂る客ももう三組ほどになつている。

「ウェル様、シャオン様」

入口を入つてきた一人を見咎めてトレーネはすぐさま駆け寄つてきた。

「どちらへおいでだつたのです?」

「何だよ、俺達がどこへ行こうと

「すみません。ちょっと街を見に行つてきました」

ウェルが笑顔でシャオンの前に立つて言葉を遮つた。ウェルの後ろで憤慨したシャオンが、白い歯を剥いているのがトレーネの目にも入つて、彼女を小さく笑わせた。

「お客様がお待ちなのです」

「客?」

シャオンはウェルの肩越しに顔を出した。

「グリュックに知り合いなんぞいないぜ」

トレーネは困ったように小首を傾げて、二階に行くことを促した。一人の後ろにトレーネも従う。

トレーネが部屋の扉を叩き、一呼吸おいて開けた。訪問者は窓際に立つっていた。入口に背を向けている。

まず、艶やかな黒い髪が目に入った。その者がゆっくりと振り返る。

目鼻立ちのはつきりとした凜とした顔。こちらを睨む瞳には鋭く値踏みするような光が閃いた。

トレーネが一人を部屋に通し、扉を閉め、入口を背に立つ。

シャオンはトレーネが退路を断つたことを不審に思つて何事か言いかけたが、すぐさまウェルに腕を掴まれて大人しく引き下がつた。もちろんシャオンは不貞腐れて相手に顔を見られないよう顔の左側を向けて立つ。

ウェルは丁寧に頭を下げた。いつものように金色の髪が肩から零れ落ちた。

「ほお。フエンダーの言ひ神官とはお前か」

窓際の男が権高な態度で腕組みをし、人を見下すことになれた口調で言う。

ウェルの斜め後ろでシャオンが舌打ちをした。

「ウェル、と申します」

「私はエリオンだ。グリュックの現在の城主でシェバの第三王子、といえば分かるな」といふて、その時だった。

「お前は……」

ウェルの後ろで知らぬ顔を決めていたシャオンが、ウェルを押しのけてエリオンを見た。まるで靈体か妖獸を見たかのように強張つた顔つきで。

右目は大きく見開かれ、ウェルを押しのけて掴んだ腕が小刻みに震えている。

エリオンが自分を見て「お前」呼ばわりする人間に向かって、腹立たしげに一步を踏み出した。

「シャオン、どうしたのです？ あなたらしくない」

ウェルは腕を握り締めてきたシャオンの顔を覗き込んだ。だがそれに反応したのはエリオンの方だった。

「 シャオン、だと？ まさか……まさか……」

「お前だつたのか、シェバを狙つてゐるつていう馬鹿は」

シャオンの感情を抑えた低い声が部屋に小さく響いた。

エリオンの瞳が眇められた。堪えきれない怒りを抑えるように拳を握り締め、唇を噛んでいる。

狭い部屋に張り詰めた空気が流れた。薄い膜がぴんと張り詰め、どんな些細な穴が空いても弾け飛びそうな空氣。息を吐き出すのも躊躇われそうな緊張がある。

「お前か、化け物。まさか、本当に？ 生きていたのか、貴様」

シャオンは屈辱に耐えかねたような憂いに満ちた瞳でエリオンを睨んでいる。

「生きていたさ。それこそ血の滲む様な思いをしてな」

エリオンがそれを聞いて、腰に差していた剣をすっと抜き去った。

「エリオン様！」

トレーネの悲鳴が響いた。

エリオンは唇に冷笑を浮かべていた。だが、目は少しも笑っていない。薄汚れた醜悪なものでも見るようだ、冷眼視している。「だったら今ここで死なせてやるわ。なあに、直ぐにシェバが後を追う。あっちの世界も寂しくないぞ」

「やめてください」

ウェルやシャオンが何か言つよりも早くトレーネは駆け出し、エリオンに縋りついていた。

「やめてください。何故です？ エリオン様！」

「どくのだ、トレーネ。いいか、こいつは妖獣だ。シェバの、いや、妖獣にとり憑かれた父から生み出された悪魔だ」

エリオンはシャオンをまっすぐ剣先で指し示した。一斉に視線がシャオンに集まつた。

トレーネは驚愕に目を見開いて。

ウェルはいつものわずかに浮かぶ微笑を失つて。

シャオンは強く瞳を閉じた。屈辱に耐えるように歯を噛み、何の反論もしなかつた。

「どけ、トレーネ」

「い、いやです。シャオン様は何もなさつていなければなりませんか」

「何を言うのだ。あいつは普通じゃない。見る、あいつは妖獣の血を引いているのだ。憎き妖獣の子供なのだ」

エリオンは興奮したようにまくし立てた。

「お待ち下さい」

凛とした声がエリオンとトレーネの視線を集めた。ウェルがシャオンを背に庇う様にして言った。

「彼は私の大切な相棒です。彼を傷つけることは私が許しません」  
ウェルの語りは凪いだ波のように静かだったが、凛然とした態度がエリオンを黙らせた。

なまじ容貌が整っているだけに凄みがある。

「神官殿」

エリオンは剣を収めたが、手は柄に添えたままだ。

「神官ともあらう者が、妖獸を庇うとは」

ウェルが険しく眉をひそめる。

「シャオンは私の相棒です。彼のことがお気に召さないのであれば、この依頼はこれまでです」

丁寧な口調なのにウェルの声は怒りに満ちていた。だが激高して声を荒げているわけではない。凪いだ波が突如として牙を剥き、一気に岸壁に押し寄せて砕けそうな、そんな激しさを秘めた声であった。

「では、結構。私はこれからシャオンとともにここを出ましょう」

ウェルは言い終わらないうちに、壁にかけてあった外套と、寝台の上に置かれていた荷物に手を伸ばした。

それから何かを思い出したかのように、ふつと顔をあげてエリオングを見た。

「言い忘れましたが、私達を消そうとしても無駄ですよ」

ウェルはエリオンを厳しく見据えた。いや睨んだと言つてもいいかもしれないが、トレー・ネはその怒りに満ちた顔に驚き、手で口元を覆つた。

「私の力を見くびると、痛い目を見ます」

トレー・ネとエリオンはその時、目の前の空間が、まるでガラスにひびが入ったような音を立てたのを確かに聞いた。

稻妻が閃いたような衝撃に似ていた。今ウェルに触れれば、たちどころに怒りに感電でもしてしまいそうであった。

エリオンは降参したとでも言つよう、手を上げた。

「分かったよ。そいつのことは、あとだ。今は、もっと大きな敵がいる。貴方は怖い人だな。フェンダーの言う通りだ」

ウェルは再び寝台に荷物を置き、エリオンを見た。微笑みは失ってはいるが、多少の怒りは解けたように見える。

「何か私どもに御用だったのですか？」

エリオンは大きく息を付き、入口へと歩きながら言った。

「よい、また今宵、フェンダーとともに参る」

無論、そばに立つシャオンを睨み付けてゆく」とは忘れなかつた。

静寂が部屋を支配していた。シャオンは俯いたまま立ち尽くしていた。

まさか、エリオンが現れるなどとは夢にも思わなかつた。一度と出会いたくない自らの過去が、あまりにも突然、目の前に現れた。シャオンの頭の中は、真っ白だつた。

妖獣の子。

その言葉が、剣となつてシャオンの胸に突き立つたままだつた。

「ウエル……」

「何も言わなくともいいですよ。私は初めて貴方に出会つた時から気付いていました」

ウエルの言葉にシャオンは目を瞬いた。その顔は今にも泣き出しそうに弱氣で、捨てられる飼い犬が縋りついて飼い主を見上げるようにはめしそうだ。

「何故つて、私には聖と闇の力の区別がつくのです。シャオンの異常な聴覚と嗅覚、その体力、それらに闇の力を感じていました」

ウエルの顔は今までとなんら変わりのないわずかな微笑を湛えたものだつた。

「貴方はいつも聖でいらっしゃる、その事は見ていてすぐに分かりました。その心根の強さが、いつも素晴らしいと、思つていたのですよ」

シャオンはその時、ウエルの歯の浮くような世辞でさえ、何故か嬉しかつた。何か言いたかつたが、言葉が喉につまつて出てこない。泥と、清水が交じり合つたみたいだつた。どんどん心が濁つていつて、シャオンの思考というもののすべてがせき止められたようだつた。「でもまさか、ショバ帝国の王子殿下だとは想像もしませんでした

よ

「やめる」

「すみません……ひとつ聞いてもいいですか？」

シャオンは首を横にも縦にも振らなかつた。無言の返答を了解と  
とつたのかウェルが続きを話し出した。

「エリオン殿とシャオンが兄弟なのは分かりました。でも何故、貴  
方だけが？」

シャオンは端的に話すウェルの言葉に直ぐに首を横に振つた。  
「俺が生れる前のことだからよくは知らない。だが、皆言つていて。  
シェバは突然他国を侵略し始めて、その頃からおかしくなつたって。  
妖獸に体を乗つ取られたと噂されたらしい。俺だけがその後で生れ  
たんだ」

「なるほど。では、妖獸ではなく妖靈が、シェバ王の心の闇の部分  
に入り込んだのです。そして体を乗つ取つた。心の闇を食うのは妖  
靈、聖靈と妖獸の境界にいるものです。妖靈には実体がない、聖靈  
と同じです。これは厄介ですね、妖獸よりも手ごわい」

シャオンはようよると寝台に行き腰掛けた。

そんな事は、今はどうでもいい。妖靈だろうが、妖獸だろうが、  
シャオンにとっては同じことだった。

すでに痛みすら感じない顔の左の傷が、うずいた気がした。

「ありがとう、ウェル」

それにはウェルは何も言わなかつた。シャオンも顔を上げなかつ  
たので、ウェルの表情は見ることが出来なかつた。

「それにしても空腹ですね。ここは健全に、食事を取りませんか。  
夜に備えて」

ウェルがにこやかにそう言つたので、シャオンもつられて微笑ん  
だ。

無限の暗闇とも錯覚する場所にそれはいた。

闇に覆い隠されて姿も判然としない。

ゆつたりとした椅子に腰掛け、肘掛けに体を預けている。

もしも明るい光があるならば、錦の織物で作られた途轍もなく豪華な椅子であることが知れるだろう。が、暗闇の中ではそれは無用な飾りとも思われた。

ゆつたりと足を組んでいる。

足元にも毛足の長い敷物が敷かれていた。

頭は下方に向かつて傾いでいる。

部屋には窓があるが、分厚い布で覆い隠され、それはさらに光を通さずに、どんな明るい口差しも遮り闇を維持する勤めを果たしていた。

他に何もない部屋である。

壁を装飾するはずの絵画も、客人を大抵は喜ばせる美しい花も、机もないで茶器の類も見当たらない。

ちょうど置かれた椅子の真正面にあつた扉が、ゆつくりと開け放された。

そこから一人の人間が滑り込むように部屋に入ると、外に立つ兵士が一人がかりで扉を閉めた。

光のない部屋では、黒髪は闇に溶け、表情すら明らかにしない。

部屋にやつてきた人物は前に座す者に膝をついて礼をした。

「偉大なるシェバ皇帝陛下。只今、先触れが確かに届いたよし、連絡が参りました」

「ん」

シェバと呼ばれた男は、わずかばかりに反響する低い声で短く返事をした。

頭を下げる男は返答に満足したように声には出さなかつたものの

微笑んだよつだつた。

「五日後、と申しておきました。実際には一、二日後に到着すると思ひます」

「ん」

「グリウスに居りまするメテスによつますと、エリオン様の動きがやや……」

「よい」

「は？」

「殺れ」

それは短かつたが、耳にまとわり付くよつて湿度のある低い不快な声だつた。

男は頭を垂れた。

「ヤノス。ぬかるな。グリウスからアキロへ進行するのだ。邪魔だてる者は容赦するでない」

「御意」

ヤノスと呼ばれた男は、再び頭を垂れ、部屋を辞していった。

再びグリウスの旅亭トラオに、夜がやつてきた。

向かい合わせに扉のある質素な部屋で、ウホルとシャオンは座っていた。

斜向かいにある長椅子はまだ空いたままだ。そこに誰がやつてくれるのかは、話をせずとも知れている。

「いいのですか？ 今ならまだ止めることができますよ」

「いや」

シャオンは間をおかずにはつせりとしゃつ答えた。

「あいつ、いやエリオンのことはいい。あっちがどう思つてるか知らねえが、俺には兄貴でも何でもねえ。ただ、憎いのはシェバだ」

「父親でも、ですか？」

「親父？ 馬鹿言つた。あいつは母上の仇だ。俺の左田をこんなに

したのも、みんなあいつだ」

今にも爆発しそうな感情を抑えているかのよつこ、シャオンは低く小さな声で話している。

「……そうでしたか？」

それきり、二人は沈黙した。

シャオンはじっと足元を見ていた。

今は何かを話せば泣き出しそうな自分がいる。ずっと心の深いところに秘めていた思いが、エリオンの顔を見たとたんに、噴火するかのじとき勢いで湧き出してきたのだ。一度溢れ出た感情はもう止める事は出来ない。

シャオンはちらりとウエルの顔を盗み見た。

そうして座つていても、どこか微笑んだように見える温容な顔。いつもと変わりのない彼が座つている。

シャオンは少し安心した。

ウエルが何も変わらなかつたからだ。今まで通り、何も詮索しないし、問いただしたりもしなかつた。シャオンにしてみれば、聞いて欲しいような欲しくないような、今は複雑な心境ではあつた。

いまシャオンが最も恐れていることは、幼い頃、皆が揃つてしたように、ウエルに妖獣だと指をさされて蔑視の瞳を向けられることだ。

ウエルはシャオンのことを相棒だと言つた。それが、シャオンの心に暖かな光を差し込んだような気がした。今まで、ウエルは金儲けに便利な片割れであつたというのに。しかしそうではなかつた。だから、話したくなつたのかもしれない。するりと口から言葉が出てきた。

「なあ、ウエル。シェバは俺を可愛がつてくれたんだ。あんまり覚えていないが、よく肩の上に乗つてたことは覚えてる。代わりに兄弟達には嫌われてたがな。でも母上はいつも悲しそうだつた。そりやそりだよな、そいつは妖獣だつたんだしな。だから母上は俺と一緒に逃げたんだ。グリュックを攻めている混乱の最中に」「

ウェルは驚いたように、何かを言いかけた。シャオンは、左の前髪をいじりながら続けた。

「そりや可愛いよな、妖獣の血を引いた息子だぜ？」

シャオンは引きつった笑みを浮かべた。膝の上には握られた拳が乗せられている。

「……母上は体を真っ赤に染めながら、それでも左目を抉られた七歳の重い俺を抱かかえて、街を走って逃げたんだ」

「では、シャオンの母上は」

「死んだよ。街の外れで力尽きて。だから、ちょっとグリウスに立ち寄りたくなったんだ」

再びウェルが何かを言おうとした時、扉が開かれた。トレーネが入ってくる。

少し怯えたように、ウェルとシャオンを見たが、直ぐに後ろにいる者達に椅子を勧め、自分は戸口に立つた。

四人の男達がフードを口深に被っている。

うちの一人がフードを取りながら椅子に腰掛けた。エリオンとフェンダーだ。

いつもなら一つの入口を見張りに行くはずの護衛の二人は、今日はエリオンとフェンダーの両脇を固めて立つた。フードを取ると、いずれ劣らぬ精悍な戦士といえる鋭い目付きの持ち主だ。両腕は剣を振るうに十分な筋肉で覆われている。

エリオンは険阻な顔でじっとシャオンを睨みつけていた。

フェンダーも探るようにシャオンを見た。

シャオンも今日は顔を隠さずに、一人を見据えている。

「なるほど、初めて見た時に、なんとなく見たことがあると思ったはずだ」

フェンダーは豪放磊落にもエリオンを前に言った。無論エリオンが冷酷な瞳をフェンダーに向けたことは言うまでもない。

「マリノワ様に似ておられる」

シャオンは警戒したようにフェンダーを見た。

マリノワという名の人物に対する言葉遣いまで違っている。厳つい無精ひげの生えた顔までがどこか優しさを帯びていた。

「いやいや。御美しかつたので、よく記憶しているのだ。私は直ぐに東の国境に送られたから、それ以後のことはよくは知らん」

「お喋りはその位にしておけ、フェンダー」

エリオンがいかにも傲然と腕を組み隣のフェンダーを諫めると、フェンダーも直ぐに頭を下げた。

エリオンは腹立たしそうに鼻を鳴らし、隣に立つ兵に顎で合図を送った。

兵の一人は懐から巻物を出し、それを小さな机の上に広げた。完全に広げ終わる前に、エリオンが兵の手を止め、ウェルを見上げる。

「我々に力を貸すことに異存はないのだな。今更、とは思うが」挑むようなエリオンに、ウェルは相変わらずの微笑で返した。

「そう申し上げました」

「何故、我々に協力する?」

ウェルは小さく首を傾げた。

「フェンダー殿にも申し上げましたよ。何も御奉仕しようとしているのではありませんからね」

エリオンの片眉がきっと持ち上がりて唇が歪んだが、そのまま兵の腕を押させていた手を離した。

兵の手で、紙が広げられる。

そこにはグリウス城の見取り図とも言えるものが描かれていた。迷路のように入り組んだ城門から城の入口までの道のり、水路の配置。衛兵の巡回順路が赤色で示されている。城内は一階の部分が詳しく描かれ、奥にある階段から四階までが省かれ、最後に四階部分がまた詳しく地図として描かれている。

「これは……」

とは、ウェルの言葉だ。

ここまで丁寧に仕上げるには余程の時間がかかっていることが一

目瞭然だ。

「よく見る」

エリオンは言葉を発するたびにシャオンを睨みつけながら、青で示された線を指で辿った。

「この青い線は隠し通路だ。我々がいつも使っている。これははとある民家に通じていて、城のほうは巧妙な隠し扉となっている。ここから進入するのだ」

シャオンとウェルは身を乗り出して地図に見入った。

「この赤い線が兵の見回り順路です」

今度はフェンダーが、剣を振るうに相応しい太い指で赤い線を辿つて見せた。

「ただし、ある時間だけは、この城の隠し扉から城の入口までが兵の監視の目から逃れられるように私がこの順路を組みました。だから、私はこうしてここにいるのです。これを逆に利用し、神官殿が城に侵入する際の入口とします」

「なるほど」

ウェルが感心したように頷いた。

「で？」

続けてエリオンとフェンダーに話を促す。フェンダーはひとつ咳払いをして続けた。

「先触れでは五日後に、いや田が変わったので四日後ですが、シェバ王が到着致します。

到着したその夜、もちろんシェバはこのグリウス城で一番安全で豪華な部屋に宿泊するでしょう」

そう言ってフェンダーは、城の入口から指を滑らせ、階段を上がり、四階部分の一一番広い部屋を指差した。四階部分でもそれは最奥にあり、幾重もの扉を介して進まねば入れない部屋だった。

「ここです」

「もちろんシェバが到着すれば兵の数も増えるだろう。だが、城の入口までは確実に入れる。その後は、フェンダーの作った警備の隙

をかいぐぐつて四階に上がる。部屋の奥には私の名を使えば容易く入れる。私は息子だからな、一応。そこからが戦いだ」

エリオンは興奮したように椅子に深く掛けなおした。

ウェルとシャオン、エリオンとフェンダーはしばし机に置かれたグリウス城の地図を無言で眺めていた。

「では、私は妖獸が現れた場合、力を貸せばよろしいのですか」

「そうだ」

言いながらエリオンはまたシャオンを睨む。

「ふむ……」

ウェルは形のよい顎に手を添えたまま地図を睨んだ。

「お聞きしたいことが二つあります」

「なんなりと」

とは、フェンダーである。

「ひとつはシェバがグリュックに何をしに來るのが、といひ」と。もうひとつは現在、城内に妖獸はいるのかということです」

「シェバは隣国アキロに侵攻する為に來るので。それから妖獸はいないと思います。殆どはエリオン様に付き従つて來た者ばかりですし、新参のメデスも普通に見えます」

「ではシェバが到着すればどうですか？」

ウェルが上目遣いにフェンダーとエリオンを見、一人は困惑したように顔を見合わせた。が、二人が何か言うより早くウェルが先を続けた。

「当然、妖獸がシェバの周りには多くいるでしょう。どうやらシェバには心を食う妖靈が取り付いていると思われます」

「心を食う？」

「そうです」

田を丸くしてこるエリオンに、ウェルはひとつ息をついてから話しだした。

シェバの心の黒い野望、つまりは負の意識を食う妖靈がいること。それは簡単に伝染し増殖し、闇を引き寄せ、さらに強く深い闇、つ

まり妖獣を呼ぶこと。シバを中心に妖獣が巣くっている可能性があることを話した。

「私一人で、それらに対することが出来るかどうかはわかりません。それから、これはとても重要なことです……今現在もグリュックには妖獣がいますよ」

冷静そのもののウェルの言葉に、エリオンとフェンダーは再び顔を見合わせた。驚きに満ちた顔を。

「昨日、街を歩いてきました。街には妖獣の使いにされている兵が歩いています」

呆然とする一人に、シャオンが初めて口を開いた。

「四階まで行けたとしたって、そこにはわんさと敵がいる。俺ら六人で何が出来るつてんだ？」

エリオンは勢いよく身を起こして立ち上がった。

「刺し違えたつて、シェバの息の根を止めてみせる」

「言つだけなら簡単なんだよ」

シャオンは吐き捨てるように言つた。立ち上がったエリオンの怒りに満ちた顔を下から睨む。

「やめましょう、シャオン。今は、もつと確実な計画を立てるのです」

ウェルの顔からは、また微笑が消えていた。

「つまりは、この城門から入口までの道も既に安心ではないということです。妖獣の目にされている役人はフェンダー殿の指示に従つて行動していないはずです。そしてシェバが到着すれば、妖獣の数は一気に増え、グリウス城自体に闇の結界が張られる恐れがあります。聖なる力の私がそれに触れれば、たちどころにシェバの知るところとなるでしょう」

エリオンは端正な顔を険しくしたまま、椅子に腰を下ろした。フェンダーもため息をついている。もちろん両脇に立つ兵も互いに目を見合わせ、不安げな表情に変わっていた。

この完璧な地図を仕上げ、ウェルという力を得たエリオンが、ど

んなにこの計画に自信を持っていたのか、シャオンには手に取るようになつた。

それでも事実は事実だ。街には傀儡人形が歩き、シェバは強大な闇の力を持っている。たつた六人でむやみに斬り込んでいったところで、一国の皇帝シェバが倒せるはずもない。

シャオンは今まで、いろんな修羅場をくぐり抜けてきた。母親と死に別れてからは、死に物狂いで生きてきたのだ。それこそ命を懸けて戦ってきたのだ。もちろん妖獣とも斬り合つた事もある。といつても人を食うような強力な妖獣には出会つたことはなかつたが。シェバを倒すことなど、この人数ではもともと無理なことだつたのだ。そんなことが簡単に出来るのならば、当の昔、自分がシェバに復讐していた。

だが、ウェルの口から出た言葉は、他の誰もが想像もし得なかつた言葉だつた。

ウェルはまるで今日の夕食はなんにしましようか、などと軽口を叩くように、本当にさらりと言つたのだ。

「もつと確実な方法でシェバに迫りましょう」「みなが一斉にウェルに注目したことは言つまでもない。

ウェルの顔は嬉々として輝いていた。こんな顔をしたウェルを、シャオンは見たことがなかつた。

「私はこんな機会をずっと待つていたのかもしません。本当は、すべてを忘れているような振りをして、実はそれをこそ望んでいたのかもしませんね」

感慨深げに言う美貌の青年は、何か固い決意をこめたように静かに立ち上がり、トレーネに筆を借りることができるかと尋ねた。

トレーネはすぐにと返答し、しばらくして戻ってきた。手にした筆をウェルに手渡す。ウェルは丁寧に礼を言つと、机に広げられた紙に向かつた。

ウェルは筆をとつて紙に線を書き入れた。グリウス城の四階の最奥の王の私室から、線はすつと階下に下り、城門の傍を抜け、隠し戸のある民家の横を通り、何もない空間へとすすんだ。

その空間に小さく家を描き込み「トラオ」と名を入れた。

みなが息を呑んでいることもかまわずに、ウェルはその線の途中からまた書き足し、今度はトラオとは正反対の方向へ伸ばした。そこにも小さく家を描き「神殿」と書いた。

「これは代々のグリュック王家の王だけが使う隠し通路です」全員が同時にウェルを見た。

いつたい何を言つているのか、咄嗟には判断が付きかねたからだ。

シャオンが立ち上がり、ウェルの肩に手を乗せた。

「ちよつ、と待つてくれ。そりやどういふことだ」

「どうもこうも」

ウェルはいつもゆつたりと丁寧な口調を貫いてはいるが、はやる心が抑えきれないのか心持ち早口になつていて。

「この道を使えば、誰一人傷つくことなくシェバ王の喉元に食らいつくことが出来ますよ」

地図に目を落として釘付けになつていたエリオンがゆつくり顔を上げ、ウェルを見上げた。

無論、不信感をあらわにしてだ。いま現在グリュックのグリウス城にいる自分達すら知らぬ地下通路を使おうと提案するこの人物に對して。

「お前、誰だ」

エリオンが上目遣いで、探るように低い声で尋ねた。

ウェルは小さく息をつき、肩をすくめた。

「ここに誤魔化しても、エリオン殿は信じては下さいますまい。嘘は嫌いですが、ひとつだけ端折ったことがあります。私の本当の名は、ウェルトス ウェルトスリディウス・ゼディウス・グリウス・ラ・グリュックと申します。それでおわかりでしょう？」

瞬間、シャオンのウェルの肩に乗っていた手が、力を失つて落ちた。

そこにいた全員が、ウェルの言葉の真意を計れず呆けた表情になつていた。

名にグリウスを持つ、彼の眞の正体を、一体誰が直ぐに想像できたらうか。

「一度は言えません。何度言つても、誰も覚えては下せんからね」

ウェルはそう言つていつもより少し口の端を持ち上げて、誰をも魅了する笑みを見せた。

彼には今、冷厳とした犯しがたい氣品がある。

だが、その微笑みは一瞬後に消え去つた。

「ですから、シェバは私には宿敵、父グリュック王と母の仇です」

ウェルの感情を抑えた低い声が、狭い部屋の中にいる六人の耳に届いた。無理に感情を抑えたそれは、とても胸の詰まる、悲痛な叫び声と誰もが錯覚しそうだつた。

エリオンも、そしてフェンダーも、誰も声を出さなかつた。

それは詰まる所、ここにいるシャオンさえも、ウェルにとつては

敵なのだ。

グリュック王家、ただ一人の生き残りにしてみれば。  
部屋の入り口で、トレーネだけが手で口を覆つて瞳を潤させていた。

どれほどの沈黙だつたろうか。

誰もが、ウェルの言つた言葉を頭の中で何度も反芻し、それでも現実を直ぐには受け入れられずに、戸惑つた。

十五年前、グリュック王家の者は全員死亡したものと誰もが思つていたからだ。それほどに慘烈な侵略であつた。

「……でも、それは昔のことです。私が仇をとつたところで何も生み出しあいません。そのことは重々承知しているつもりですから」  
ウェルはエリオンの顔を見た。エリオンは眉をひそめてそれに返した。

「どういう意味か、説明してくれないか

「お分かりではありませんか？」

真つ直ぐなウェルの瞳にエリオンはたじろいだように唇を小さく尖らせた。

「ショバを倒しても、私にグリュックが戻つてくるわけでもありません。私にはすでに従う臣下もいません。いまさら王を名乗つたところで、この国が混乱するのは目に見えていることです」

ウェルは意識してかせづか、一呼吸おいてふたたびエリオンとフエンダーの顔を見た。

「ショバを暗殺することは、まあ容易いとは言えませんが不可能ではないでしょ。けれどその後のことのほうが、何倍も大変なのです。國を、建て直さなくてはならないのですから」

「そんなこと！ 貴様に言われたくはない。貴様を信じたわけではないからな！」

エリオンは、ウェルがあまりに穏やかに淡々と語るので机に拳を振り下ろし、憤慨して吼えた。

「でしたら、私には何も言つことがあります」

ウールは机の上に広げられた紙に目を落とした。

トラオと書いた家を指差す。

「これはこの旅亭のことです。トレーネ

「は、はいっ」

トレーネは瞳に溢れそうになっていた涙を手で拭つと一步前に進み出した。

「この家の、どこか、使われていない部屋がありませんか？ もしかしたら、トレルオムが封印しているかもしません」

「あります！ この部屋の隣は父が物置のように使っていましたのですが、亡くなつてからはそのまままで、もうずっと開けていません」

トレーネは扉の一方を指差し興奮したように言つた。

「ではそこが入口です。そこから地下に入つて、王宮の四階、王の間に続いているのです」

一同は一斉に机上の地図に見入つた。

エリオンとフェンダーは懐疑的に、一人の兵士は互いに目を見合わせながら驚きの表情を隠さず、トレーネは地図と扉を交互に見、シャオンは地図から目を上げ沈痛な面持ちで隣のウールを見上げる。

「昔……」

ウェルは懐かしそうに目を細めて、トレーネを見た。

「子供の頃、父に連れられてここに来ました。トレルオムは列記としたグリコック王家の臣下、この地下通路の扉を守る番人でした……この部屋は、はつきり覚えていませんが、向こうの扉は裏口でしょう？ 確か目立たない道に出たはずです」

「そうだ。だから、我々もここから出入りしている」

エリオンがその扉を顎でしゃくつた。それから、はっと気付いたようにウェルを見た。

フンダーもほおつと頷いた。

「なるほど、それでこの裏口は目立たないのですな。そう言われるト納得することもある。少し行くと、直ぐに隠し扉の民家があつて、いつも目立たずに入れりできる」

「グリウスはそれ自体がすでに城のよつたものなのです」「

ウェルはそう言って、自らが書き記した印を辿り、王城の王の間に辿り着いた。

「そして、ここ。王の間の入口は現在、聖術によって隠されています。父王が私をここから逃がす時、元々仕掛けられていた力の封印を解き、そこを閉鎖しました。妖獣どもに見つからないように目隠しを施してあります」

ウェルはおもむろに立ち上がり、

「では、行つてみましようか」と、涼しい顔で言った。

皆が一斉にウェルを見上げる。

「今から?」

エリオンがウェルに抗議の声を上げた。

「そうです」

皆の反応に対し、ウェルの声は急に厳しいものへと変わった。「シエバが四日後に到着するという保障はありません。むしろ早くなると思つておいたほうがいい。それ位でちょうどいいです。狙つなら、到着したその日。ほかにありますか?」

否を唱える者がいるはずもなかつた。

シャオンだけが、再び真っ白な迷霧の彼方へ、誘われたかのようであった。

密会していた部屋の隣は、小さな物置部屋だつた。

トレルオムが亡くなつて三年、ほとんど放置されたままだつた部屋は、埃っぽく湿氣ていた。小さな明り取りの窓があり、古い本や棚に積み上げられた箱が所狭しと置いてある他は何もない。確かに部屋は、これでは残されたトレー・ネが整頓しようという気持ちにならないもの理解できるほど雑然としている。床には東方の織物と思しき、金糸の入つた敷物が敷いてある。それも汚れていて、かなりの古さであることは疑いようもない。

狭い部屋に、トレー・ネを先頭に七人が入るつとしていた。

「ここです」

トレー・ネは思わず手で口元を覆つっていた。

それほどに埃っぽい。

「すみません。掃除していなくて」

手で畳を払う仕草をしながら、トレー・ネは足元に積まれた本を退ける。

次に部屋を覗いたウェルが、一目見てこの部屋が出口であることを告げた。

積まれた荷物の隙間はちょうど一人がゆっくり通れる幅。ウェルが臆せず真ん中辺りに進むと、敷物がわずかによれでいる。ウェルがその敷物を摘むとすると持ち上がつた。

同時に感嘆の声が上がる。

敷物の無くなつた床には扉が付いていた。

重く軋む音とともに、扉が持ち上がる。

瞬間、湿氣つてかび臭く混濁した冷気が物置部屋になだれ込んできた。肌があわ立ち、自らの腕をつい摩つてしまいたくなるような冷氣だ。

その暗い通路を覗き込むウェルの悲壮な表情がシャオンの目には

いつた。胸が痛くなるよつた十五年という歳月をシャオンは感じていた。

グリュックが侵攻されて十五年。王家が滅びて、少なくともこの通路を使う者はいなくなつたのだ。

ウェルとシャオンはくしくも同じ年、同じ時に大切なものを失つた。

一人は母親と左目を。一人は國も肉親もすべてを。仇は共にシェバだ。それだけは同じ。

仇は同じでも、シャオンがシェバの息子であるという事実はどう足搔こうが変えようもない。それだけではない、ウェルはグリュックの王の子供だった。

シャオンはウェルの硬い表情を見て思つた。この瞬間初めて。

ウェルが自分のことを本当はどう思つたのか、と。

ウェルはシャオンの持つ力が闇に属する力であることを知つていて、それでも何も変わらずに今まで共にいてくれた。そしてシェバ皇帝の息子であることを知つてもなお、態度を変えずに今までと同じように笑つている。

ウェルは決して自らの心の内を顔には出さないし言葉にも表さない。そんな事は重々承知の上だつたが、それがシャオンには喉に痞えたような息苦しい思いを沸き立たせるのだ。

いつその事、憎いシェバの息子だと責め立てられた方がマシではないかと思うほど。未だその思いの正体を漠然としかシャオンは理解してはいなかつたけれど。

「一度降りてみましょう。使い物になるかどうか、多少の不安が残りますからね」

ウェルはそう言つて、梯子を降りていく。

シャオンもウェルの言葉に我に返り、後に続いた。トレーネ、エリオン、二人の騎士、それにフェンダーも。通路の中は、真つ暗だった。

あらかじめトレーネが用意していた明かりが灯される。

炎はジジッという音を立てて、わずかな冷たい風を受けて揺らいだ。空気は湿氣つて肌にまとわり付き、独特の埃っぽい匂いが鼻に付いた。

石に囲まれた狭い通路。足元は濡れたようにしつとりとしている。崩れた様子もなく、何の障害もなく通れる。七人はその通路をゆっくりと歩いていった。

途中、足を滑らせたトレーネが恐縮したようにエリオンの腕に掴まつた他は、誰も口を開かず、ただ仄暗い通路を真っ直ぐに進んで行く。

どれほど歩いたのか、時間と距離の間隔さえあいまいになるほど何の変化もない通路で、突然それは二手に分かれた。

「こちらがもう一つの出口である神殿に向かうはずです」

直進する方を指差してウェルが言つ。

「こちらが、王室へと続く道」

一同は左に曲がった先を確認するように覗き込んだ。無論その先が見えるはずもない。

「本当にこんなものがあるとはなあ。つづづくグリュックとはすごい国だ。長年にわたって南方の要所になつてきただけはある」エリオンはウェルを見て、頷いた。

「よし。この通路を使おう。我々の敵はただ一人。シェバだ。」

エリオンの小さいが威厳に満ちた声に、フェンダーも頷いた。従つた二人の騎士も。

一同はそこで一旦引き返すことにした。

もちろんエリオンとフェンダー達はまた監視の隙をついて、グリウス城に戻らねばならないからだ。

帰り道、何となく後方に回ったシャオンは、先行く明かりを持つウェルに遅れない程度に間隔を取つて歩いていた。

そこへフェンダーがシャオンの歩調に合わせてきた。

「あなたが噂のショバ王の末子だったとは、驚きだ」

フーンダーは小声でシャオンに囁きかけた。薄暗いので表情はわからないが、声の調子は全く変わらない。

「噂つてなんだよ」

シャオンのほうは不機嫌そうに返した。

フーンダーは声を殺して笑うと、「まあそつ怒りなさんな」と気安く肩を掴んできた。

シャオンはその手をとつさに払い除けた。睨み付けることも忘れずに。

「私はねえ、いちいちシエバのすることに楯突いたので、東の最前线にほり出されたのだ。だから何も知らんと言つたでしょ。でも噂なら風の頬りに聞くことはできる。シエバの末子はその血を受け継ぎ、後を継ぐに相応しい妖獸だとね」

シャオンの足が止まった。

「だから噂だと言つている。ところがその噂は、グリュックを侵攻した頃からぴたりとやんだ。ま、遠く東にいたのでは眞実のほどは分からんからね」

「ふんっ」

フーンダーは低く笑った。

「剣は、誰に教わった?」

「別に」

「そりやあ、いかんな。肩を掴んだ感じでは、しつかり肉は付いているようだし、この前の一振りで筋の良さは分かつた。どうだ、教えてやろうか?」

シャオンは明かりが遠のくのもかまわずにフーンダーを見た。

「おっさんは何でシエバをやりたいんだ?」

「きまつている」

フーンダーは間髪をいれずに答えた。

「東の戦線でも、妖獣はいた。あれは侵攻ではない。一方的な虐殺だ。」

答える声が怒りに震えていたように聞こえた。

「対する国を褒めたいね。もちろん戦線が膠着するように私が戦を仕掛けなかつたのだ。ま、おかげで、今度はグリュックに回されたわけだ」

笑いながらフェンダーは先に行く者達に追いつくために足を速めた。

シャオンにはとうてい笑える話ではなかつたが、フェンダーという男が少しほんわかつたように思えた。

顎に生えた無精ひげもグリュックの兵をまとめる將軍にしては不謹慎に見えるし、そうかと思えばエリオンに従つて皇帝の暗殺に加担する。どうも掴み処のない人物に思えたが、皇帝を暗殺しようと目論むだけの理由はどうやら持つてはいるようだ。

どうも一癖もふた癖もある人間達がここには集まつているらしい。シャオンにはそう思えた。無論自分も含めてだ。

岩を踏み歩く足音が、シャオンの耳には鮮明に届いている。その仲間の足音が、シャオンには妙に心地よく聞こえていた。

それはシャオンを地獄へと導く闇の魔王の誘いか、それとも、仲間の暖かな息吹なのか、はつきりと判別できなかつた。

異変は、地下通路の出口に戻つたところで起つた。

七人全員が扉から出て、元通り敷物を敷いた。その時に。

「おい」

シャオンが物置部屋の扉を睨みウェルに声をかけた。

「どうしました？　何か聞こえましたか？」

「なんだ？」

エリオンが一人の間に割つて入つてきた。

シャオンが静かにするようにと、唇に人差し指を当てる。

右目が炯炯とした光を放ち、暫くしてその瞳が閉じられた。

緊迫した空気が狭い物置部屋に漂う。

「外に何かいる。人間じゃあねえ。足音がおかしい、そう、四足だ。

ああ、四足だから何匹いるかはつきりしねえなあ

「四足だ？ 何を言つていいのだ」

エリオンがフェンダーと目を見合わせた。

「付けられましたね」

ウェルが妙に冷静な声で言ひとエリオンとフェンダー達を見た。  
「付けられたとは、我々がですかな？」

「そうです。その危険があるとは思つていましたが、こんなに早く

……

フェンダーは無精ひげの生えた顎に手を当てた。

「帰れないといふことか」

「何言つてんだおっさん。んなもん蹴散らしゃあいい」

シャオンが剣の柄を握り締めて言ひ。

「ふんつ、簡単に言つてくれるな」

フェンダーも不敵に微笑んだ。

「待つて下さい、二人とも」

ウェルが今にも扉から飛び出しそうな一人の前に立つた。

「エリオン殿、今回の事がどこからか漏れはしませんでしたか？」

「馬鹿を言つた。そんな事があるはずはない」

「では……」

ウェルは物置部屋の扉に手をかけながら続けた。

「エリオン殿も監視されていた恐れがありますね。妖獣の一人がグリウス城の中に確実にいて、それが傀儡役人を操つたり、シェバとの連絡中継をしたりしているのでしょうか。心当たりは？」

「あるわけない」

エリオンは至極不機嫌そうに答えた。

「先ほども言いましたが、エリオン様に付き従つものがほとんどでした。新参のメデスも皇太子、つまりは本国におられるエリオン様の兄君に仕えていた者。皇太子ゲリュオン様もエリオン様同様、シエバ皇帝に対しては同じお考えと思っております」

ウェルはフェンダーの答えに頷きつつ、扉を開けた。

「それでは、もう城へは戻れません。敵が分からねば手の打ちようもありませんからね。とにかく外の敵を何とかして、地下通路から神殿へ逃れましょう」

「神殿？」

エリオンとフェンダー、シャオンが異口同音に言った。

「そうです。ご存じないかもしませんが、神殿には聖なる結界が張られています。闇の力は簡単には進入できません。私もシェバの侵攻から逃れて三年もの間神殿におりました」

闇の力？

シャオンの心臓が大きくひとつ打ち鳴らされた。

心の中でその言葉を反芻する。

自分がその力に属することを、シャオンはウェルから聞かされたばかりだ。神殿の結界から弾き出される姿を想像して、シャオンは背筋が寒くなつた。

だがとにかく今は外の敵だ。

うかうかして旅亭トラオの中にまで襲い掛かられでは、大勢の宿泊客や従業員達に迷惑がかかる。

「いくぞ」

シャオンはウェルが開けた扉から、一番に身を翻した。

物置部屋から直ぐ隣の、いつも密会する部屋を抜け、さらに小さな円卓のある部屋に出た。

「その扉の向こうが裏口です」

トレーネが入口を指差す。

シャオンが裏口の取つ手に手をかけた。

「いいか、行くぞ」

「待つて下さい。トレーネ、エリオン殿を奥へお願ひします。それから扉には鍵を。どんな物音を聞いても決して開けてはなりませんよ。そう、フェンダー殿が扉を叩いて合図して依頼するまでは、決して開けてはなりません」

ウェルがフェンダーに目配せしながらトレーネに低い声で告げた。

途端にエリオンがウホルの肩に掴みかかってくる。

「私を除け者にするつもりか！」

だがエリオンを制したのはウェルではなくフェンダーだった。

「エリオン様、あなた様がやられては、もともこもありません。こ  
こはウェル殿のおっしゃる通りだ」

エリオンは言葉にぐつと詰まった様子だったが、トレーネが腕を取り、奥を指示したので、素直に従った。  
エリオンとトレーネが下がったのを見て、ウェルとシャオンは視線を交わした。

「久しぶりに血が騒ぐぜ」

「夜も更けていますから、ほどほどに」

シャオンが嬉々として唇を持ち上げると、ウェルもいつもの微笑でそれに返す。それを見てフェンダーが呆れ返ったように溜息をついた。

「あなた達は本当に変わっている」

「行くぜ、おっさん。生きてたら、剣の手解き頼むぜ。まあ、いらねえと思うがよ」

シャオンとウェル、フェンダーと二人の騎士が、滑り出すようにトラオの裏口から出た。

それを見てトレーネが祈るように手を組むと、ウホルに言われた通りに扉に鍵をかけた。

「さあ、エリオン様、奥に参りましょ」

「どんだけいるんだ?」

細く欠けた月の弱々しい光の中、紅く揺らぐ光が点々と見えた。闇に溶けた姿ははつきりとは見えない。ただ、紅い光だけがゆつくりとトラオの入口に立つ五人に向かってくるのだ。

「こいつら一つ目か?」

「いいえ、よく見ていて下さい」

ウェルがそう言って剣の柄を握りなおした。

紅い光は、ざつと数えて十個ある。だが光は一つ増えたり、三つ増えたりと定まらない。

足音はない。いや、シャオンは聞いたのだから、人の耳には決して届かない。

夜の闇の静寂に溶け込んでしまったように、時おり吹く弱々しい風が耳元を撫ぜていく音しか聞こえない。

紅い光が浮遊するようにゆっくりとほんの手前まで近寄ってきた。五人が一斉に剣を抜き放つ。

先頭にシャオンが立ち、後ろに四人が並んだ。

トラオの裏口に灯された灯で、敵の姿が浮かび上がる。

それは豹の様にしなやかな体を持つ四足の獣だった。

黒い艶やかな皮膚には体毛はない。顔の中央にある紅い瞳は、顔の大きさの割には不釣合いに大きく見え、中央には縦に真っ直ぐ切れた黒い虹彩がある。それだけでも異常なのに、顔を横に向けるとまた同じ瞳が、そしてもう一方に顔を向けるとそこにも瞳があるのだ。つまりは顔の正面と横にそれぞれ一つずつ目がある、三つ目なのだ。口からは四本の牙が覗く。それも動物の大歯の三倍はある長さで、乳白色に緩く弧を描き、先端は針のように鋭く尖っていた。足は長く、跳躍に長けていることがつかがえる。

「なんだ、こいつら」

「三つ目ですね。気をつけましょう。視野はほぼ三百六十度、周囲すべてが見えているのですよ」

「神官殿、影がないですぞ」

確かにフェンダーの言つ通り、化け物には影がなかつた。ウェル達には薄い月明かりの影が出来てゐるといふのに。

さつそく一匹が躍りかかってきた。まるで蝶が飛び立つように、何の前触れもなく飛び立つ。

同時に、五人はちりぢりに散つた。

まず、シャオンが躍りかかつてきた化け物の頭に剣を振り下ろした。剣は真つ直ぐに化け物の頭に滑り込んで真つ二つにした。はずだつた。

剣は何の手ごたえもなく、化け物の体をすり抜けた。

「げっ」

シャオンは訳の分からぬ悲鳴をあげた。

化け物の牙は、咄嗟に避けたもののシャオンの右腕をかすめる。

「つっ、斬れねえぞ！ 体はまがいもんだが、牙だけは本物かよ」

右腕からは一筋の赤いものが流れた。

直ぐに体勢を立て直したものの、向かつてくる獣の牙を受けるだけで精一杯になる。斬ることもできず、急所もはつきりしない。

一方、ウェルも間髪おかずに飛び掛つてくる化け物の牙を剣で受けっていた。

フェンダーと二人の騎士達にも、均等に二匹ずつだ。

だが斬ろうが突こうが、黒い獣は叫び声一つあげずに襲い掛かってくる。

剣と牙が火花を散らす中、ウェルが一瞬の隙に二匹の獣に剣を銜えられた。

凄まじい力で抑え込まれる。

ウェルは剣を銜えさせたまま、闇夜に吹く風の聖靈に祈りを捧げていた。

一匹の獣がウェルの剣を噛み砕く。

刹那。

突風が吹きつけ、一匹の獣を吹き飛ばした。ウェルは胸元に手を当て、瞳を閉じている。黄金の髪は風にあおられてなびき、まるで金色の光を背にウェルが立つたような錯覚に陥る。

その時ウェルの体から閃光がひらめき、光が闇をなぎ払った。シャオンもフレンダーも、そして騎士たちも、一瞬視力を失つて腕で目を覆つた。

「いました。シャオン、右の角です」

ウェルの声が、シャオンの耳に届く。

目を開けると、黒い獣は紅く揺らぐ瞳を閉じて、身を低くしていた。

「右？」

シャオンはまだ光が残像となつてちらつく瞳を擦ると、目を凝らしてウェルの言うほうを見た。

そこには木偶人形のように立ち尽くしたままの役人が立っていた。肩から赤い布を掛け、一目でシェバの家来であることが分かる姿で。ただ、瞳には赤い炎のような色がちらちらと揺らめいている。

シャオンは目の前で徐々に視力を取り戻しつつある黒い獣の牙を左手で掴むと一匹を引きずつてもう一方の獣に向かつて投げ倒した。そのまま剣を倒れた獣の口に突き立てる。

剣が役に立たなかつたはずの黒い獣は、いとも簡単に石畳の路地に縫いとめられた。

「ありや、口だけは本物か」

シャオンは素早く縫いとめた獣を飛び越えると、真っ直ぐに役人の元に駆け寄つた。

役人はシャオンが近付いてきても、身動き一つせずただ立つてゐるだけだった。

「すまねえな」

同時に、シャオンの拳は呆氣なく役人の腹に減り込んだ。役人は崩れるように倒れこむ。それを間一髪受け止めた。

「本当に、目にされてるだけか」

「わあっ！ なんだ？」

フェンダーの叫び声にシャオンが振り向くと、ちょうど黒い獣達がまるで風にさらわれた黒い霧のように、陽炎たつて消えていくところだった。

やがて、黒い獣は跡形もなく消え去った。

「消えたぜ」

役人を抱えたまま、呆然と立つシャオンの元へ、フェンダー達もやつてきた。

「傷は？」

「たいしたことねえよ。おっさんは？」

「なんともない」

騎士の一人が、傷を負った手で役人を抱えるシャオンに代わってくれた。もう一人は、懐から出した布を切り裂きシャオンの腕に巻く。

「悪いな、えっと

「私はリグです。彼が、ドールク」

リグと名乗った騎士は、シャオンの腕に手際よく布を巻いて止血した。ドールクのほうは抱えた役人の顔を悲痛な面持ちで見つめている。

「知ってる奴か？」

「ええ

「そいつに罪はないらしいぜ。ウエルが言ひには操られてんだと。なあ、ウエル……」

振り向いたシャオンは硬直したように言葉を切つて、トラオの裏口を見た。

そこに、裏口に背を預けて座り込み、膝の上に頭を乗せてぐつたりしているウエルの姿を見たからだ。

「ウェル」

シャオンは駆け出してウェルに縋りついた。フェンダーも、リグも。役人を抱えていたドールクは一足遅れて。

シャオンがウェルの肩を掴んで揺すると、金の髪がわずかばかり持ち上がった。

「大丈夫か？ ウェル」

「なんとか」

大きく息を吐き、ゆるゆると持ち上げた顔は疲労の色が濃く、青白くさえ見えた。

「ちょっと強引に光を呼んだもので……大丈夫」

ウェルは膝に手を当てながら、ゆっくりと体を起こした。

「このまま、神殿に向かわねばなりません。それに中で、エリオン殿が苛々してお待ちでしようから」

「でもお前」

「大丈夫ですよ」

シャオンの心配をよそに、ウェルはいつもの微笑をフェンダー達に向けた。

「ウェル殿、あれは妖獣なのですか？」

フェンダーは裏口の扉を開けるように中のトレー・ネを呼び出し、鍵を開けさせて、ウェルに中に入るよう促しながら聞いた。

ウェルも軽く礼をしながら答える。

「そうです。でもあれは幻。役人の目を使って放たれた幻影です。明らかに殺意がありましたがね」

「私と、エリオン殿を？」

「他に誰がいます？」

裏口を最後に入ったシャオンが閉めたところで、エリオンが奥から飛び出してきた。

ウェルが何か言いたげなエリオンより先に言つ。

「話は後です。このまま神殿に向かいましょ。神殿には風の聖靈に頼んで使いを出しておきます」

「こ」の役人はどうすんだよ」「

シャオンがドールクの抱えた役人を指差した。

「可哀相だが、外に出そつ。目が覚めて、また操られでもしたら厄介なことだ」

フェンダーの言葉に、ドールクが再び裏口から外に出た。

騎士ドールクが戻ってきてから、七人は再び地下通路のある物置部屋へと向かった。そこから繋がっているグリウスの神殿に向かうためである。無論シャオンとウェルは荷物をまとめて背負った。ウェルは剣が折れてしまったので、苦笑いしながら鞘だけを持った。地下通路を隠していた敷物が除去され、再び暗い通路があらわになる。

ウェル、フェンダー、リグ、ドールクが通路に降り、エリオンがトレーネを促した。

「あの、私は行けません」

「何を言つのだ。このままここにいては危険だ」

「でもエリオン様。今も宿泊なさつているお客様がいるのです。それにこの通路を最後に隠す者がります。私が、元通り敷物を敷いておきますから、皆様は安心して神殿にお向かい下さい」

トレーネは潤んだ瞳でエリオンを見ていた。

「だが

「エリオン様。御武運をお祈りいたしております」

エリオンは今にも泣き出しそうに手を組んで祈るようなトレーネを前に、何事か言いかけるように口を開いたが、言葉が見つからないのか何も言わなかつた。

「俺が残る」

シャオンがトレーネの後ろから言った。

「なに?」

「外に寝かせた役人も気になるし、少し様子を見てから神殿に行くよ。それならいいだる。トレーネも連れて行くからよ」

「お前なんか信用できるか」

「なんだと

「やめてください」

トレーネは言い争うエリオンとシャオンの間に入って、一人を止めた。もう涙だけはとめることができないらしく、大きな瞳からは涙が溢れていた。

「シャオン」

地下通路からウェルが顔を出した。

「明日、必ず神殿に来てくれますね」

「もちろん」

シャオンが親指を立てて腕を出すと、ウェルは目を細めて頷き、また地下通路を降りていった。

シャオンはウェルの微笑で少し心が温まったような気がした。ウェルは自分を待っていてくれる。その言葉が、シャオンの心の奥深い所に鼓動と共に根付いた。

神殿には入ることが出来ないかもしれない。その危惧はもちろんあつた。トレーネの護衛を申し出たのも、そのことがあつたからだとも思う。

エリオンが舌打ちをしながら通路を降りていくのを見届けて、トレーネは扉を閉め、元通り敷物を敷いた。

暫く敷物を見下ろしていたトレーネが、手で目元を擦つて涙を拭う姿がシャオンの目にとまつた。

「心配か？」

トレーネは正直に頷いた。

「大丈夫だ、ウェルがついてる。ついで言うと、あんたには俺がいるから大丈夫だ」

自信満々なシャオンの言葉に、トレーネは涙に濡れた顔で微笑みを返した。

一夜が何事もなく明けた。

外に寝かせておいた傀儡役人は、翌朝いつのまにか姿を消していった。旅亭トラオの裏口付近にはウェルの折れた剣があつたきりで、他に何の痕跡もなかつた。

昨夜の出来事が、まるで嘘のように、何も。夜が更けていたこともあり、トラオの裏口付近に民家がなかつたこともあって、異変に気づいた者も誰一人いない様子だった。いや、もっと探索すれば、あのウェルの放つた鮮烈な光に気付いた者はいるかもしねない。

とにかく、トラオにはいつもどおりの朝がやつてきた。

裏口直ぐの、円卓のある部屋で座つたまま剣を抱えて眠っていたシャオンは、トレーネが扉を開く音で目覚めた。  
すぐさま剣の柄に手をあて、音のした方を向く。

「あんたか」

シャオンの鋭い右目を見て、一瞬息を呑んだように引いたトレーネだつたが、すぐに笑顔になつて言った。

「おはようございます。眠れなかつたのではありませんか？」

「いや、あんたこそ、目が赤いが大丈夫か」

トレーネは微笑み返しただけで何も言わなかつた。眠れたはずがない。

暗殺だの妖獣だの地下通路だの、とうていこの年の少女が経験しそうもないことを、この数日の間にすべて見たのだ。平静でいろというほうが無理に決まっている。シャオンはそんな彼女に何か劳わりの言葉をかけたかったのだが、気の利いた言葉は何一つ思い浮かばなかつた。

「お食事です。私はこれからお客様を送り出して、後片付けをします。そのあと古くから仕えてくれている者に任せて、神殿にご一緒

しようと思つのですけど

「ああ、それでいい。悪いな」

トレー・ネが円卓に置いてくれた食事はいい匂いがした。

焼きたてのパンが食欲をそそる。

「では、私は行きます」

トレー・ネは部屋を出て行つた。

シャオンは暫くトレー・ネが出て行つた扉を呆けたように見ていたが、とりあえずは空腹を満たすことにした。

ウェルは、どうしただろうか。

まだ暖かい食事に手をつけながら、ふとシャオンは思った。

ウェルと知り合つて以来、ほぼ毎日を共に過ごしてきた。シャオン自身にとつても、気楽な毎日であつた。ウェルとの言い合いでさえ、文句もいいはしたが楽しいものだった。

それが、である。

グリュックに来てからというもの、息つく暇もなく変化が訪れる。

エリオンが現れ、シェバがグリュックに向かつてきている。

考えないようにして、自分の出生を目の前に突きつけられた。

そしてウェルは亡きグリュック王の子供だった。

自然と深い溜息がでた。

グリュック王の息子と、シェバ皇帝の息子。その二人が共に旅をしていたとは。

仇同士が。

シャオンはその考えを振り払つようにパンにかじりついた。今は考えまい。ウェルが自分をどう思つているかということは。

シャオンは短時間で食事を済ませると、裏口の鍵を確認して、トレーネの元に向かった。

大半の客は食事を済ませ、グリュック治世十五年の祭りで賑わうグリウスの街へと向かつていった。トラオで働く者達は次の宿泊客

のために、これから準備に追われる。

トレーネも立ち止まることなく働いていた。

シャオンは食堂の一角の壁にもたれて腕を組み、トレーネを田で追っていた。

額に汗を浮かべ、なんと楽しそうに動くことか。鼻歌くらい歌つていそうに見える。時折シャオンの方を見ては微笑み返す顔があどけなく、トラオを一人で守っているとはすぐには信じがたい。

「あの、なにか」

「いや、べつに」「

あまりにじつと見ていたせいか、トレーネが困ったよつに首を傾げていた。

何か手伝つと言つた方がいいのか、シャオンのほつが困つてしまふ。

「シャオン様つて、面白いですね」

「お、おもしろい？」

トレーネは顔を綻ばせた。

シャオンはその笑顔に負けないよつに咳払いをして言つ。

「その、シャオン様つていうのはやめてくれ。腹ん中がひっくり返りそうだ」

「でも」

シャオンはトレーネをじつと睨んだ。

「ダメ、様は」

トレーネが机を拭いていた手を止めて、シャオンのほつに近付いてきた。

思わず身構えてしまう。

「本当に、エリオン様とは『兄弟なんですか？』

「嫌だけど、そうみたいだ」

トレーネは青い瞳で、シャオンを覗き込むよつにして見た。反射的に左の髪を撫で付け、一步後ずさりたかったが、壁にもたれている手前それは叶わなかつた。

「どことなく似ていいんですね。初めて見た時、どこかで会つた  
ような気がしてじつと見てしまったんです」

そう言えばトラオへ来た時、不審者を見るように眺められたこと  
を思い出した。

「顔の傷は妖獣に？ 痛みます？」

「そう、妖獣。もう昔の傷だし、痛くはないけど。慣れたつて言う  
ほうがいいかも」

トレー・ネはまた机を一つ一つ丁寧に拭き始めた。  
三つほど拭いた所で、また手を止め、思いつめたようにシャオン  
を見る。

「エリオン様は、大丈夫でしょうか」

「大丈夫だよ。ウェルが一緒なんだ」

「ウェル様が父を尋ねて下さらなかつたら、こんなことにはならなかつた。いいえ、私が巻き込んでしまったのですものね。私、なんて謝つていいか」

机の上で湿つた布を握り締め、俯いたままのトレー・ネはひどく小さく見えた。さつきまで楽しそうに手際よく宿の仕事をこなしていたのはまるで別人のように、急に幼くなつてみえた。

「でも、ウェルがいなかつたら、もうエリオンは死んでたぞ」「そんな！」

トレー・ネが肩を震わせて、顔を上げた。

「昨日も言つたけど、街には妖獣の目になつてる役人がいる。きっと城にもいてエリオンを見張つてたはずだ。昨日ここに来たのが証拠さ。ウェルがいなかつたら、もう昨日エリオンの命はなかつたはずだ」

シャオンにはトレー・ネが息を呑むのが分かつた。

ぐつと何かを堪えるように唇を噛んでいるのが分かる。さすがのシャオンにも、トレー・ネがエリオンをどう思つてているのか、分かつてしまふほどに真剣な瞳だつた。

誰もが、いろんな思いを抱えているんだな。

シャオンは漠然とそう思つた。

壁に預けていた体を起こして、トレーネの傍にいく。それからトレーネの握り締めていた布を掠め取ると、小さな肩に手を乗せた。  
「ここは俺がやるよ。早く他の仕事、やつちまいな。会いてえだろ、エリオンに。心配なんだろ？」「

「シャオン様」

驚いたように大きな目を見開いているトレーネに、シャオンは首を横に振った。

「様は禁止」

言いながらシャオンは実に乱雑に机を拭き始めた。本人は丁寧に拭いているつもりかもしぬなかつたが。  
けれどトレーネは笑わなかつた。

「ありがとうございます」

その声は、無理やり絞り出したように、少しかすれていた。  
「あ」

シャオンは急に声を上げた。

「ダメダメ、そんな腐った顔してちや、客が逃げるぞ」

破顔一笑したシャオンを見て、トレーネもつられて笑つた。

シャオンは少女の笑顔に、どこか安堵した自分がいることに気付いた。

こんな事は早く終わらせててしまいたい。

シェバを倒し、憂いをなくして。エリオンも、フェンダーも、もちろん、みな無傷で。

それで？

シャオンの机を拭く手は、はたと止まつた。

またウェルと旅をすることが出来るのだろうか。今まで通りとはいくまい。ウェルはグリュックの正当なる後継者だ。ウェルが何と言おうが、その事実に集つて来る輩は必ずいるだろう。

「どうかしました？」

「いや。ほら、早く片付けちまおう」

トレーネは、ハイと返事をして食堂を後にした。  
心が冷えていく。足の指先から、ミシミシと体が心地よく凍り付いていくようだった。

少し時はさかのぼつて。

ウヘル達はトラオから薄暗い道をひたすら歩いていた。

地下通路は相変わらず湿っぽくかび臭い。ずっとそこにしてると、肺の隅々まで菌糸に冒され、呼吸困難に陥ってしまうのではないかという錯覚すら覚える。

トラオから神殿までは、グリウスのぼば端から端までを歩くのと大差ない。

旅亭トラオはグリウスの東・サナオ側の街道付近にあり、神殿は正反対の西・アキロ側の街道付近にある。町の中を歩いてもゆうに半日弱はかかるのである。ただ地下通路は直線で結ばれているので、それよりははるかに早く着く。とはいえ、ただ薄暗く石で囲まれた何の変化もない通路を歩くのは、苦痛以外の何物でもない。

特に苦労知らずのエリオンなどは、不平不満を示す言葉はすべて口に出したといつても過言ではない。そんなエリオンを巧くフェンダーがなだめながら、やつと神殿に辿り着いたのは、まだ白々とわずかに明るくなり始めた夜明け前だった。

神殿は森厳な雰囲気の中にあった。

白亜の石を使用した造りの建物は莊厳にそびえたち、グリウス城とはまた違う壯麗さがある。もちろん周囲の民家と変わらず、二階以上には石は積み上げられていない。が、敷地の広さは民家の比ではなく、グリウス城ほどではなくとも、かなりの広さがある。

民が参拝する本殿から、神官達が生活する社務所に宿所、神殿の管轄である学問所なども有し、周囲は大小さまざまな石を積み上げられた石垣で囲まれている。

地下通路の出口はそんな神殿の中央庭園の小さな森の中についた。

「なんだ、ここは」

エリオンは石像の足元にあつた肩がよじよじ通る狭い出口を何と

か抜け出して開口一発そう言つた。

そこはまさに庭園という名の相応しい場所であった。

森といつても整然と花が植えられ、木々も雑然と生育しているわけではない。

石像は、賢者の祖といわれる穏やかな微笑を湛えた聖人のものだ。唯一違つのは空氣だ。

凜と張り詰めた空氣は清淨で、呼吸するたびに豊かな緑の香りが肺の隅々にまでいきわたり、思わず背筋を伸ばし深呼吸してしまう。植えられた花は、まるで歌でも歌いだしそうなほど、生き生きと輝いて見えた。

「なんと澄んだ空氣だ」

フェンダーも辺りを見回す。

「聖なる結界の中です。濁んだものが一切ない、聖靈達の世界です。でも、この結界はまだ弱い。神殿の最高峰である賢者塔などは、背筋が凍りつくほど素晴らしい結界ですよ。さあ、とにかく出来ましょう」

ウェルは一行を促した。

「神官長のゲフュール様が、きっとお待ちです」

「ゲフュール殿が？」

フェンダーが驚いたように聞き返した。

「そうです、ああ、来られました」

小さな森を抜けたところで、その人物の姿が目に入った。

小柄な老人だった。

身にまとるのはゆつたりとした薄い紫水晶色の衣。金の髪はすでに白く、ところどころに金の名残を残すだけだ。顔にはしわが刻まれてはいるが、瞳は快活とした輝きを失つてはいない。

「おお、何と言つこと。ウェルトス様。お久しうついでやります」

老人は恭しく膝を折つた。

「おやめ下さい。そんな事をしていただく身分ではありません」

ウェルは跪く老人の手をとつた。

「よくぞ、お戻りになられました。『立派になられて』

「いいえ、それは私にはもつたいないお言葉です」

ウェルはエリオン達には決して見せない寂寥とした表情でそう言った。

ゲフュールは、ウェルの後ろに立つ人物に、軽く会釈した。

「これは、自治領主殿。私めはグリュック総神官長のゲフュールと申します。まあ、話は中で。こちらでござります」

一行は神殿の社務所の隣にある小さな館へと案内された。小さいといつても、普通の民家の倍ほどはある。下には広間や客をもてなす為だけの部屋、食堂などもあり、上には客間だけでも五部屋はある。どうやらこの屋敷はすべてゲフュール一人のものらしい。

エリオンとフェンダー、リグとドールクがそれぞれ上階の部屋に通された。

ウェルだけはゲフュールと共に下に残る。

ゲフュールはエリオン達が部屋に入ったのを見届けてから、ウェルを自室へと案内した。

客人をもてなす為の椅子が置かれたきりの質素な空間だったが、そこはどじょうやらゲフュールの私室であるらしい。

部屋に通されるなり、ウェルは神殿を統括するゲフュールに改めて頭を下げた。

「おやめくだされ。私は当たり前のことをしたまで。いやいやこうして再びお会い出来ましただけで、長生きした甲斐もあるうというもの」

ウェルは、溢れそうになる涙を堪えるかのようにひつそりと唇を噛んでいた。いつも口元に浮かべている微笑はなく、どこか不安げで頼りなさそうなウェルがいる。きっとシャオンあたりが見れば、どこか体を悪くしたのではないかと慌てるかもしれない。それほど消え入りそうに線が細く見える。

ゲフュールは何も言わずにウェルを促して、さらに奥の部屋へと通した。

ゲフュールの部屋は、本人の気質そのままに実務的で質素だった。不必要的な絵画や飾り、花などの装飾は一切なく、一方の壁は一面に書物が天井の高さ近くまで並んでいる。まだまだ紙の貴重な世では、この書物の量はグリウス王城の書物庫の比ではなく、また高名な画家の一枚などよりも価値が高いはずだ。あとは体を休めるための長椅子と、奥の別室に寝台があるだけだ。

「ああ、何も変わつてはいません」

ゲフュールは呵呵と笑うと、ウェルに椅子を勧めて奥へと一旦入つていった。

ウェルは感慨深げに部屋を見渡した。

書物棚に近寄り、書物にそつと触れる。その口元には微かな笑みが戻っていた。

「どうじゃ、昔みたいにまたそこに座つて本を読みなさるか？」

ウェルは小さく笑つて、勧められるままに椅子に腰掛け、ゲフュールが入れてくれた暖かな飲み物に手をつけた。

「一度お休みになられるがいい。顔の色がすぐれぬでな」

「ありがとうございます」

「で？あのエリオン殿は一体何をしようとなさつておいでか」

ウェルは息を小さく吐くと、姿勢を正してゲフュールに向き直つた。

「偶然でした。いえ、グリウスに足を踏み入れた時、私の中にあつた真の願望がこうさせたのかもしれません」

ゲフュールはじつとウェルの言葉を待つていていたようだつた。ウェルの伏せ目がちな瞳を穏やかに見ながら。

「初めは偶然だつたのです。盗賊を追つうちにグリウスに入つて、でもシエバの役人を目にした時、私は壊れてしまつたのかもしれません。足は真つ直ぐにトレルオムの元に向いていました。一番に頭に浮かんだのです。予感、だつたのでしょうか。いえ、こうなることを望んだのかもしません。トレルオムに会えば、何か、分かる事があるのでないかと」

ウェルは親に叱られた子供のように、ゲフュールを縋るように見  
た。

「ゲフュールは温かな笑みを浮かべたまま、何も言わない。

「あれほどに神官長様に仇を討つことを考えるなと諭されておきな  
がら。私は禁を犯そうとしているのです」

「ゲフュールの大きく暖かな手が、ウェルの手に重ねられた。

「そんな風に考へてはなりません。ウェルトス様を逃がされた陛下  
が、その時に何とお考えになつたかは分かりません。しかし私なら、  
ウェルトス様だけでも生き延びて欲しいという一念だったと、思つ  
たゆえそう諭したまでのことです」

「ゲフュール様……」

ウェルは堪えるように瞳を強く閉じた。

溢れかえる思いを、まるでたつた一人で堪えるように、強く、強  
く閉じた。

「私は弱い人間です。いつも共にいる仲間などと比べれば、私には  
芯の強さが欠けているのです」

囁くように呟いて、ウェルは頃垂れた。けれどそれは、大きく深  
呼吸するほどの、ほんのわずかな間だった。

「シエバは妖獸だったのです、ゲフュール様

「今、何と？」

ゲフュールがウェルに重ねた手を握り返してきた。

ウェルはその手に視線を落とし、次にゲフュールを見た。先程ま  
での頼りなさそうなウェルではなく、厳しさを備えた青年の眼差し  
で。

「私が力を備えていたのも、神の啓示と考へることにしました」

「ウェルはそつとゲフュールの手を退けると、襟元に手を忍ばせた。  
そこから細い革紐を引っ張り出す。

紐の先端には赤ん坊の握り拳大の麻袋がついていた。

「それは」

ゲフュールは日の光を見上げたように、少し眩しげにその袋を見

た。

「ゲフュール様には袋を見ただけでお分かりでしょつか

「無論じや。それはもしや?」

ウェルは頷いて、袋を開けた。

中から、淡い淡い澄んだ紫翠の輝きを持つ石が出てきた。  
艶やかに橈円の形をした石である。

「聖者ヴァルテミオス卿の力が込められているそうです。賢者塔で頂きました。これのおかげで私の聖なる力は増し、聖靈達の助け也非常に借りやすくなっています」

ゲフュールは瞠若したまま、まるで腫れ物にでも触るようにそつと手を差し伸べたが、首を横に振りながら手を戻した。

「これは何と。賢者の祖といわれる聖者ヴァルテミオスの力が?  
素晴らしい」

神殿を統括する賢者塔。ウェルはゲフュールに匿われた後、そこで育つた。そこは聖靈力を持つ者達の最高峰、最高の力を研鑽し学ぶ場所である。

「お願いがござります」

「なんなりと」

ウェルは紫翠の石を袋に戻し、姿勢を正した。

「私はエリオン殿に従つて、シエバを倒そうと思います。妖獸だと分かつて、なあのことです。確かに仇という認識もあります。ですが、それ以上にグリウスの現状には胸が塞がりました。そのため、エリオン殿を神殿に匿いたいと思っています」

「大体の察しはついておりました。どうぞウェルトス様のお気の済むままに。私は協力を惜しみませぬ。しかし」

ゲフュールは目を細めた。

「ウェルトス様は、強よつなられた。いつも半ベソでおられたのが、嘘のようじやの」

「ゲフュール様、それは」

ゲフュールはホホと笑った。

「分かつております。無理をなさいますな。あまり無理をなさると、笑顔が顔に張り付いてしまう。のう、わしに気を使つことなど、ありはしませぬぞ」

その言葉にウェルは深く頭を下げた。ともすれば、涙が溢れそうになるのを、ウェルは必死で堪えていた。ここで、立ち止まつてはいけない。今は、成すべき事を見つけたのだ、その思いだけが、ウェルを支えていた。

大きく息を吸い込む。そうすると、あたりに住まう聖靈達が体の中に力を与えてくれる。ウェルは居住まいを正した。

「ここはまだ結界の力が弱いのです。完全にエリオン殿を妖獸の目から隠すために、この石を使って結界を強くしたいと思います。本殿の奥、聖石の間に入ることをお許し下さい」

「では案内しましよう」

ゲフュールは腰に手を当てる、よつと掛け声をかけながら立ち上がりつた。

「ただし、それが終わりましたなら、まず食事をとり、後に睡眠をおとりになること、お約束下さるな」

ゲフュールは少年のような人懐こい笑みを浮かべた。

「はい」

ウェルも、保護者に素直に従つよつて、短く返答した。

これから本殿の奥に向かつて、重要な布石を敷いておかねばならない。

シエバ暗殺までの間、妖獸の日から暫く隠れる場所を確保しておかなくてはならない。

本殿の奥には聖石の間というところがある。念が込められた石が安置され、神殿の石垣の中、四箇所にその石の欠片が埋め込まれている。それらを結ぶ神殿の内部がすべて結界の中に納まっているのだ。

二人はその部屋に向かつっていた。ウェルの持つ紫翠の石の力を分け与え、結界をさらに完全なものにするために。

ウェルがゲフュールと共に本殿に向かっている頃。エリオンとフェンダーの部屋にはリグとドールクもやってきて、四人で深刻な顔を突き合わせていた。

もちろん一番苦虫を噛み潰したような顔をしているのはエリオンである。

豪奢な密室に不平不満があつたわけではない。

エリオンは椅子に腰掛け足を組んだまま、フェンダーを睨みつけていた。

腕も組みなおし、苛々した様に指が絶え間なく動いている。エリオンの腹の虫はどうにも收まりそうになかった。

今回の事の中心人物は自分自身だと自負している。ところが、フェンダーも何かとエリオンを蚊帳の外に置こうとし、幼い頃から兄弟とともに蔑んできた妖獣の弟が行動をともにし、さらにはウェルが主導権を握り始めている。エリオンには面白くないことばかりだつた。

「ところでエリオン様」

「なんだ」

努めてぶっきらぼうに返す。

「どうやら今もグリウス城には妖獣がいるらしいですが、どうお思いになりますか？」

エリオンがフェンダーを睨みつけた。

「どうもこつも、信じられるか。この目で見たわけでもないのに。第一、誰が妖獣だというのだ。皆人間ではないか」

「確かにそうではありますが、昨夜あの役人は確かに操られていたようでした。ウェル殿とシャオン殿がいなければ、我々もとうに消されていたかもしぬませんぞ」

エリオンの険しい表情は一向に緩和しそうになかった。苛々と動く指も止まらずに動き続けている。

「化け物の父のすることだ。とうに私の考えにも気づいて刺客を送つたつもりだろうが、そつはいかん。グリュックの民のために、必ず仕留めてみせる」

エリオンの空を睨む表情からは決意の程が見て取れた。  
父シェバの非道とも言える侵攻を、黙つて見過さずわけにはいかないのだ。

グリュックだけではない。今度はさらに隣国アキロをまでも攻めようとしているのだ。

ここで食い止めなければ、妖獣が世界を制する恐るべき国が魔の手を広げることになる。

「だが、城が気になる。私が戻らねば、メデス辺りも捜索を出すであろうし、あの無能な大臣達もさすがに黙つてはいまい」

「私もそれが気になります。それにここにいては、いつシェバが到着したのかも、どの部屋に宿所を置くのかも判然といたしませんしなあ」

「あの」

そばに控えていたドールクが跪いて申し出た。

「私めが様子を見に参りましょつか。昨夜の役人のことも気になりますので」

エリオンがフェンダーに了解を取るように見た。

フェンダーも頷く。

エリオンも頷いた。

今はとにかく城の様子が気になつた。城内の情報が全くないので心もとない。それにエリオンには、王の間にあるという地下通路の出口とやらを確かめてみたいという衝動もあつた。ウェルがグリュックの王子であるという確証を得たわけではないからだ。

もしドールクが城の様子に異変を認めなければ、すぐにでも城に戻るつもりであつた。

この時、エリオンは全く理解していなかつた。

妖獣の真の恐ろしさと力を。

そして、東の戦線で妖獣と共に敵国に攻め入つていたフェンダー  
ですら、闇の力を悔つていた。

何故ウエルがエリオンを神殿の結界の中に連れて來たのかを、二  
人はこの後に思い知られることになる。

同じ頃、東の旅亭トラオでは、トレー・ネとシャオンが出立の準備を整えていた。

後片付けを半分ほど終わらせ、あとを古参の従業員に任せると、一晩留守にすると告げてトラオを後にした。もちろん、地下通路の出口である物置部屋にはしつかりと鍵をかけた。普段はトレー・ネ以外が使用することのない裏背戸もだ。

トラオには何の異変もなかつた。シャオンが気抜けするほどに。必ずエリオンを狙つて再び襲撃があると予想していたからだ。無論、エリオンの命を受けたドールクがグリウス城に侵入していることなど知る由もなかつた。

トラオを出て、二人は神殿までを徒步ではなく辻馬車を使って移動した。トレー・ネをつれて徒步で歩くよりは辻馬車を利用したほうがはるかに早く到着できる。

シャオンは一刻も早くウェルと合流したかった。  
ウェルと離れていることが不安で仕方がない。それが何故かを、シャオンは意識的に考えないようにしていた。

心のどこかで、自分が再び一人になることを恐れていることに、気づかぬ振りをしていたかつたのかもしれない。この一年間、シャオンは孤独を忘れていた。ウェルとともに、旅をし、共に食事をとり、共に寝つてきた。

けれど、今は違う。それが、シャオンを不安にした。

シェバを倒した後、ウェルがどういう立場に置かれるか、自分がどうなるのか、はつきりとはしてはいないが、ただ一つ確かなことがある。

シェバの血を引くシャオンが、今まで通りウェルと共にいることはできない。

ウェルとの別れが待っているかもしないことを、どこかで分か

つていた。

分かつてゐるから、あえて考へないよつとしている。

「あの……どうかしました?」

揺れる馬車の中で、向かいに座るトレーネが覗き込むよつとして尋ねた。

シャオンは放心したように、車輪が石畳を蹴る音や馬の蹄の音、外の喧騒を聞いていたことに初めて気付いて顔を上げた。

「とても怖い顔、なさっていますよ」

「そう?」

トレーネは寂しげに微笑んだ。

「何だか色々あつて、私も氣分が棘々しています。父のこと何も知らなくて、ただエリオン様のお役に立ちたくて、ウェル様のことをフェンダー様にお話して。今だつて何を言つているのか……分からぬ」

話しながら今にも泣き出しそうなトレーネに、シャオンは少し慌てた。こうじう時の女性の扱いには、正直慣れていないし、気の利いたことを言える性格でもない。

「同じだよ、俺も」

シャオンは素つ氣なく返したが、他に言いよつがなかつた。

それでもトレーネは、その一言が嬉しかつたらしく安堵したように息をついた。

それきり二人は何も話はしなかつたが、シャオンもトレーネの言葉で少し平常心を取り戻せたような気がしていた。

気が付くと、ウェルのことばかりを考えている。

シャオンは、氣を取り直して、自らに言い聞かせた。

不確実な未来を不安がらずに、とにかく今は現実にしたい未来だけを見ようと。

昼も随分過ぎた頃、辻馬車は神殿の少し手前で停まった。

神殿の正門の前は、参拝する者達で塞がっていたからだ。世界を創造したという神に特別な名はない。

名を付けるということは文字でそのものを縛ることであり、世界そのものである神を人間の言葉で縛ることは出来ないというのがその根本にある。

人々は命の根本である神に感謝するという行為を忘れることはない。

治世十五年の祭りが開かれているグリウスでは、特別な理由がなくとも、誰もが神殿を訪れる。

だから、神殿の前から、本殿に続く通路は人が多い。

左右から伸びる石垣の途切れているところが正門。それから並木道が続き、白い砂利が敷き詰められた道を行くと白亜の本殿が建っている。

シャオンとトレーネも、当然、神殿に参拝する者の一人という風に見え、誰も気にとめる者はいなかつた。

辻馬車を降りてから神殿の正門へと足を運ぶ。

シャオンは門から奥に見える神殿を見た瞬間、ウヘルの言葉が脳裏に甦つて足が止まつた。

闇の力は神殿の結界には入れない。

と、トレーネも合わせるようにして、足を止めた。

立ち止まるシャオンを不審に思つて、同時に立ち止まつたかにみえた。

だがトレーネは何も言わずにシャオンの服の裾を掴んだ。

シャオンも服の裾を引かれてトレーネの顔を振り返つて見た。

トレーネはじつと何かを見ている。

シャオンはその視線の先にあるものを追つた。

多くの参拝客に紛れて、彼は立つていた。

ただ、立つていたのだ。

どこか空ろな目で、恍惚としたような表情で、首を少し右に傾げて。

引き締まつた体についた筋肉は盛り上がり、日々鍛えた体は一般人の中に混じつていると巨躯にさえ見える。だが、その鍛えられたはずの腕はだらりと下がられ、何の緊張もない。

「ドールク？」

シャオンは昨夜知つたばかりの名を半信半疑で言った。

呼ばれたほうは、軋みをたてそうな位のぎこちない動きで、顔をシャオンの方に向けた。

シャオンは一步後退つた。

ドールクは何も見ていなかつた。生氣のない瞳は、何も映していないように、混濁していた。

一見して、何がおかしい訳でもない。気を付けて見なれば、ほんやりしているとしかうつりはしない。

「あの、ドールク様？ エリオン様はご一緒ではないのですか？」トレーネはそうドールクに訊ねた。

瞬間、ドールクの虚ろな瞳に赤い光が閃いた。同時に腰から剣を抜く。

シャオンは咄嗟にトレーネを背に庇つた。

周囲からは悲鳴が上がり、三人の周囲には一気に人がいなくなつた。代わりに、どこからともなく、赤い布を肩から掛けた役人が一人、また一人と現れた。

そのいずれも、赤い色がちらつく目をしている。

シャオンはトレーネを背に庇つたまま、右目を素早く周囲に走らせた。

形勢は断然不利だ。背後からも役人が来ている。ざつと見ても十人以上はいそうだつた。

ドールクのほうは相変わらず抜いた剣先を正確にシャオンに向いている。生氣のない瞳に不釣合いな殺気が迸つていた。

「シャオン様、これは……」

「妖獸だ、トレーネ。俺が突破口を開くから一気に神殿の中へ駆け込め。いいな、真っ直ぐ中に走るんだ。振り向いたりすんな。ウエ

ルを呼んできてくれ、頼む

トーネは大きく頷いた。

シャオンも剣を抜いた。

トーネは神殿の中に入れば守れるだらう。ウェルはそう言つていた。

つまりこの木偶人形達は神殿の中には入れないのに違ひない。だから正門の前で立ち尽くしていたのだ。

だが、何故。ドルクがここにいるのだろう。神殿の中にはずだ。

そして、何故、木偶人形達がトラオではなく神殿にエリオンを追つてきているのか。

シャオンの頭の中で、様々な事が交錯した。

が、考える暇もなく、ドルクの剣が振り下ろされてきた。

十分に鍛えた筋肉を余すところなく使つて振り下ろされた剣はかなり重かつた。

シャオンがその一太刀を受けて払つただけで、手首に衝撃が来た。昨夜に妖獣につけられた右腕の傷が痺れる。両手で剣を握りなおして、今度は下から、再び振り下ろされてきたドルクの剣を払つた。ドルクがよろめく。

動きは鈍い。

「行け、トーネ！」

シャオンが叫ぶと同時に、トーネも駆け出した。

どうやら操られている者達は妖獣という中継を介して動いているので、一瞬反応が遅れるらしかった。

役人達もゆつくりと近付いてくる。

周囲から再び悲鳴が上がつた。

ドルクが剣を突いてくる。

払つても払つても、突きは正確にシャオンの心臓を狙つていた。反応が一瞬遅れていなければ、シャオンは必ず傷を負つていた。

それほど、鋭くかつ素早い突きである。

騒ぎを聞きつけて、神殿の中からも神面と思しき者達が出てきた。  
役人達も剣を抜く。  
シャオンはあっという間に周囲を囲まれていた。

ウェルは、といえばゲフュールの言い付け通りに別室で休息を取つていた。

グリュックに来てからというもの、ろくに睡眠をとつていなかつた。

着いた日は、深夜の訪問者の物音に氣付いたシャオンに起こされた。翌日はフエンダーと会つて暗殺を依頼されて眠れず、そのまま翌日はグリウスを歩き回つた。拳句、ほとんど眠らずに黒い化け物相手に光の聖靈を呼び、疲労したまま地下通路を神殿まで歩いたのだ。そして今また、結界を強めるために、本殿の聖石の間で力を使つたばかりだ。

食事もそこそこに、ゲフュールに言われるまでもなく、ウェルは深い眠りについていた。  
体は泥のように疲れきつっていた。

トレーネは真っ直ぐに本殿へと走つて行つた。  
振り向かずに。

急がなければ、シャオンが怪我をしてしまう。怪我ならまだしも取り返しのつかないことになつては大変だ。  
事情を知らない人々を搔き分け押しどけて、本殿に入る。  
広い場所だつた。

高い天井には緻密なガラス細工の飾りが下がり、四方は淡い紫のガラス戸で覆われて外からの光を和らげている。中央に豪奢な花の刺繡入りの織物が人々を導き、その先に祭壇がある。

閑寂としていた。

誰も言葉を発せず、静かな呼吸音と、控えめな足音だけが聞こえる肅然とした場。

その中を走つて入つてきたトレーネを人々は非難の目で見た。

何処に行けば、ウェルがいるのか、エリオンに会えるのか、トレーネはすっかり気が動転していた。

叫ぶことしかできなかつた。

「エリオン様！」

何度か叫んだ後、後ろから肩を叩かれてトレーネは振り返つた。見慣れたフェンダーの厳つい顔がある。怒ったように太い眉が寄せられていた。

トレーネは太い腕にしがみついた。フェンダーの後ろではエリオンが慄然としていた。

「フェンダー様！ 大変なのです。外に！ 外にドールク様が。シヤオン様が！」

「落ち着きなさい、トレーネ。何の騒ぎだ」

「早く、早く助けて。シャオン様が、殺されてしまう！」

涙があふれ出て、状況を説明できるような状態ではなかつた。ただ、シャオンの身の危険を伝えるトレーネに、フェンダーは後方にいたゲフュールに少女を託した。

エリオン達はゲフュールの案内で神殿を見て回つていたところであつた。

ちょうど同時に、正門へ様子を見に行つていた神官の一人が、外で起こつてゐる事件について、神殿を統括するゲフュールへ報告に來た。

「申し上げます。ただいま門の外で斬り合いが。一人は黒髪の男で顔を半分隠しております。もう一人はかなりの剣の使い手で、後はシェバ皇国の役人のようでござります」

エリオンとフェンダー、そして共にいたリグは顔を見合わせた。黒髪で顔を半分隠してゐるのはシャオンしかいない。

エリオンは改めてゲフュールにトレーネを頼むと、本殿を出でいつた。

その姿を見送りながら、溢れる涙を手で拭つてゐたトレーネはハ

ツとしたように隣にいる老人を振り返った。

「ウェル様は、どちらですか？ ウェル様を、お連れしなければ、ようやく応援が向かつて、トレーネは冷静さを少し取り戻していた。

ゲフュールは宥めるようにトレーネの癖のある髪をそつと撫ぜた。「呼びに参らう。彼は私が休むように言いつけて、きっと今ぐつすり眠つておるはずじゃから」

剣の打ち合いは互角だった。

いや、ドールクのほうが断然上ではある。多少動きが鈍くなれば、シャオンはとうに斬られていたかもしれない。周囲にいる十人の役人達も、鈍いながら時おり剣を振り下ろしてくるので油斷はならなかつた。

十人以上を相手にするシャオンは少しづつ押されていく。じりじりと後ろへ下がり、正門の辺りまで下がつていった。背中が神殿を向いていたので、後ろを危惧しなくていいことだけは幸いであつた。結界の存在が、くしくも背後の守りとなつてくれた。

剣を構えたまま、どれ程睨み合つた頃だつたか。

神殿の本殿のほうから、数人の足音が聞こえてきた。

もちろんシャオンの耳は正確にその人数を把握している。三人だ。

「シャオン殿！」

フェンダーの声が聞こえる。三人が、シャオンの直ぐ後ろで立ち止まり、息を呑んだのが分かつた。

フェンダーとエリオン、リグにも、変わり果てた姿のドールクが目に入ったのだろう。

今、ドールクの瞳には、赤い炎が揺らめいていた。まさしく昨夜見た、黒い化け物の瞳に揺らいでいた光と同じだ。エリオン以外は、それが何を意味するのか直ぐに悟つたはずだ。

「ドールク、何故？」

「何だ、おっさん！ ドールクを何で外に出した！」

剣を構えたまま振り向きもせずに叫ぶシャオンにエリオンが何事か言いかけたが、どうやらそれをフェンダーは手で制したようだつた。

「彼は城へ探索に行つてもらつていた、それが、何故」

「馬鹿野郎！ ウェルが言つてたるうがよ、城にはもう妖獣がいるんだつてよおつ！」

エリオンもフェンダーも返す言葉がない様子だつた。ただ、成す術もなく、変わり果てたドールクを見るほかに、出来ることは何もなかつた。

「ウェルはどうした？」

シャオンは聞いたが返事はなかつた。代わりに剣を抜き去る音が二つ聞こえる。

「エリオン様はお下がり下さい」

シャオンはその一言に、ぎょっとして振り向こうとしたが、すでに遅かつた。

ドールクは「エリオン」という言葉に反応していた。すでにシャオンを見てはいない。シャオンの後ろにいるエリオンに視線が固定されていた。

ドールクはゆっくりと足を進めてきた。

それにあわせるように、後ろにずらりと並んでいた役人達も向かつてくる。

エリオンに向かつて。

「来るな！」

シャオンは咄嗟にドールクへ剣を振り下ろしていた。

脳裏には、昨夜、傷を負つた役人を受け、痛々しい表情で見下ろしていく彼が甦る。

斬りたくなかった。

でも、そうするしかエリオンを守る術はない。今はエリオンを失

うわけにはいかないからだ。ショバを消した後、この国を守ること  
が出来るのはエリオンをおいて他にはいないのだから。

いや、ウェルがいる。代わりに、ウェルが王になれば  
シャオンの振り下ろした剣は迷いの分だけ弱く、薙ぎ払われた。  
もちろんリグには、仲間であるドールクを斬り捨てる事は出来なかつたのだろう。ドールクの歩調に合わせてじりじりと下がつてい  
く。フェンダーも。

ドールクの歩みは次第に速くなつていった。

「エ、リ……オ……」

ドールクの口から、苦しげに言葉が出た。声は震え、振り絞つた  
ようだつた。眉が痙攣したように動き、苦悶に口が歪んでいる。

足が、神殿の正門を越えた。

瞬間、ドールクが青白い炎に包まれた。

「ぐわっ！」

足元から青白い炎が螺旋を撒くようにドールクを包み込む。  
凄まじい勢いで燃え盛っているものの、身にまとう衣服に火の点  
いている様子はなかつた。だが、顔は表情が判別できないほど炎に  
包まれている。

そこにいた全員が、呆然とその様子を見ていた。

共に正門を入ってきた役人達も、次々と同じように青白い炎に包  
まれていく。

ドールクはついに剣を取り落とし、苦痛に身悶えていた。

首筋の辺りから、黒い霧のようなものが出で、それも炎に撒かれ  
た。

苦悶の表情を浮かべるドールクが、手をエリオンに差し出す。

「エリオ、ン、様……メ、デス、ニ……」

そう言い残して、崩れるようにドールクは倒れこんだ。  
役人達も、次々と黒い霧を吐き出した後、倒れていく。

「結界、に入つたからか？」

シャオンは剣を收めて、石垣に縋ると、膝をついた。

足は震えていた。

妖獸に操られた者が、神殿の聖なる結界に触れた結果を目の前で見たのだ。生きながら、炎に焼かれていく者達を。しばらく誰も動かなかつた。

白い砂利の上にうつぶせに倒れたドールクを包んでいた炎はやがて消え去つた。ドールクが焼け焦げたわけでもない。衣服も皮膚も無傷だつたが、ドールクは息をしていなかつた。

「ドールク！」

我に返つたりグがドールクに縋つた。

フェンダーが、呆然としたまま立ち尽くしている。エリオンもまた、握ったこぶしを震わせていた。

「聞いたか、フェンダー」

「はい」

「ドールクが命をかけて我らに教えてくれた」「

「エリオン殿！」

後ろから、ウェルが駆け寄つてくるのがシャオンには見えた。安堵感でシャオンはその場にへたり込んだ。

「これは一体どういうことです？」

ウェルの表情は厳しかつた。いつもの温和な口元に浮かぶ笑みはなく、柳眉は寄せられ目は眇められている。口調もいつになく早口だ。

ウェルが怒つている。珍しく、顔に表情があつた。

「何故、ドールクを外に出したのです。城には妖獸がいるとそう申し上げたでしよう！」

「うるさい。貴様にとやかく言われたくない！」

エリオンはウェルに背を向けた。

「ドールクは命をかけて、妖獸の使いの名を告げたのだ」

ウェルは痛々しく白い砂利の上にうつ伏せになつてているドールクを見下ろした。

「私が、結界を強めたばかりに……」

ウエルの瞳が自らを責めるように閉じられた。ドールクの傍に跪き、そつと掌で髪をなでる。何度もそうしていったが、やがて小さく頭を横に振ると、ウエルは立ち上がった。

エリオンを睨むと、ウエルは踵を返してシャオンの元に来た。

「シャオン、怪我は？」

シャオンは苦笑すると、剣を支えに立ち上がった。腰に力が入らない。

「大丈夫だ。ちょっと、疲れたな。遅かつたじゃねえかよ」

「すみません」

ウエルはいつもの微笑をその整つた顔に戻した。

「さあ、シャオンも中へ」

シャオンは目を見開いた。一瞬何を聞いたのか、分からなかつた。

「どうしました、変な顔をして」

「だつて、おれは……」

そう言つて白い砂利の上に倒れたドールクに視線を落とす。

「ああ、大丈夫ですよ」

ウエルは言つが早いがシャオンの手首を掴んで引いた。つられて足が一步正門を越えた。

衝撃にシャオンは瞳を閉じた。

が、何も起こらなかつた。

呆けたようにウエルを見上げると、可笑しそうに笑う相棒が目に留まる。

「やはりいらぬ心配をしていたのですね。私がいるのですから、あなたに危害が加わるはずがありません。今まで、何度も結界の中で眠つたと思っているのです？ 森の中で結界なしに眠るほど、私も馬鹿じやありませんからね」

シャオンには言葉がなかつた。

安心したのか、そう言つ相棒が憎らしかつたのか、嬉しいのか、分かるはずもなかつた。

瞬間、青白い炎が突如として吹き上げた。

黒い闇を映す鏡を前にしていた男は、衝撃に鏡を取り落とし、椅子ごと後ろに転倒した。

「くつ」

苦痛と無念に怒りが沸き立つ。

「エリオンめ、どんな輩を味方につけた！」

男は共に倒れた椅子から呻き声をあげながら起き上がった。部屋は薄暗かつた。分厚い布が窓から入る光を遮り、熱がこもつて蒸し暑い。男もうつすらと額に汗を滲ませていた。腕で汗を拭う。

少し広い額に、開いているのか判別に困るほど目の細い目。黒い髪は長くもないのに無理やり後ろで束ねられている。

男は黒いマントを脱ぐと、それを憎憎しげに無造作に机の上に放り出した。

「メデス、失敗したのか」

突如として地の底から響くよつた、低い耳障りな声がどこからともなく部屋に木霊した。

メデスはすぐさま床にひれ伏す。

「よい、とじめは我が刺すゆえな」

ウェルは沈黙したまま窓際に立っていた。

ゲフュールの屋敷に用意された客室の一階だ。しばらく前から、窓際に立つて下を眺めやつたまま、ずっと動かない。

一方、シャオンは寝台の上に腰かけて床に視線を落とし、膝の上で手を組んだまま、こちらも動かすにいた。

ドールクを失つた。

そのことが、シャオンの胸に深く暗い影を落とした。グリウスの王城に攻め入る前に犠牲者が出るなどとは夢にも思つていなかつたからだ。

見せ付けられた闇の力にも、深い憤りを覚えた。ドールクを操つた闇の力は、味方の命を奪つていった。

「なあ、ウェル」

呼びかけてみたが、ウェルは相変わらずシャオンに背を向けたまま窓から外を眺めている。シャオンはしばらく相棒の返事を待つてみたが、それは叶いそうにない。ウェルが何を熱心に見ているのかを知りたくなつて寝台から立ち上がつた。

ウェルの隣に立つて腕を組み、窓から外を眺めた。窓の外では沈みかけた陽が空を焦がしていた。

庭園が見える。

視線を落とすと、無心に剣を振り下ろすフエンダーがいた。

上半身は裸で、鍛え上げられた身体があらわになつていて。夕闇の弱い光を受けた汗が光の粒となり、フエンダーの上半身を流れていた。

「さつきからずっと、ああして剣を振つてているのです」

ウェルはシャオンが横に並び立つたのと同時に言った。

「悔しいんだよ、おっさん。ドールクは腹心の部下だろ？ リグだって、ドールクの傍にずっといるらしいぜ」

ウェルは俯いて、珍しく深いため息をついている。

「私がもつと、きつくなから出ないよう言つておるべきでした。

疲れていたなどとは、何の言い訳にもなりはしませんね」

「ウェルのせいじやねえだろうが

シャオンの言葉に、ウェルは悲しげに瞳を伏せた。そうすると、金の髪が顔を隠してしまつて表情が見えない。

「でも、最後にドールクはしゃべつたぜ。あれはちょっと驚いた」

空を仰いだシャオンを、今度はウェルが見た。

「そうでしたか。本当に惜しい人を亡くしたのかもしれませんね」

シャオンがウェルを振り返ると、相棒はすぐさま視線をはずして

きた。

「きっと城で捕まつて、無理やり心をこじ開けて闇を植えつけられたのです。だから、彼には闇が支配しきれていない心が残つていたのです。強い精神力を持つ者でない限りあはなりません。だから、最後に自分の意思で話をしたのですよ。そうとしか、考えられません」

「それって、ちょっと、辛い話だな」

「私が、彼を殺したのです」

いつもとは違う低い声に、シャオンは驚いた。

「だから、ウェルのせいじやねえつて」

「いいえ、私はこの神殿の結界を強いものにした。だから、あんな事が起こったのです。エリオン殿を守るためにしたことが……いいえ、本当は私の欲望のため……」

ウェルはまた、階下で剣を振るうフロンダーを見下ろしていた。

「欲望、つてお前……」

ウェルは決してシャオンを見ようとはしなかつた。まるで顔を隠そうとしているように、ずっと窓の外を見るきりだった。

シャオンはウェルの横に立つのが辛くなつて、また寝台のほうに戻つた。

ウェルの心が一向に見えなかつた。

ドールクのこともそうである。

注意を怠つたからといって、ああも落胆するほどウェルに非があるとは思えない。かといって、エリオンを責め立てる事もできはないだろ？ エリオンとて、今はグリュックを預かる領主の立場もある。城が気になつても仕方のないことであろうし、第一妖獣の本当の恐ろしさを知つている者が、いま世界に一体どれほどいるとうのか。

現実問題として、確かに妖獣の餌食になつてている人間はいるらしい。

忽然と姿を消した者は後を絶たない。だが、本人の意志をもつて失踪した者も含まれる。たまに森の外れなどで白骨が見つかり、餌食になつたのだと想像するほかない状況だ。家畜を襲う小物の妖獣以外で、人間がその姿を目にする事はない。目にした者は、すなわち妖獣の餌になつてしまふ。生きて二度と、妖獣の姿を人に伝えることなど不可能だ。

シャオンの耳に、またウェルの小さな溜息が聞こえてきた。

「なあ、ウェル。俺にも、その……困った事があるなら話してくれよな」

シャオンにしては小さく控えめな声だった。無論、返事を期待して言つたのではなかつた。何も言わないウェルを見つめていることが、今日は辛かつたのだ。

すべてを抱え込んでいるウェルに、シャオンは少し自分を重ねていた。

シャオンも左の傷をずっと隠してきた。そこに、自らの過去を塗りこめて生きてきたのだ。誰にも頼らず、たつた一人で生きてきた。ウェルももしかしたらそうなのではないかと思つたのだ。

ショバ皇帝の侵略によつて、たつた一人生き延びて、ウェルがどんな思いをしたのかまでは知る由もない。だが、孤独というなら、シャオンにも十分すぎるほど理解できた。

「すみません。大丈夫です。ちょっと毎日追い詰められていて、今、

平常心を保てていないのがもしいれないと

ウェルは振り向いて、いつも浮かべる微笑を湛えた顔を見せた。

ふと、シャオンはその顔が初めて鬱陶しいものに感じた。

何故、そこで微笑むことができるのか、分からなかつた。

ごく自然に、右の眉が釣りあがり、上目遣いにウェルを見た。

「初めて気付いたな、その顔 作り笑い」

ウェルは虚を突かれたように笑みを失い、撫然とシャオンを睨み返した。

「ほれみる。別に俺の前でまで、笑わなくていい……」

言いかけて、シャオンは言葉に詰まつた。

「そうだ、な。俺になんか、信用おけないか。俺はシェバの息子だ。誰が何と言つたつて、それは変えられねえし、俺にもウェルの仇の血が流れてんだもんよ」

言いながら顔が引き攣つっていくのが分かつた。ウェルを、もう見てられないなかつた。床に再び視線を落とす。

ウェルの薄い微笑が彼の鎧であることに、たつたいま気付いてしまつた。その笑みを自分にまで向けてくることが腹立たしくもあり悲しくもあつた。

ウェルが、自分を信じていらない、といつことではないか。  
それがまた、当然と考える自分もいた。

ウェルが身体ごと振り返つた。

「私も見損なわれましたね。私が貴方を仇の息子だと思つたことは一度もありませんよ。

シャオンの力に気付きながら、何故共にいたのだと思います？」

珍しく、ウェルの口調は早く刺々しい響きがあつた。

シャオンは恐る恐る顔を上げた。だが、予想に反して、ウェルは微笑んでいた。いつものように、温和でかつ凜とした麗容で、黄金の髪は窓から差し込んできた斜陽を受け眩く光を放つている。

シャオンは目を細めた。

ウェルはシャオンの座る寝台まで来ると、隣に腰掛けた。

「すべてが片付いたら、一緒に賢者塔へ行きませんか？」

今度はシャオンが虚を突かれたように呆然とウェルを見た。

「私はそこで育つたのです。神殿で匿われた後、力を持つことを知ったゲフュール様が、私を隠すためにそうされました。初めはグリウスを去らねばならぬ、その事を怨みもしましたが、そのおかげで、私は貴方に会えた」

ウェルが自分のことを話したのは初めてであった。

「賢者塔を出て、医師として出向いた屋敷で貴方に会つた……」

シャオンはただ、口を開けてウェルを見上げていた。

「それにはまず、お金を稼ぎなおしですね、シャオン」

ウェルの言葉で、シャオンはいま無一文であることを思い出した。あんなに金に執着していた自分が、それを忘れていること 자체が驚きでもあった。

「本當だ、えらいことを忘れてた。でも、ウェルはエリオンから礼を貰うつて言つてたじやねえか」

「言えますか？」

シャオンは再び言葉に詰まつた。

「　言えねえ、な」

二人は同時に含み笑いをした。

「これが済んだら、私達は何かを吹っ切れるような気がするのです。きっと過去、という妖獸から、開放される気がするのです」

「確かに、そうかもしんねえな。いいこと言つじやねえかよ」

シャオンも心の底からそう思えた。

ほんの少し前まで危惧していたことを、すべてウェルの一言が片付けてしまつた。

何より、シャオン自身がウェルのことを信じていなかつたことに気が付かされた。どうして別れが来るなどと考えていたのだろうか。それでは今までの一年間は、何であつたというのだ。

いや、違う。

自分から別れようとしていたのだ。心から必要としてやまない相

棒から。

「よし、気合を入れよう」

シャオンは立ち上ると、近くの机の上に無造作に投げ出されていた剣を手にした。

「ドールクに教わった。あいつの剣の腕はすごいかった。ちょっとエンダーのおっさんに教わってくるわ」

シャオンは剣を目の高さまで持ち上げて笑った。

「そのままで十分強いじゃありませんか」

「いや、俺のは自己流だからな」

妙に真面目にそう言つと、シャオンは部屋を出た。

ウェルも、シャオンを見送つた後、再び窓の外に目をやつた。

「 近い。私も手遅れにならぬうちに、次の手を打つておくとするか」

ウェルも寝台から立ち上がって、部屋を後にした。

翌朝。

誰もが思いつめた表情で、ゲフュールのふるまう朝食の席についた。

エリオンと、彼のそばに居たであらうトレーネも。リグなどは、食事どころではないといふ塞ぎこみようだつた。シャオンは昨日フェンダーと打ち合つて、少し腕の筋肉が軋んでいた。フェンダーの鍛え上げられた剣の腕は、全くシャオンの敵うことではなかつた。

「よお、弟子よ」

フェンダーは食堂に来るなり、シャオンの軋む腕を掴んできた。もちろん左を。

「痛でえ、何すんだよ」

シャオンが睨むとフェンダーは朗笑した。

「随分きているな。朝飯を片付けたら、リグと一緒にもう一振りだ。隻眼にしては勘もいい、動きも言つことはない。リグ、いいな」リグは驚いてフェンダーを見あげた。が、騎士らしく、椅子からきつちりと立ち上がると、短く返事をした。

「よしよし」

シャオンはリグが氣の毒にさえなつたが、彼の表情が幾分柔らかくなつたのを見て、これもフェンダーなりの気遣いなのだと悟つた。頃合を見計らつて、ゲフュールが席につき、食事が始まつた。

「ウェルは？」

シャオンはウェルが居ないことに不審を抱き、ゲフュールに問うた。

ゲフュールは食べかけていた食事を皿に戻し、一同を見渡してから、まるで、参拝に来る者に説法を説くような厳肅な口調で言った。

「ウェルトス様は、聖石の間に　ああ……」

ゲフコールは右手を少し上げて旨を制し、「心配なさるな。食事はちゃんとお取り頂いた」と、にこやかに付け足した。

「昨晩のうちに斥候代わりに出した聖靈から、知らせが参つたのでな」

エリオンが身を乗り出した。

「まさか？」

「そう、その、まさかでござります。グリュックの東の街道に、数万のシェバ軍が到着した由」

エリオンとフェンダーが顔を見合せた。

「早いですな」

「謀つたな、あの先触れ。私を油断させるつもりだったのか」  
エリオンが拳で机を打つた。

「とにかく腹ごしらえだぜ。それからでも遅くはねえだろ？」  
シャオンがそう言つて、豪快にパンに噛り付いた。

五人はエリオンの部屋で円卓を囲んでいた。

トレーネはすでに無理矢理トラオに返されていた。このままここにいても、彼女には心配する以外にすることはない。それならば自分の家に戻っていたほうが何倍も落ち着くに違いないと、シャオンが言つたからだ。

それにトラオはもう襲われないだろう。少なくともエリオンが神殿にいることは既に敵方・メデスの知るところとなっている。

「聖靈によると、どうも西の街道にはすでにアキロ軍が集結しつつあるようですね」

「アキロも存外情報が早い」

エリオンは苛々したように組んだ腕の上で指を動かしていた。

「朝、東の街道に姿を現したということは、皇帝はもうそろそろ入場しているな」

エリオンがウェルを見る。

「出来るだけ夜は避けたかったのですが、朝までは待てそうにありません。このまま夜明けとともにアキロに侵攻されても、シェバの居所が不確実になるばかりです」

「シェバは確かに、地下通路の出口のある部屋に入るのだろうな」「ほかに皇帝に相応しい部屋がありますか？」

エリオンはむつとしたように目を細めたが、「ない」と、そっぽを向いた。

「もちろん聖靈に協力してもらつて確認もしますが、もし、封印された扉の向こうにシェバがいれば、気配で分かると思います」「間髪いれず」に、フエンダーが身を乗りだしてきた。

「で、ウェル殿。我々がその通路の出口から部屋に躍り出たとして、その後はどうなさる。異変に気付けば、シェバは直ぐに外の兵を呼びだらう。時間がかかるだけ、兵の数は増えて、我々は不利になる。それに妖獸がどれほどいるかも知れない。ドールクが言い残したメデスも妖獸だとすれば、なおのことだ。あのよつた力を使われては、我々には太刀打ちできません」

「闇の力は、心の持ちようひとつで防ぐことが出来ます。心の迷いや隙は、負の力を呼び、それによつて幻覚すら見てしまします。妖獸を恐れすぎれば、相手は実際よりもはるかに恐ろしいものに見えるものです」

ウヘルは首から下げていた革紐を取り出した。その先端には麻袋がついている。

「さつき、聖石の間から持つてきました。これで神殿の結界をより強力にしました。この余韻は明日までは持つでしょう。ですからこれは持つていつて使うことにしました」

そう言つと、中の物を取り出した。

紫翠の石だつた。赤子の握り拳よりわずかに小さいほどの。

エリオンやフェンダー、リグ、シャオンには、ただの珍しい色の石にしか見えない。

「これは聖靈の力のこもつた石です。これで、王の間の扉を封印し

ようと思こます。ただし

ウェルは言葉を切つて、四人を見渡した。

「聖靈に願う間、ほんの少し時間が要ります。その間に部屋に入つてくる敵だけは、倒さなくてはなりません」

「そん中にはもちろん化け物もいるつてこいつたな」

「そうです」

ウェルとシャオンは同時に頷いた。

「エリオン殿」

エリオンは不機嫌そうにウェルを見上げた。

「残られてもよろしいですよ。きっとシェバは貴方を一番に狙うでしょう。エリオン殿が反旗を翻したのを、グリウス城の中にいる者から報告を受けているでしょうからね。神殿ならば朝までは無事ですよ」

エリオンは眉根を寄せてウェルを睨む。

「冗談じゃない。私も行くぞ。私がグリュックの未来を切り開くのだ。そのための戦いだからな」

フーンダーもリグも、その言葉に頷いていた。

「それから一つお願ひがあるのでですが」

一同が再びウェルを見た。

「私の剣は妖獣に折られてしまったので……」

その言葉に、直ぐにリグが立ち上がり、一歩前に出た。

「これはドールクの使っていた剣です。共に持つてゆくつもりでしたが、これはウェル様にお預けいたします。少し重く作られていましたが、いかかでしようか」

リグは剣をウェルに手渡した。

どうやら剣はずしりとウェルの手に乗つたようで、彼の腕がわざかに下に重みで圧されたように見えた。

「彼に相応しい戦いが出来るよう、努力いたします」

ウェルがリグを見た。

リグも、どこか寂寥とした面持ちで、それに返した。

グリュックの空は、その日、暗澹とした雲に覆われていた。

明け方までの空は澄み渡つて青く、朝日が人々の家の窓から輝かしく差し込まれ、一日の始まりを告げていた。

それが、午前中、シェバの軍隊が中央街道をグリウス城に向かつて進行し始めたころから一転した。

急速に光を遮られ、今にも破裂しそうな水分を重く含んだ雲が厚く空を覆い隠した。

グリウスの中央街道を兵が歩く。

見るもののが見れば、その中に人にあらざる者が混じっているのが見えたかも知れない。生氣のない瞳に、きこちない微笑。土氣色の顔色。

それが人の皮を被つた妖獸である事に気付いた者はいまい。

シェバは何頭もの馬に引かせた大きな車に居た。

一行がグリウス城に入ったのは、午後も過ぎ夕闇が迫る目前のことであった。

「ようこそ、グリウス城へ」

頬のこけた痩身の男が、黒い外套を口深に被つて頭を下げた。

部屋は黒い布で覆われ、微光の侵入すら許さぬ警戒ぶりだ。明かりは入口に灯された炎のみ。それも小さく揺れていた。入り口の辺りを仄かに点す役割しか持たぬ明りは、部屋をさらに漆黒の闇に落とすかのようだった。

闇の中で、シェバ皇帝はいつものように毛足の長い敷物に足を乗せ、錦の織物で作られた豪奢な椅子に腰掛けていた。

足をゆつたりと組み、腕は肘掛に持たれかかっている。

表情はまるで黒い霧が立ちこめたようにはつきりと口にすること

が出来ない。

「メデス。して、エリオン殿は？」  
シェバの右隣から、低い声がした。

「は、ヤノス様。どうやら神殿におるらしいのですが今は見えません。なにやら聖術を使う者を味方にした様子」

「小僧め」

さらに耳障りな、半分聞き取りにくい声が響いた。  
声はすでに人間の声ではなく、声帯の振動が邪魔をして声が二重に被さっているように聞こえる。

シェバの右に立つ男が、皇帝のそばに耳を寄せるかのように近付いた。ヤノスと呼ばれたその男も、黒い布を田深に被り、闇に溶け込んでいる。

「その者は何者かと、聞いておられるが」

ヤノスの低音が問うた。

「はきとはいたしませぬ。私の見たものは、顔が半分潰れた黒髪の男、それに長い金の髪の男、グリウス将軍としてエリオン殿に付き従つて参つたフェンダー、その配下のリグとドールクでござります。ドールクのほうは、私の目にして送り返しましたが、どうやら殺されましたようだ」

メデスはさらに深く腰を折つた。

「か、顔の左か？」

ようやく聞き取れたその問いに、メデスは「ハイ」と答えた。

「皇帝陛下、確かご子息はマリノワ様をお庇いになり、左目にお怪我を。まさかとは、存じまするが」

ヤノスの言葉に、闇から苦悶の声が漏れ聞こえた。

「皇帝陛下はお疲れだ。部屋を用意いたせ、メデス」

メデスは再び腰を折つて、部屋を辞した。

ヤノスはメデスが部屋を出てから、黒い被り物をとつた。

頭皮に髪はない。瞳は部屋の闇を吸い込みでもしたかのように黒く、また見えているのが不思議なくらい細かつた。顎が尖り、頬も

メデス以上にこけている。

一見して異様な風貌だ。

皇帝の右から、正面に回ったヤノスは、片膝を付いた。

「もしも、シャオン様なら何といったしましょうや」

シエバは、喉の奥で「ぐぐぐ」と唾液を鳴らしたような音を立てた後、ゆっくりと言つた。

「捕らえよ。我が血を濃く受け継ぐ子を。我的新しき器にするのだ」

ヤノスは無表情のまま頭を下げた。

グリウス城の最上階にある王の間は、もっとも警備が厳重な部屋であった。

王の間の最奥が寝室になつており、天蓋つきの豪奢な寝台が置かれている。その手前が応接室。人が二十人は囲めそうな机の周りに、一つ一つに豪華な彫り物がなされた椅子が十五席おかれていた。ちょうど前グリュック王家の大臣達の数であることは、もうすでに誰の知るところでもない。両脇には、王妃の間と、王家の者専用の居間が設けられている。さらに応接室の手前には空室と、警護の者が詰める部屋がある。

王の間の裏手は断崖になつており、足場もない四階の高さは、人間が上つてこられる高さでもない。

豪奢な飾りのついた王の間は、厚い暗幕に被われて闇に包まれていた。

もてなしを受けるわけでもなく、女を侍らせるわけでもない。シエバ皇帝が椅子の上に座し、闇の中にたたずんでいるきりだつた。

大きな天蓋の着いた寝台もまた、使用されてはいない。

部屋には、細い筒を口に当てて息をしているかのような、ヒューヒューという呼吸音だけが規則正しく響いていた。

奇妙な静けさではあつた。

生き物が呼吸をしているといつのに、そこにはまるで存在感がない。

大きな天蓋の着いた寝台の隣には部屋を映す鏡が置かれていたが、それにもまた闇が映るばかりである。

その人の背の高さほどある鏡に映る闇がふいに濁んだ。

刹那、闇を切り裂く勢いで破裂音がした。

鏡は木つ端微塵に粉碎され、仄かな明かりが漏れ出でた。

地下通路から、封印を破つたウェルが腕で覆つた顔をそっと覗かせた。

「すげえ、音」

後ろから、シャオンも顔を出す。

耳にはまだ炸裂した鏡の碎けた音が木霊して残っていた。

「ちょっと派手すぎんじゃねえの？」

「これでは敵がより多く集まつて来てしまうではないか」

エリオンとシャオンが不満げにウェルに言った。

「仕方ありません。こんな風に封印が解けるなどとは私も思っていませんでした」

煙のたつ入り口の前で顔を覆つていた腕を口元に当て、ウェルのもう一方の掌の上には紫翠の石が乗せられていた。石はウェルの目にだけは微光を放つて見えている。

ウェルの後ろで明かりをもつていたフェンダーが、鏡の入口から王の間へと足を踏み入れた。

辺りを見回すと、あつたはずの窓には暗幕が張られ、わざと闇が作られているのが分かる。外はそろそろ日が落ちて、真の闇が訪れるようとする時間になつてきているだろう。

一同の闇に慣れた目が、すぐさま天蓋つきの寝台の傍に座る黒い塊に気付いた。

同時に、王の間の扉が開かれた。

「陛下、なにやら大きな物音が……！」

頬のこけた毛のない頭皮を持つ男が扉から顔を覗かせ、侵入者に気付いて一瞬息を呑んだのが、シャオンには分かつた。

だが、その男の反応を待つまでもない。

シャオンはウェルとフェンダーを押しのけると、剣を抜きながら扉口に立つ男に切りかかった。

駆け出し、男の前で剣を振り下ろす。

が、何の手ごたえもなく剣は床に刺さつた。

男はかろうじて剣をかわし、王の間に続く応接室へと逃れた。

「シャオン殿、剣は大降りにせず、必要最低限の動きですぞ！」

フェンダーが叫んで、明かりを左に持ち替えて右で剣を抜いた。

リグもフェンダーに続き、エリオンだけはゆつたりと剣を抜きながら、鏡から出た。

ウェルは鏡の前に立ち、石を胸に抱いて瞳を閉じた。

シャオンが駆け出して行つたので、ウェルは王の間の扉ではなく、次の扉、すなわち応接室の扉を封印することにした。

ウェルが応接室の扉を封印する間、体を守るのはエリオンの役目になつている。

フェンダーは部屋に明かりを灯すために用意されていた入口にある燭台に火を灯した。部屋は仄かに明かりを得、中の様子を皆に知らしめた。

「確かに王の間だ」

エリオンの言葉が、一同を寝台近くにあつた黒い塊に目を向けさせた。

「陛下！」

王の間の入口から男が叫ぶ。その後ろにはすでに何人もの役人が集まつて来ていた。

黒い塊は微動だにせずに座っていた。

毛足の長い敷物の上に足を無造作に投げ出し、手は肘掛に添えら  
れている。首は前に傾いでおり、俯いて下を向いた格好になつてい  
る。

餽えた匂いが皆の鼻をついた。

錦の織物の豪華な椅子に座る人間の頭には、もう数本の毛しかな  
い。

土色の粘土をこねて所々に煤色を混ぜたような干からびた皮膚。  
肘掛けに添えられた腕は筋が浮き立ち、潤いも筋肉もすべてを無く  
した棒切れのように細い。かえつて滑らかな布地で出来た白い装束  
が異様に浮き立つて見える。とてもその俯いた顔を持ち上げて見よ

うなどとは思えなかつた。そこに現れるであろう顔を想像するだけでも肌が粟立ち全身の毛がそそけ立ちそうだった。

「これが……」

エリオンが構えていた剣をおろして、懷疑的に椅子に掛ける朽ちた人間を見下ろした。そつと顔を覗き込み、短い悲鳴をあげて飛びする。

眼窩にはすでに眼球もなく、白い歯だけが目立つて並ぶ朽ち果てた顔があつた。

「父上？」

エリオンが悲痛な声を発した時、応接の間の扉が大きな音をあげて閉じられた。

「扉は閉じました」

ウェルの声が静かに部屋に響く。

王の間の、一枚の扉が大きく開け放たれた。  
頭に毛のない男、ヤノスが、にいつと笑う。

「エリオン様、お久しうござるな」

ヤノスの後ろに黒い服をまとつた頬のこけた瘦身の男が立つ。短い髪を、無理やり後ろで束ねている。メデスだ。

「メデス、貴様」

エリオンが歩み出た。

「おつと、お待ちを。今は貴方などどうでもよい」

ヤノスはメデスに目配せしながら手を上げた。

メデスは足音もなく後ろに立つ二十人ほどの役人達に顎で合図する。役人達はいずれも人の姿をしていたが生氣に乏しく、妖しげな笑みを浮かべている。

「あなただ、シャオン様。まさか生きておいでとは思いもしませなんだ。陛下もお喜びでございましょう。ねえ、陛下」

シャオンは床に突き立つた剣を抜き去り、ヤノスを睨んだ後、ゆっくり振り返った。

干からびたシェバ王から、低く聞き取り難いくぐもつた笑い声が

聞こえてきたからだ。

「ヤノス、シャオンを捕らえよ」

声が引き金になつたように、シェバ王の足元から黒い霧が沸き立つた。それは生き物のように薦が這い、螺旋にシェバ王の体に巻きつくように立ち上つっていく。

「エリオンを殺れ」

エリオンを

その言葉に、エリオンの中で怒りが暴発した。

前に座る千からびた人間へ、力任せに剣を振り降ろそうと構えな  
おす。

が、たちどころに黒い霧がエリオンの視界を遮ってきた。

目の前は闇。

エリオンは動搖しそうになる心を抑えて目を閉じ、呼吸を整えた。  
彫りの深く目鼻立ちのはつきりとした顔が緊張に歪む。

闇に心を奪われた者の負け。

エリオンは心中で反芻した。ウェルに教わったことだ。要は心  
の持ちようだと。

剣の柄を握る手に力を込めなおした時、足元で、がさがさと何者  
かが蠢く物音がした。

鼻の粘膜を刺すような異臭。

エリオンは目を恐る恐る開けた。

目に飛び込んできたのは、小さな紅い光だった。ガラス玉のよう  
に丸く、紅い目。

無数の節足動物に似た足が床を掴んでいた。大人の下肢ほどの長  
さで大腿部ほどの太さがある。巨大な百足だ。胴は黒く艶があり、  
触ると黒い液体が糸を引いて手に付きそうである。先端には人間  
の顔が張り付いていた。

「ひつ」

エリオンの周りに数体いる。

さらに後ろを振り向くと、さっきまで人間の姿をしていた役人達  
が闇に溶け、次々と百足へと変わつていった。

百足の紅い目が眇められると、口が耳まで裂け、針のように鋭い  
牙を剥いてきた。どこにどう力を入れたのか、体をよじって飛びつ

いてくる。

慌てて剣でなぎ払つた。狂つたように振り回す。

薙ぎ払つても薙ぎ払つても、それは向かつてきた。体を真つ一つにされようとも、互いに体を求め合つ。身の毛のよだつような、ギイツという音を立てて融合していく。

エリオンは頭があかしくなりそうだった。

剣を振りながら、じりじりと追い詰められた。

不意に背に壁が当たる。

「エリオン様」

絞り出すような声が隣からした。

「リグ！」

隣でリグが片腕に化け物を喰らいつかせながら、向かつてくる百足を斬つていた。

ぐしゃっと、肉に刃物が刺さりこむ嫌な音がした。

エリオンは咄嗟に喰らい付いている百足の化け物に掴みかつて引き離した。リグの腕から鮮血と共に牙が抜ける。

エリオンの手には、タールの「」とき黒緑色の粘着質な液体がベットリと付いていた。

リグはその場で片膝を付いた。声すらたてずに痛みに耐えるリグは賞賛に値する忍耐力の持ち主だ。

「大丈夫か」

エリオンは剣で化け物たちを牽制しながら、リグの肩に手をやつした。

「フェンダー様とはぐれました」

リグがかされた声で言つ。

「私もだ」

フェンダーは百足の妖獣を追い払いながら、王の間から応接の間に移動していた。

もちろん辺りは吸い込まれそうな深い闇に包まれている。王の間の入口と、応接の間の入口にある仄かな明かりだけが、闇を照らすのみだ。

目の前には痩せた男が立ちはだかっていた。  
「メデス、よくもドールクを妖獣の手先に使つてくれたな」  
剣を向けられてもメデスは怯む様子もなく、また表情一つ変えずに、笑つた。

「フェンダー将軍。あなたは闇に落ちなかつた。ドールクも」  
メデスは喉の奥を震わせてクククと笑う。

「ドールクは抵抗した、だが、私の力には抗えなかつた。血反吐を吐き、身悶えながら、あの男は私の手先となり働いたのだ」

フェンダーは剣を握りなおした。

太い腕についた筋肉が力を込められ盛り上がる。

フェンダーは太い声と共に、剣を横に払つた。

メデスの体が呆氣なく二つに切り裂かれ、裂けた隙間から闇が覗いた。

やつたと思ったのは一瞬だった。

切り裂かれた上体が倒れざまにフェンダーの足に噛み付いたのである。

フェンダーの左足に、骨を打ち碎かれたかのような激痛が走つた。衝撃で噛み付かれたまま倒れこむ。

一瞬のことに反応が遅れたフェンダーが足元に目を落とすと、そこには半分に斬られたままのメデスが、細く紅い目を見開いて下からフェンダーを睨め付けていた。

ざわざわという音と共に、メデスの体から無数の節足が湧き出てくる。

元々ついていた上腕も肩と肘を直角に曲げて体を支えていた。

下半身からも同じ足が無数に生えると、股関節と膝を直角に曲げ、すべての足を使ってざわざわという音を立てながら上半身に向かつてきた。歩きながら、まとっていた衣服は脱げ、変わりに黒い肌が

あらわになる。

ついに、真っ二つになつた体はキイという音と共に融合した。  
さすがのフェンダーも目の前に繰り広げられる異様な光景に息を呑んだ。

最前線にいた時には、おもに後方で指揮を取つていた。最前線にいる敵国の兵達がシェバの放つた妖獸とどう戦つていたのかは、実際のところほとんど目にしていない。ただ、戦いの後で、バラバラになつた人間の体を食らう異形のものを目にしたくらいだった。その異形も、狼か鷲などの動物の顔が人間で体が獣だと、鱗があるとかの程度だつた。

噛み付かれた足に、二度目の激痛が走る。  
噛み付いた口に力を込めたらしい。

全身がしびれた。

「痛がるう？ 直ぐに楽にしてやるう」  
噛み付いたままだというのに、どこからともなくメテスの声がした。

闇に負けてはならない。

フェンダーはそう心で呟いた。

上体を起こし、両腕で剣を握りなおす。

剣を振り上げ、力いっぱい足に噛み付く妖獸の頭に振り下ろした。

「シャオン様」

ヤノスは再びシャオンに呼びかけた。

シェバを振り返っていたシャオンが、ヤノスを睨む。

「おお、確かに、シェバ様のお子様の気配。闇の力を見出すことができる」

ヤノスはゆっくりとシャオンに近付いてきた。

「あの時、私の爪にかかる左目を抉り、もう生きてはいまいと思つていた。マリノワを庇うなど、愚かなこと」

シユツ。一瞬、風が一人の間を駆け抜けた。

「それ以上彼に近寄ることは許しません」

いつの間にか、ウェルがシャオンのそばに立っていた。

ウェルはドールクの、普通よりは長く重い剣を抜き払った。それを椅子に座つたままのショバの体に突きつける。

「引きなさい。刺しますよ」

ウェルの顔には、当然ながら笑みはない。

整つた美貌の青年の瞳は燃えるように揺らぎ、真っ直ぐにヤノスを見る。その顔は凄艶で、冷酷ですらあつた。

左手には紫翠の石が握られている。指の間から聖なる紫翠の輝きが漏れ出で、ウェルの石を握る手までが透けて光を帯びている。

「その石は」

ヤノスは眩しそうに、己が額に手を翳した。

ウェルがシェバに突き出した剣に力を込めようとした。

が、ヤノスが一瞬早く、飛んだ。

同時にシェバが立ち上がつた。ミシミシといつ崩れそうな音を立てながら。

シャオンはヤノスの爪を、ウェルはショバの放つた黒い薦をそれぞれ剣で受けていた。

「くそ、お前だつたのか」

暗紫色の長い爪を剣で受け止めながら、間近に迫ったヤノスの顔を睨んだ。

強い力で剣を押される。

細い切れ長な目から、わずかに覗く漆黒の瞳が閃いた。

ヤノスの口元から、小枝を折ったようなメキ、メキ、という音がする。

突如、顔の半分が裂けて口に化け、中からもう一つの小さな顔が覗いた。

ヤノスと同じ細い目を持つ、瓜一つの顔だった。それが、裂け目から瞬きする間もなく飛び出してきた。鋭い歯が並んだ小さな口を猛烈な勢いで開き、剣を握る右腕に噛み付いた。

「ちいっ」

シャオンは直ぐに、左手でヤノスの口の中から出てきた小さな頭を掴んで、力を込めて引きちぎった。

それはずるりと、ヤノスの口から抜け落ちて、黒い塵になつて消える。

ヤノスの顔は、すでに人間のものではなかつた。

体はそのままなのに、顔は大きな蝦蟇がまのように変わつている。

無数のいぼのついた緑の顔には、蝦蟇の大きな口と、細い黒い瞳がある。

シャオンは間をおかずにはじめに剣を袈裟懸けに振り下ろした。

ヤノスは甲高く笑いながら、後ろに飛び退つた。

「大人しくなされ。そしてそれ、シェバ様に体を差し出すがよい。お前が新しいシェバ王となるのだ」

シャオンは剣を握りなおした。

「誰が貴様の戯言など聞くもんか。ここで闇に帰りやがれ」

「ほおつ。ではこの女の言つことなら聞くが、どれ、会いたからつ」

ヤノスの姿は、言葉の途中で闇に溶けた。

はつとして足を踏み出したシャオンだったが、田の前に現れた新たな影に足を止めた。

女だつた。

髪は黒く艶がある。少し癖のある髪はゆるく巻きながら、腰の辺りまで伸びてゐる。振り向いた女の黒い瞳は濡れたように姫嬌めいていた。

シャオンと年の変わらぬ美女だつた。

女は懐かしむように小首を傾げ、微笑を向けた。手を、シャオンに向かつて伸ばしてくる。

「やめろ、何のまねだ」

口元のほくろが、女が唇を軽く吊り上げると同じく艶かしく持ち上がつた。

両手は真つ直ぐにシャオンに向けられる。

ゆつくりとした動作で、足が一步前に出た。

「来るな」

幻影だと分つてゐる。分つていても、剣を向けることが出来なかつた。足は床に縫い止められたかのように動かなかつた。体は石のように固くなつてゐた。喉は焼け付き、声を出すのも躊躇われるほどに痛んだ。心臓がわしづかみにされ、抉られるような痛みが鼓動と共に全身を貫いた。

遠い記憶の中の一一番大切な人だ。でも、その人は死んだのだ。自分を抱いて、真つ赤に血に染まりながら。殺された。

「母上……やめてくれ」

シャオンの声は懇願するよつて震えていた。

女はシャオンに寄り添つよう近付き、シャオンの肩に手を乗せてきた。

体は強張つたように動かず、女に抗つことは出来ない。

女の腕は、肩からするりとシャオンの背に回つて抱き寄せてきた。

「シャオン、逃げましょ。陛下は人間ではありません。さあ、逃げて」

女が喋った、その声に重ねて、シャオンには耳障りな音が聞こえていた。

まるで美しい音楽に、砂嵐のような連續した雜音が混じっているかのように、低い残響が声に重なって聞こえる。

シャオンはくしくも、その異常な聴力によつて救われたのだ。

母上は死んだのだ。

言い聞かせながら、剣を握る腕に力を込め、真横から叩き込んだ。肉を切り裂く手ごたえがある。

ぐはっ！

目の前には蝦蟇がいた。

横腹にシャオンの剣が突き立つっていた。

薦は剣に巻きついていた。

ウェルの目の前でゆっくりと立ち上がったシェバが、眼球を失つた漆黒の闇の覗く眼窩で、ぎょろっと見据えたように感じられた。剣は薦に捕らわれたまま微動だにしない。

ウェルはミイラのように干からびた姿で立つてゐるシェバと睨み合つた。

闇を背にまとい、同じ黒なのに眼窩の奥の闇はさらに深く見える。

「お前は誰だ」

耳の奥を撫で上げるような不快な声だ。

「私の名を聞いてどうする」

シェバは喉の奥で唾液を転がすような音をまじえて低い声で笑つた。

「大体、想像はつく。その気配は、我が喰らつた金の髪の男と酷似している」

喰つた？

ウェルはその言葉に目を見開いた。後頭部を殴られたような衝撃だった。

自身がグリウス城から逃れたあと、父と母がどういう末路を辿ったのかを知る由もなかつた。

父と母は、力を持つていた。

無論、聖なる力だ。母は聖靈の姿が見える程度だったが、父王は聖靈に火を灯させることくらいはできたと記憶している。

妖獸は聖なる力を持つものを喰らうと、妖力と生命力を増すことができると言っていた。

ウェルは今まで、自らの感情に蓋をするよう、幼い頃から努力してきた。そうすることで過去の悲しみに耐えて生きてきた。が、深いところから湧き上がる怒りを、この時ばかりは抑えることができなかつた。

生れて初めて覚えた殺意かもしれない。

ウェルは力を込め、我を忘れて剣を振り払った。  
絡まつていた薦は霧散するように消えた。間髪をおかずに剣を突き出し、続けて袈裟懸けに振り下ろした。

手応えはない。

「そのように入間の作つたもので我が斬れると思うのか」

シェバの顔には表情もない。声に抑揚もない。

それがかえつてウェルに冷静さを取り戻させていた。左手に握り締めていた紫翠の石を目の前に翳して、口の端を持ち上げた。

「人の手によらぬものならば、斬ることができよくな」

ウェルはゆつくりと息を吐いた。

石を剣の根元にあて、剣の刃に滑らすように触れさせた。石が移動した刃には、その軌跡が刻まれたかのように、紫翠の輝きが移つた。

剣が紫翠の光をまとう。

シェバは顎を引き、ぎこちない動きで、一步足を後ろに引いた。

ウェルは駆け出し、シェバ目掛けて剣を突き出す。

が、シェバの体から黒い薦が四本延びてきた。一本は剣に触れ、螢光を発して消滅した。

もう一本は真っ直ぐウェルの体を横手から打ち付けてきた。

凄まじい力で弾き飛ばされる。

ウェルは天蓋つきの寝台の上に投げ飛ばされた。

寝台の柔らかな寝具が受け止めたせいで衝撃は和らいだが、ウェルの体は寝台の向こう側へと転がりおちた。

床に落下して右半身を打ち付ける。衝撃で、紫翠の石が左手から転げ落ちた。

ウェルは慌てそれを拾おうとして体を起こした。

が、一步、紫翠の石の手前で、腕に激痛がはしつた。

鮮血が迸る。

ウェルの左腕を黒い薦が掠めたのである。膝をつき、右に持つていた剣で支えはしたもの、次に襲ってきた黒い薦を、かわすことはできなかつた。

薦はウェルの右足をも貫いた。

刺し貫かれた反動で、崩れるように倒れこむ。

大きな寝台がウェルの体を隠したものの、シェバの気配は向こう側に確実に存在していた。

激痛に唇をかみ締めながら、ウェルは必死で心を落ち着けようとした。

焦つてはならない。

心を落ち着けて、聖靈に加勢を依頼しなくては。

石に宿る光の聖靈は応接の間の封印に使つてしまつた。それを呼び戻せば、封印が解けて扉が開き、さらに役人をこの部屋に招き入れることになつてしまつ。

闇に光を呼ぶことは、大変な力が要る。夜に太陽を昇らせるようなものだ。ウェルにはその精神力を維持する自信がなかつた。ふと、風が、頬を撫ぜていく。

窓はすべて閉じられ、暗幕がかけられているので外から風が入つ

てくることはないはずだ。

風は次第に勢力を増し、ウェルの周囲を竜巻のように覆い始めた。聖なる力を、ウェルは確かに感じた。

ふわり、と体が軽くなる。

その気配は間違はずもない、紫翠の石に宿る力だった。握った剣にも、力が漲る。

ウェルは剣を握り締めて立ち上がり、痛む右足を引きずつて歩いた。

同時にずるり、と何かを引きずる音がウェルの耳に届く。寝台から覗くと、シェバの体が、ぎこちない動きで一いつ朶に回つてこようとしていた。

その時。

「ウェル！」

シャオンが剣を構えて駆け寄ってきた。

シェバの体に体当たりする。

体はまるで乾燥した粘土細工が脆くも崩れ落ちるように粉砕した。剣を握り締めたシャオンが、不敵に笑っている。

「えれえ、怪我してんじやんかよ」

ウェルもつられて笑つた。

二人が気を許したその瞬間だった。

粉砕したはずの体の辺りに黒い霧が立ち込め、黒い触手が湧き出ると、その一本がシャオンを貫いた。

「シャオン！」

シャオンの脇腹を突き抜けた触手は、素早く黒い塊の中に戻つた。腹を押さえて膝をついたシャオンの後ろに、蝦蟇の顔をした妖獸が音もなく立つ。腹を割かれたままの、蝦蟇の姿に変わったヤノスだ。

細く黒い瞳が、シャオンを見下ろした。

「あの程度で、我らを倒したつもりでいてもらつては困るのよ」

蝦蟇・ヤノスは、暗紫色の鋭い爪を振りかざした。

ウェルは急いで痛みを堪えて歩き、転がっていた紫翠の石を拾つて握り締めると、それを蝦蟇に向かつて投げつけた。

石が蝦蟇の額に、吸い込まれるようにして当たる。

ヤノスが断末魔の叫び声を上げた。

紫翠の石は極光を発して、蝦蟇の額にめり込み、青白い炎が発火して体を包み込んでいった。まとわりつくように、命を与えられたかのような炎が、蝦蟇の体を焼き尽くしていく。

「この、炎は結界の中のと、同じ……」

腹を押された手の隙間から鮮血が流れ落ちる。

シャオンは、膝をついたまま脇腹を抱えて、ゆるゆると後ろを見た。

一方、黒い塊は青白い炎がまるで見えているかのように眩しそうに身を捩つたかと思われたが、すぐに触手をウェルのほうへと向けてきた。

ウェルは両腕で剣を握り締め、瞳を閉じた。

紫翠の色を帯びた風が一旦ウェルの周りに集結し、四散する。風は太刀風となり、体を失ったシェバに襲い掛かった。

風が黒い塊から次々と伸びる触手を切り裂き、霧となつて霧散させていく。

シャオンは膝をつきながら、シェバが風に切り刻まれる音を聞いていた。

蝦蟇が炎に焼かれ、黒い塊と化した後、そこには紫翠の石が落ちていた。

今はシャオンにも、その石が放つ光が眩しく見えている。

シャオンは脇腹を襲う痛みを堪えて床を這いながら、その石の元に行こうとしていた。

床の上で光を放つ石にそつと血にまみれた手を伸ばす。

鮮烈な光は、シャオンの右目を焼いてしまうのではないかというほどの輝きだ。

触れると、手はジジッという音を立てて焼け付いた。

「あつひ

猛烈に発熱する口を、それでもシャオンは掴んだ。手が焼け焦げるような音と匂いがする。

「ああああああー！」

声にならない叫び声を上げながら、シャオンは石を投げた。

エリオンは、リグを庇いながら、一向に減らない百足達を斬つていた。

斬つても斬つても再生する百足に、エリオンはひどく疲労していた。肩で大きく息をつき、顔は青ざめ、額からは汗が滴っている。リグの百足に噛まれた腕は紫色に変色し、牙の刺さった痕は黒くなっている。

「大丈夫か」

荒い息の下でエリオンはリグに問うた。

「もう腕の感覚がありません。それにしても、これは」

そう言って、足もとに来たムカデの妖獣に剣を突き立て、床に縫いとめる。妖獣はグフェッという聞きたくもない声を出して、剣に串刺しにされたまま、無数の足を無秩序に動かした。

仄暗い空間では、視界にも限界がある。

その時、王の間から紫翠の閃光が閃いた。

それはやがて青白い光となっていく。

足元を見ると、光に照らされた百足だけが黒い塵になつて吹き飛ばされていた。

「 どうか、光だ、リグ」

「わかりました」

エリオンとリグは黒い塵に変貌していく百足達を踏みつけながら、窓に駆け出した。

一方、応接の間の入口に追い詰められ、足を食われたフェンダーは、メデスの頭に剣を突き立てたまま動けずにいた。

頭を床に縫いとめられたメデス・巨大なムカデの妖獣は、足をばたつかせながらもがいでいるが、フェンダーが剣の柄を握つたまま

抜かないので、動きようがないらしい。

細く黒い瞳に、時おり紅い光が閃き、フェンダーをねめつける。手を伸ばしてフェンダーを搔きむしろうとしているが、それも届かない。

と、フェンダーはもたれかかっていた背中の扉が、淡く紫翠に光るのを見た。

光は徐々に色を濃くし、強くなる。

比例して、メデスの動きがやんできた。

驚いて、扉とメデスを見比べていると、妖獸メデスのほうは、やがて動きを止め、色が黒く変色し、霧のように消え立つていくではないか。

「フェンダー閣下！」

フェンダーは聞き覚えのある声に顔を上げた。

「リグ！」

「今、暗幕を取ります」

リグは応接の間に隣接している、王妃の間と、王族の居間の暗幕を引きちぎった。暗紫色に変色した腕を抱えながら戻ると、自分の上着を脱ぎ、入口に唯一燃えていた小さな炎で火をつけ、それを暗幕に投げつけた。

炎は一気に燃え上がり、応接の間を明るくした。

そこに見たものは、無数の百足の妖獸だった。

しかし、扉に灯った紫翠の光は衰えず、百足どもは黒い塵に変わり、炎によつて焼かれていった。焦げた臭いが、餽えた臭いに混じつて漂い始めた。黒煙が、部屋に充满する。

リグは慌てて窓を開け放つた。

「立てますか、閣下」

リグはフェンダーに肩を貸した。

「お前は大丈夫か？ エリオン様は？」

「エリオン様は、シャオン様とウエル様を」

フェンダーはそれ以上何も言わずに頷くと、リグの肩に掴まつた

まま、全く言つことを聞かなくなつた足を引きずりながら歩いた。

エリオンもまた、百足を踏み越しながら王の間に戻つた。  
そこは焼け焦げた匂いと、うずくまるシャオン、剣を構えたまま  
激しい風に巻かれるウェル、そして切り刻まれている黒い塊があつ  
た。

黒い塊からはいくつもの触手が伸びているが、激しい風がそれを  
切り、その度に黒い塵が舞い上がる。

エリオンは横目でその光景を見ながら、暗幕に手を伸ばした。  
ウェル側にある暗幕は一枚。エリオンのほうにも一枚。  
エリオン側のそれを一気にはがした。

だが、窓の外は真っ暗で、月明かりもない。

「なんだ！」

エリオンは愕然とした。  
すぐさま踵を返し、応接の間に駆け込む。  
そこにはリグに肩を借りたフェンダーがいた。応接の間はすでに  
炎に巻かれている。

その炎の明かりが王の間にも入ってきた。

ウェルが炎に気付く。

その顔に、あの薄い微笑が戻った。

剣を逆手に持ち替え床に突き立てると、胸の前で手を組む。手の中には、紫翠に輝く石があつた。鮮烈な光を発する石に、応接の間から新たに同じ紫翠の光が軌跡を残しながらなだれ込んできた。

光。炎。光。炎。風。

三つが一つになる。

エリオンも、リグも、フェンダーも、それを見ることは叶わなか  
つた。

あまりに激しく、光は閃光し散光した。

地の底から鳴り響く、体の臓腑を震わせるような不快な音が聞こえた。グリウス城が倒壊するのではないかと思われるほど、揺れが起つた。

長く。

低く。

静かになつた時には、王の間には何もなかつた。  
燃え盛つていた炎も消えていた。

応接の間の扉が荒々しく開かれる。

警護の衛兵と、身なりのよい男達が入つてきて、口々に何かを叫んでいた。

「エリオン様！ フエンダー閣下！」

聞き覚えのある叫び声で、二人は顔を上げた。

激しい光の残像が、直ぐには視力を回復させない。

応接の間は焼け爛れ、焦げた匂いと煙が充満している。

「お前は……」

「ゼギュウスにござります。内政大臣の」

「ああ……」

エリオンは氣のない返答をすると、無能呼ばわりしていた大臣の顔を見上げた。

「父、シェバは急死した。ああ、そう、医師を呼べ。詳しいことは皆の手当をしてからだ、よいな」

ゼギュウスは短く返答すると、言われたように手配した。

王の間に目をやると、そこには黒髪の男が一人血まみれで倒れている。

奥には、目を見張るような黄金の長い髪の下に人が倒れていた。  
その前に、大きく煤けた黒い染みが出来ている。

エリオンは、二人の肩がゆっくりと上下しているのを見て息をついた。

グリウスに朝が来た。

人々は早朝から商売のための用意をし、中央街道は夜明けと共に人の声が飛び交い始める。気の早い芸人達も、客寄せのための場所を誰よりも早く確保し、天幕を張りはじめた。

旅亭トラオにも、いつものように朝が来た。

日が昇ると同時に、宿泊客の朝食の用意が始まる。

治世十五年の祭り期間も、もうじきに終わる。そうすれば連日満室のこの忙しさからも開放されるだろう。

トレーネは息をついた。

食堂の椅子の一つに座つたまま、とうとう夜を明かした。使用人達が厨で仕事を始めた。その音を聞いて、トラオの玄関の扉を開けてみる。

日中からのあの暗い雲は、もうどこにもなかつた。空は澄み渡つて青く、遠く山裾は朝日が燃えて赤い。

「朝、が来た」

トレーネは急いで扉を閉めると、古参の使用人のもとへと駆け出した。

胸がちくちくと痛んだ。

急がなければ。

行かなければ。

その思いだけが、トレーネの胸の中を占拠している。

昨日の暗澹とした雲は、グリウスを通ったシェバ軍が通った時から発生した。

それこそがウェルが言っていた妖獣の力の証に違いない。

だが、今朝は晴れている。雲は消えた。

逸る心を抑えながら、仕事を使用人達に指図すると、トレーネは身一つでトラオを飛び出した。

神殿でトレーネを温かく迎えてくれたのはゲフュールだった。

「神官長様。エリオン様は？ 何かご連絡はありましたか？」

必死の形相で駆け込んできたトレーネを、ゲフュールは何も言わずに、まずは自分の居室に招き入れた。

「まあ、お掛けなさい」

ゲフュールはトレーネを椅子に座らせると、自ら温かな飲み物を入れて持つてきた。

トレーネはとても座つてなどいられなかつた。

エリオンが怪我をしなかつたか。本懐を遂げたのか。

そして、シャオン、ウエルがどうなつたのか。

父親のようなフェンダーや、リグは。

「ゲフュール様」

ゲフュールは急ぐトレーネに飲み物を勧めると、自らも口を付けていた。

「まだ詳しいことは分からんのだ。私とて、早く知りたいがな。だが、ウェルトス様の聖靈の使いが参つて、皆が無事であることは告げていつた」

「本当ですか！」

トレーネの瞳が瞬時に涙で潤んだ。

肩を落とし、よかつたと呟く少女に、ゲフュールは再び飲み物を勧めた。

柔らかな感触が、肌に触れていた。

滑らかで極上の絹の敷物が、少しひんやりとしていて心地よい。このままずつとこの心地よさに浸つていてほしい。

そう思つて体を丸めて寝返りを打つた。

「イ……！」

激痛に目が覚めた。

目は覚めたが、瞳は開けられなかつた。腸をつかまれたようなねじけた痛みが、足の先と脳天を突き抜けたのだ。

さらに腹を押さえようとした左の掌が、じりりと痛んだ。

「大丈夫ですか、シャオン」

抑揚のない声が耳に届く。

額に汗が浮かんだ。痛みはそれほどに激しい。

「ウェル？」

寝台の横に座る相棒が目にとまつた。

すけるように白い顔に、今度はシャオンが驚く。

ウェルの顔は真っ青だつた。唇にも色がない。ただ、いつも浮かべている微笑だけが同じなだけで、生気がないといつても過言ではないほどだ。今すぐに消え去りそうな、靈体のように存在感がない。

「お、ま……その顔、大丈夫かよ」

そう言つてから、改めて自分が豪奢な寝台に横たわっているのに気付いた。上を見上げると天蓋がついている。大きな窓からは青空が覗き、壁には絵画が飾られ、寝台の隣の小さな机には花が置かれている。明かりを灯す燭台にすら、シャオンには無用とも思える緻密な装飾がある。

「ここ、どこ？」

それを聞いて、ウェルが薄く笑つた。

「グリウス城です。覚えていませんか？」

シャオンは目を剥いた。

はつきり言つて、あの蝦蟇蛙のようやつに剣を突き立ててからの記憶が、異状に曖昧なのだ。

「ショバを仕留めました。シャオンのおかげです。あなたが身を挺してこの石を投げてくれなかつたら、私達はもう死んでいました」ウェルが右手を見せた。紫翠の石だ。

シャオンは痛む左手を目の前に翳した。

「これが、それで、この手は焼けてんだな」

必死だつたのであまり記憶にはない。ただ、焼け付くように熱い石をつかんだことは鮮明な記憶として残つていた。

「闇の力でつけられた傷はほぼ浄化できたと思います」

シャオンが目を剥いたままなので、ウェルがまた微笑んだ。

「ショバに、腹に風穴を開けられたのですよ。もう少しそれていたら、命はありませんでした。それにその傷は闇の力でつけられたのです。きちんと浄化しておかないと、そこから腐ってきます。シャオンの左目も、誰かがそうしてくれたからそれで済んでいるのでしょうか？」

「いや、わからねえよ。目の怪我の時は、長い間熱で意識がなかつたつて聞いてるし。

そうか、あの人はちゃんとしてくれたんだ

「あの人？」

シャオンは懐かしむように目を細めた。

「俺を助けてくれた人。盗賊だつたけど、いい人だつた。おかげで俺はウェルに会えたしな」

普段なら絶対口にしそうにならない言葉をさらりと言つて、シャオンは目を閉じた。

そのまま、意識は再び深い闇に落ちていった。

次に気付いた時、また同じように青空が見えた。

体をよじつても、痛みはあるが激痛と言つには大袈裟なほどに軽減している。

ふと思いつけて、左の手を見た。

まだ白い布が巻かれてはいるが、こちらは本当に痛みがない。そつと布を外してみると、手はわずかに引き攣れを残していた。

ゆつくりと体を起こしてみる。

異常なほど喉の渴きを覚えた。

部屋は無意味に広くて、今横たわる寝台のほかにも、それほど客が来ないだらうと思われるほどの幅の広い長椅子が四つもあり、部屋に置くこともないだらうと思われる石像まである。誰もいなかつた。

ここで叫んでも、誰も来ないような気がした。

隣の部屋まで声は届くだらうか、などと無用なことを考へていると、遠くから足音が一つ聞こえてきて、程なくして扉が開いた。

「エリオン」

「気付いたのか」

そう言つと、エリオンはまた部屋の外に出た。なにやらそこから指示を与えていくような声がして、エリオンは手に水差しを持ってやつて來た。

「気付いたようなので医師を呼んでおいた。どうだ、気分は？」

あれほど自分を毛嫌いしていたエリオンの態度が妙に優しいので、シャオンは思わず身構えた。

そのことに気付いたらしく、エリオンは珍しく微笑んで、言つた。そうして笑つてみると、華やかさを持つ彫の深い整つた顔立ちは、ウェルにも負けないくらい気品があつて綺麗に見えた。

「礼を言つ。おかげでショバ王は倒せた。グリウス城は、なんだか明るくなつた。無能だとばかり思つていた大臣達も、よく働いてくれている」

照れたように水差しを隣の机に置くと、飲むかと尋ねて水を入れてくれる。

シャオンが水を飲む間も、エリオンは至極穏やかに隣に座つていた。

「俺は何日くらい眠つていた？」

「三日たつた」

「フーンダー・ヤリグはどうした？ ウェルは？」

「フーンダーは妖獣に左足を喰い付かれて、かなり重症だ。リグは右手をやられた。だがウェル殿がきちんと傷を浄化してくれたらしい、医師たちも彼の手腕に舌を巻いていた。一人とも順調に回復している」

「そうか、よかつた」

あれは夢ではなかつたのだ。初めて目覚めたとき、隣にウェルはいた。自分の傷も見ててくれたのだ。

そう思つて、シャオンは冷水を浴びたように全身から血の気が引いた。

その時のウェルの顔を思い出して。あの血の氣のない真つ青な顔だ。

「ウェルは、どうした？」

早口に聞くシャオンに、エリオンは言い難そつて、間をおいた。シャオンはエリオンの次の言葉を待てずに体を起こし、腹部が痛んで思わず二つ折りになつた。

「無理をするからだ。別に死んだと言つてはいる訳ではなかつて」  
シャオンはエリオンをしつかり睨んだが、痛みのせいいか少しも凄みはなかつた。

「ウェル殿は眠つている。夜が明けて、その日の夜半までお前のそばに居たのだが……そこで意識を失つたらしい。死んだように動かないが、ちゃんと息はしているからな」

「よかつた」

心底安心したように息をつくシャオンを見て、エリオンは羨まし

そうに目を細めた。

「おかしな二人だな。お前達は。だが、助けられた。本当に礼を言う。我々だけであれば、シェバが城に入る前に、もう私は死んでいたろうつな」

「別に、礼なんか言われたかないよ。俺もウェルも、仇をとつたんだ。お前のためにやつたんじゃねえからな」

また体を横たえながら、シャオンはエリオンから視線をはずした。シャオンの左側に座るエリオンからは、横たわってあらわになつた顔の傷が痛々しく見えた。

目は完全に潰され、変色した皮膚は引き攣れている。エリオンは目を逸らさずに、じつとそれを見ていた。

「すまない」

それは小さな声だった。

シャオンは耳を疑つて振り返つた。左側の視野が狭いので、そうしなければエリオンが見えない。

そこには悄然としたエリオンがいた。

いつも堂々と、自治領主の威厳を失わなかつたのに。

「なんだよ」

シャオンの不機嫌そうな声が耳に届いたのか、エリオンは姿勢を正して話し出した。

「私とお前は、確かに年は変わらなかつたな。兄上達はお前のことといつも妖獣だと言つて蔑んでいた。母親も違うし、私も兄上達と同じようにいつもお前を睨んでいたように記憶しているのだ。噂では、皇帝が跡継ぎはシャオンだと公言して憚らなかつたと聞く。お前が死んだと聞いた時、兄上達は笑つていた。私も正直、妖獣の弟がいなくなつてホッとしたのを覚えている」

「そんな事は聞きたくないね」

「いや待つてくれ。そうではない。そんな話ではないのだ。お前はこれからどうするのだ？ 国に戻るつもりなら、私が兄上達にちゃんと説明する。これから私を助けてくれると言うのなら、グリウス

に留まつてくれるといい。フーンダーもそう言つていた

シャオンはあまりに突拍子もないことに、驚いて開いた口が塞がらなかつた。

「ウェル殿も、あの英知を捨てておくのはもつたらない。正当なグリウスの後継者なのだから、これも兄上に進言して、王としてグリウスにいてもらつつもりだ」

「ちょっととまてよ」

一人で勝手に決め付けたように話を進めるエリオンに、シャオンは憮然と口を曲げた。

「こうも掌を返したような態度をとられると、どう対処してよいのか分からなくなつてしまつ。

「どういう心境の変化だよ、それ」

「別に、気が変わつたわけではない。お前の事を好きになつたわけでもない。だが、お前とウェル殿が息をしているのを見た時、私は心底ほつとしたのだ。それだけだ」

エリオンは真摯な顔つきで、シャオンから田を逸らさず口に言つた。シャオンは思わず苦笑した。

「グリウスに残る？　国に帰る？」

そんな事は思つてもみなかつた。國、とは、一体どこをさすのか、もうシャオンにはどうでもいいことだつた。今更シェバ本国に戻つた所で、居場所などあるはずもない。

「あんな、俺は國に戻るつもりもないし、自分のことを王子だとも思つてねえ。第一そんな性分でもねえよ。堅苦しいことは大つ嫌いだしな」

「だが、グリウスを救つたのはお前達ではないか」

「だから、関係ねえつて言つてるじゃねえか」「なにが」

エリオンが不機嫌そうに、口をゆがめた。シャオンは笑いながら付け加えた。

「俺達は傷が治つたらさつさと消えるわ」

翌日、シャオンは歩けるようになった。

エリオンはあれ以来シャオンの元を訪問してこなかつた。

アキロを攻めるはずだった兵達にも説明しなくてはならないだろうし、アキロとの外交問題もある。シャオンは後で聞いたのだが、アキロにはシェバが消えた翌日早々に使者が立つて、何とか穩便に事が済んだらしい。もちろんアキロも無用な戦闘を避け、自国を守れたのであるから異論もなかつたであろう。

エリオンは今頃、他にも関所の取締りやら、治安の維持などで忙殺されているはずだ。

大臣たちは、といふと、今までどうやらメテスの闇の力によつて一種の無気力な状態に陥つていたらしい。本人達も、記憶が曖昧ではつきりしないという。

シャオンはその話をフェンダーから聞いて、ますます闇の妖力の恐ろしさを実感することになった。

フェンダーも杖で自由に歩けるまでに回復している。ひそかに剣を振つているという噂だ。

ただ、ウェルは目覚めなかつた。

死体のように横たわつたまま、身じろぎ一つしない。

枕元には紫翠の石が置かれていた。

シャオンはその隣で、じつとウェルが目覚めるのを待つた。歩けるようになつてさらに三日が過ぎていた。

シャオンは死人のように横たわるウェルの長いまづげを見ていた。女のように、長く綺麗なまづげだ。

これが女だつたら、グリウスの男どもがほつてはおかないと、不謹慎なことを考えていた時だつた。

ウェルのまづげが動いた。

「ウェル！ 気が付いたのか！」

耳元でそれだけ叫べば、どんな病人も目が覚めるのではないかと  
いうくらいの声だった。現に隣室に控えていた侍従が飛び込んで  
たくらいだ。

ウールはゆっくりと目を開けた。

瞳は初め、何も映していないかのように焦点が合っていないかった。  
徐々に青い瞳に生気が戻る。

待っていた瞬間が訪れた。

ウールが、いつものあるのかないのか判然としない微かな笑を口  
元に湛える。

「そんな大きな声を出さなくとも聞こえます」

シャオンは右目を見開いたまま口をまるで空氣を貪る魚のように  
動かした。

「どれほど、眠っていました？」

「七日だ」

いかにも不機嫌といつぶつ、「声を荒げて返事を返す。

「シャオンの怪我は」

「おかげさんで、どうも」

「フェンダー殿やリグは？」

「はいはい、どうも」

「それはよかったです」

そう言つてまた瞳を閉じてしまう。

「おら、寝るんじゃねえ、帰るぞ。いつまでもここにしちゃあ、悪  
いぜ」

ウールは瞳を閉じたまま、小さく頷いた。

「そうですね。ここには思い出があります。私には少し辛いです  
から」

ウールの端整な顔が別段動いたわけでもなかつたが、その言葉が  
シャオンには重かつた。喉元が焼けるように痛く、何かが痞えたよ  
うに遣り切れない思いがこみ上げてくる。すっかりその事を失念し  
ていた自分の愚かさを呪いたかった。

「何か欲しいものはねえか？喉が渴いた、とかよ」

ウェルはうつすらと瞳を開けた。わずかばかり顔をシャオンに向けて、至極眞面目にこう言つた。

「トレー・ネが飲ませてくれた、あの果実酒がいいです」  
シャオンはあまりの返答に声も出なかつた。

程なくシャオンとウェルは神殿に戻ることになつた。

エリオンが再び姿を見せたのは、二人が神殿に戻る前日の事だつた。

「引き止めたつて無駄だぞ」

「分かつていい」

シャオンの言葉にエリオンは憤然として寝台の近くにある長椅子に腰をかけた。

ウェルはまだ寝台に横になつたままだ。シャオンは一寸のほどんどをウェルの部屋で過ごしている。

「なんと言つていいか分からない。本当に感謝している。ウェル殿、本来ならグリュックは貴方に返さねばならぬのに」

「いいえ」

ウェルは間をおかずに返答した。晴れやかな表情は、どこか何かを吹つ切つたような、そんなウェルの心中を映し出しているかのようだ。

「私はそのような器にはありません。それよりも、もっと世界を見てみたいのです。私の知らない、広い世界があるような気がします。そこに、私を本当に必要としている場所が、あるかもしれません」  
淡々とした語りだつたが、それは新しい何かを求めるウェルの決意だつたのかもしれない。シャオンはそう感じた。

シャオンがそうであるように。

心にわだかまっていたものが、風船が萎んでいくように消えていつた。

妖獸に見せられた母、マリノアの姿が今も瞼に焼き付いている。十五年ぶりに見た、父、シェバ皇帝は、すでに干からびた化け物だった。

それらはすべて、彼方に消えてゆくようであった。

ウェルも笑っている。こんな明るい笑みを見たのは初めてだ。

「ウェル殿。グリュックは必ず再建してみせる。本国の兄も、きっとシェバ帝国を立て直す、無論私も全力を尽くしたい」

「期待しています」

エリオンはシャオンが見ても眩しいくらいの姿で堂々と立ち上がった。厳然たる姿は人の上に立つ度量を感じさせた。

エリオンの差し出した手を、ウェルも取った。

そのまま、エリオンはシャオンを振り返った。

「いつでも戻ってきて欲しい。それまでに、グリウスを、素晴らしい都にしてみせる。グリュックをコウーワ大陸で一番の国にしてみせよう。故郷というに相応しい所に、な」

故郷という言葉が、シャオンには希望のように思われた。

神殿に戻る当口、フェンダーもリグも、シャオンを引きとめようとしたが、フェンダーは結局いつつてシャオンを送り出してくれた。

「いつでも来い。私のすべてを、教えてやるからな」

さらに無精で生やしたようなひげが濃くなつたフェンダーは親指を立てて不敵に笑つた。

「みな、私達の心配をしてくれていますね」

神殿に向かう馬車の中で、まだ辛そうに背を揺れる車体に預けるウェルが言つ。

「余計な心配だな。俺達は何も変わりはしない。そつだろ?」

ウェルはそれに微笑みで返した。

神殿に着くと、涙でぐしょぐしょになつたトレーネと、穏やかな

表情のゲフュールに迎えられた。

神殿の庭園での、久しぶりの再会であった。

「ウェル様、シャオン様、お帰りなさい」

そう言つて、トレーネは懐から一枚の布を取り出した。シャオンの髪の色と同じ、それよりもやや淡い黒であった。

「様はだめだ、って言つたろうが」

トレーネはシャオンの腕をつかんで引っ張つた。

「屈んでください、シャオン様」

「だから」

ふわりとシャオンの前髪が持ち上げられた。左の傷があらわになつて、シャオンは慌ててそれを隠そうと手を出した。

そこに、トレーネの取り出した布が、巻かれた。眼帯の役割を果たすその布は、シャオンの髪に紛れて上手く左の痛々しい傷を隠してくれる。

「よかつた、ぴつたりで！」

トレーネは嬉しそうに手を合わせた。

シャオンは耳まで赤くなつていた。

「これは良いですね、シャオン」

そつと傷に手を当てる。巻かれた布にトレーネのぬくもりが残つているように思われた。

帰る場所を、シャオンは見つけたような気がした。

生れて初めて得た場所だ。

今まで帰る場所などなかつた。

ショバ帝国も、その後さすらつた長い時間も。

グリウスには、仲間がいる。

何より、そして誰より、シャオンはウェルという友人を得た。得がたい絆を結ぶ事ができた。

ウェルがあるかないかわずかな笑みを湛えている。しかしそれはもう作り笑いではない。

傷の癒えたウェルとシャオンは、グリウスを後にした。

行き先は決まっていない。

「金もたんともらつたしな」

「旅の友も頂きましたよ」

「とも？」

ウェルは背に担いだ袋から、ビンを一本取り出した。

「お前！ 酒、貰ったのかよ」

「いけませんか？」

「いけませんか、ってお前……」

「いいじゃありませんか。さあ、何か仕事を探しましょう」

「金もらつたのに、仕事すんのかよ。でもまあ、妖獣退治はしばらくな

遠慮しとくわ」

「おや、何故ですか？」

「おまえ、やんのかよ」

「別に、いいですよ」

ウェルは胸元に手を当てた。

心地よい風が吹く。

シャオンは真っ直ぐに空を見上げた。

もう気にしなくてもいい。

傷を隠す必要を感じなかつたからだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5319d/>

幻妖帝国～グリウスの章・青き黎明の灯火

2010年10月8日13時15分発行